

千葉県八千代市

麦丸宮前上遺跡 e 地点発掘調査報告書

-宅地造成に伴う埋蔵文化財調査-

2018

日新住宅販売株式会社
八千代市教育委員会
株式会社地域文化財研究所

千葉県八千代市

麦丸宮前上遺跡 e 地点発掘調査報告書

-宅地造成に伴う埋蔵文化財調査-

2018

日新住宅販売株式会社
八千代市教育委員会
株式会社地域文化財研究所



調査区全景 西から

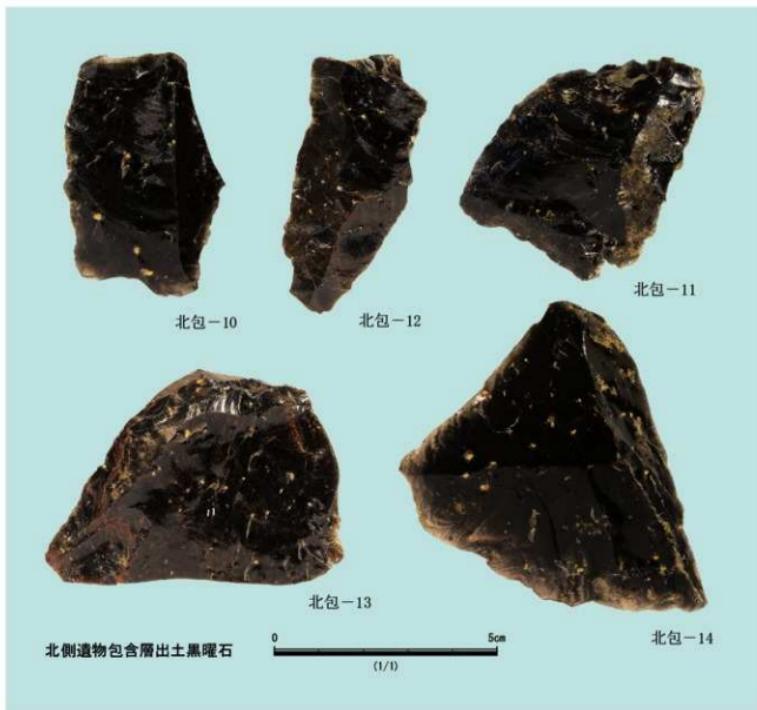
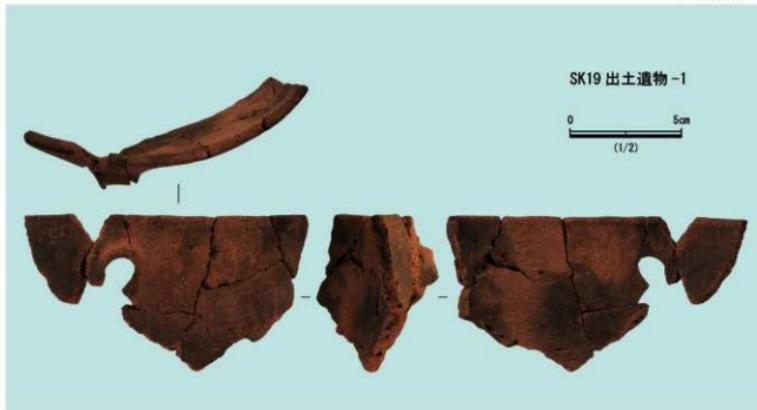


調査区全景 北から



調査区全景 * I・II・III区の写真を合成。





例　言

1. 本書は宅地造成に伴い埋蔵文化財の発掘調査が実施された、麦丸宮前上遺跡e地点の発掘調査報告書である。
2. 調査は日新住宅販売株式会社より委託を受けた株式会社地域文化財研究所が八千代市教育委員会の指導の下に行った。
3. 遺跡の所在地及び面積、調査期間、担当者など調査体制は下記の通りである。

所 在 地 千葉県八千代市麦丸字宮前 1395-1, 1398-1

面 積 3.540m²

調 査 期 間 平成 29 (2017) 年 10 月 30 日～平成 30 (2018) 年 1 月 18 日

調査担当者 高野浩之

調 査 員 大橋 生

調査参加者 [発掘調査] 青木美和子 青山正博 泉祐司 今野秀樹 宇田川宗廣
小野裕司 小玉富夫 斎藤恵子 斎藤京子 斎藤穰 高木秀夫 高橋千恵
田口みづき 田中成光 千葉由美子 野村浩史 古里兼吉 横勝雄
松田精作 深山恒男 山本清二

[整理調査] 野村浩史 川村理華 木村春代 小林真千子 藤井陽子 増田香理

4. 整理調査及び本書の作成は株式会社地域文化財研究所において高野・大橋が担当した。
5. 執筆分担は第1章第1節が宮澤久史（八千代市教育委員会）、第1章第2～4節、第2章、第4章第1節が大橋、第1章第5節、第4章第2節が高野である。
縄文土器・弥生土器については斎藤弘道氏に、石器については川口武彦氏にご教示いただいた。
6. 出土した縄文時代草創期とみられる土器片に付着した炭化物を対象に放射性炭素年代測定法（AMS法）による年代測定をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託して実施した。結果は第3章に掲載している。
7. 調査記録及び出土品は、一括して八千代市教育委員会が保管・管理している。
8. 調査においては下記の方々にご指導・ご協力を賜った(順不同・敬称略)。

株式会社エスティホーム 日新ホーム株式会社 八千代市教育委員会 教育総務課 文化財班

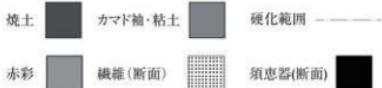
パリノ・サーヴェイ株式会社

鈴木 薫 堀江卓也 斎藤弘道 川口武彦 赤堀岳人 田中義文

凡 例

1. 遺構図は国家標準直角座標系（世界測地系）を基準に作成し、方位は座標北を示す。
2. 遺跡名・遺構等は以下の略号で示した。

麦丸宮前上遺跡 e 地点：153 e 壁穴建物跡：SI 掘立柱建物跡：SB 槽状遺構：SD
土坑：SK ピット：Pit 捣乱：K
3. 第4図は国土地理院発行 1/50,000 地形図「佐倉」を、第5図は 1/20,000 「明治 15 年測量 白井橋本村」を、第6図は 1/2,500 「八千代市都市図」をそれぞれ使用し、加筆した。
4. 遺構の形状及び規模は、基本的に現存している形状で判断した。遺構平面の計測は壁上端を基準とし、深さは検出面から計測したものである。主軸方向は長軸線を軸線とし、座標北に対し東西に何度傾いているかを示した。
5. 遺構図における土層説明で、「φ」は粒径を表し、規模をミリ単位とした。微・少・中・多量は土層内における含有物の割合を 4 区分したものであり、それぞれ、微量は 2% 以下、少量は 3 ~ 9% 程度、中量は 10 ~ 19% 程度、多量は 20% 以上を示す。
6. 遺構図中の●が土器、○が土製品、▲が石器・石製品を表す。それ以外の場合は、図中に凡例を提示した。
7. 遺構・遺物の色調表記は『新版標準土色帖 2003 年版（財團法人日本色彩研究所ほか）』を使用した。
8. 採図の縮尺は、遺構平面図・断面図が 1/60 を基本とし、炉・カマドなどを 1/30 とした。遺物は土器類は 1/3・1/4、石器・石製品が 2/3・1/3 を原則とし、いずれも各図にスケールを示した。遺物写真図版の縮尺は不統一である。
9. 文章及び出土遺物観察表の計測値は（ ）が復元値、（ ）が残存値を示す。遺物観察表の単位は原則 cm 及び g である。
10. 遺物番号は本文、採図、写真図版共に一致している。
11. 出土遺物集計表中の点数は、接合されたものは 1 点と数えているが、同一個体であることが明らかであっても接合しないものはそれぞれの破片を 1 点としている。
12. 遺構実測図・遺物実測図中の網掛けおよび土器類記号は下記のとおりである。



13. 参考・引用文献は本文中の最後に一括して掲載した。

目 次

卷頭図版

例 言

凡 例

目 次

第1章 調査経過と遺跡の立地環境	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と調査経過	1
第3節 基本層序	3
第4節 遺跡の位置と環境	3
第5節 妙丸宮前上遺跡における既往の調査について	9
第2章 検出された遺構と遺物	
第1節 調査の概要	11
第2節 縄文時代	12
(1) SK19 と遺物包含層	12
(2) 土坑	18
第3節 弥生時代	22
(1) 壺穴建物跡	22
第4節 古墳時代	30
(1) 壺穴建物跡	30
第5節 奈良・平安時代	35
(1) 壺穴建物跡	35
(2) 掘立柱建物跡	43
(3) 溝状遺構	44
第6節 中・近世	46
(1) 溝状遺構	46
(2) 土坑	48
(3) 焼土	58
(4) ピット	58
第7節 各時期の遺構外出土遺物	59
第3章 自然科学分析	63
第4章 まとめ	
第1節 土地利用の変遷	65
第2節 北側遺物包含層から出土した縄文土器について	67

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1図 確認調査トレンド配置図	1	第30図 SI1	35
第2図 調査区区域区分図	2	第31図 SI1出土遺物	36
第3図 基本堆積土層図	3	第32図 SI2	37
第4図 周辺遺跡分布図	4	第33図 SI2出土遺物	38
第5図 周辺旧地形図	6	第34図 SI5	38
第6図 調査範囲及び既往の調査地点	8	第35図 SI5カマド・SI5出土遺物	39
第7図 調査区全体図	10	第36図 SI8・SI8出土遺物	40
第8図 SK19	12	第37図 SI10	41
第9図 SK19出土遺物	12	第38図 SI10カマド・SI10出土遺物	42
第10図 調査区北側遺物包含層	14	第39図 SB1	43
第11図 北側遺物包含層出土遺物①	15	第40図 SB1出土遺物	44
第12図 北側遺物包含層出土遺物②	16	第41図 SD3	45
第13図 北側遺物包含層出土遺物③	17	第42図 SD1	46
第14図 東側遺物包含層出土遺物	18	第43図 SD2	47
第15図 SK1・2・3・10・43・44	20	第44図 SK4・5・6・7・8・9・11・12・13・14	49
第16図 SK45・46・47・48・49	21	第45図 SK15・16・17・18・20・21・22・23・24	51
第17図 SI3	22	第46図 SK25・26・27・28・29・30・31・32・33	55
第18図 SI3炉	23	第47図 SK34・35・36・37・38・39・40・41・42	57
第19図 SI3出土遺物	23	第48図 燃土1	58
第20図 SI4・SI4出土遺物	24	第49図 Pit1・2・3・4・5・6・7・12・15	59
第21図 SI6	25	第50図 道構外出土遺物	60
第22図 SI6出土遺物	26	第51図 历年較正結果	64
第23図 SI7	27	第52図 楔文時代道構分布図	65
第24図 SI7炉・SI7出土遺物	28	第53図 弦文時代道構分布図	65
第25図 SI9	30	第54図 古墳時代道構分布図	66
第26図 SI9炉・SI9出土遺物①	31	第55図 奈良・平安時代道構分布図	66
第27図 SI9出土遺物②	32	第56図 中・近世道構分布図	67
第28図 SI11	34	第57図 北側遺物包含層遺物分布図	68
第29図 SI11出土遺物	35		

表目次

第1表 麦丸宮前上遺跡調査一覧表	9	第11表 SI1出土遺物観察表	36
第2表 北側遺物包含層出土遺物一覧表	13	第12表 SI2出土遺物観察表	38
第3表 SK19・北側遺物包含層出土遺物観察表	17	第13表 SI5出土遺物観察表	39
第4表 東側遺物包含層出土遺物観察表	18	第14表 SI8出土遺物観察表	41
第5表 SI3出土遺物観察表	24	第15表 SI10出土遺物観察表	42
第6表 SI4出土遺物観察表	25	第16表 SB1出土遺物観察表	44
第7表 SI6出土遺物観察表	26	第17表 道構外出土遺物観察表	61
第8表 SI7出土遺物観察表	29	第18表 出土遺物集計表	62
第9表 SI9出土遺物観察表	33	第19表 放射性炭素年代測定結果	64
第10表 SI11出土遺物観察表	35		

写真図版目次

- 図版1 調査前現況①／調査前現況②／I区南側全景／I区北側全景／I区全景(空撮)
- 図版2 II区全景(空撮)／II区全景①／II区全景②／II区東側全景／III区南側全景
- 図版3 III区全景(空撮)／IV区北側全景①／III区北側全景②／III区南側全景①／III区南側全景②
- 図版4 北側遺物包含層遺物出土状況(西側集中地点)
／北側遺物包含層①／北側遺物包含層②／
北側遺物包含層遺物出土状況近景①／北側遺物
包含層遺物出土状況近景②
- 図版5 北側遺物包含層遺物出土状況(中央部集中地
点)／北側遺物包含層遺物出土状況近景③／
SK19 遺物出土状況／SK19 土層断面／SK19
全景
- 図版6 基本堆積土層／SK1 土層断面／SK2 全景／
SK3 全景／SK43 全景／SK44 全景／SK45 全
景／SK46 全景
- 図版7 SK47 全景／SK48 全景／SK49 全景／SI3 土層
断面／SI3 遺物出土状況／SI3 全景／SI3 炉／
SI4 土層断面
- 図版8 SI4 遺物出土状況／SI4 全景／SI4 挖り方土層
断面／SI4 挖り方全景／SI6 土層断面／SI6
遺物出土状況／SI6 遺物出土状況近景／SI6
全景
- 図版9 SI6 炉／SI6 挖り方全景／SI7 土層断面／SI7
遺物出土状況／SI7 遺物出土状況近景／SI7
全景／SI7 炉・SK25／SI9 土層断面
- 図版10 SI9 遺物出土状況／SI9 遺物出土状況近景①
／SI9 遺物出土状況近景②／SI9 遺物出土状
況近景③／SI9 遺物出土状況近景④
- 図版11 SI9 全景／SI9 遺物出土状況近景⑤／SI9 炉
／SI9 挖り方土層断面／SI9 挖り方全景
- 図版12 SI11 遺物出土状況及び土層断面／SI11 全景
／SI11 炉／SI11 挖り方全景／SI11 土層断面
／SI11 遺物出土状況／SI11 全景／SI11 挖り方
土層断面
- 図版13 SI1 挖り方全景／SI2 検出状況／SI2 土層断
面／SI2 遺物出土状況／SI2 全景／SI2 カマ
ド／SI2 カマド掘り方／SI5 土層断面
- 図版14 SI5 遺物出土状況／SI5 カマド土層断面／SI5
全景／SI5 挖り方土層断面／SI5 挖り方全景
／SI8 土層断面／SI8 遺物出土状況／SI8 遺
物出土状況近景
- 図版15 SI8 全景／SI10 土層断面／SI10 遺物出土状況
／SI10 全景／SI10 カマド土層断面／SI10 挖
り方土層断面／SI10 挖り方全景／SI10 カマ
ド掘り方
- 図版16 SB1 全景／SB1-P1 土層断面／SB1-P3 土層
断面／SB1-P7 土層断面／SB1-P8 土層断面
- 図版17 SD2-3 土層断面(A-A'・B-B')／SD1 全景
／SD1 土層断面(C-C')／SD3 土橋全景
／SD3 土橋土層断面
- 図版18 SD2-3 全景／SD2-3 土層断面(C-C')／SD2
土層断面(D-D')／SK4 全景／SK5 全景
- 図版19 SK7 全景／SK8 全景／SK9 全景／SK11 土層
断面／SK12 全景／SK13-14 全景／SK15 全
景／SK22 全景
- 図版20 SK23 全景／SK24 全景／SK26 全景／SK27
全景／SK30 全景／SK31 全景／SK32 全景／
SK33 全景
- 図版21 SK34 全景／SK35 全景／SK36 全景／SK37
全景／SK39 全景／SK40 全景／SK41 全景／
燒土1 全景
- 図版22 SK19.北側・東側遺物包含層出土遺物
- 図版23 SI3-4-6-7 出土遺物
- 図版24 SI9 ①出土遺物
- 図版25 SI9 ②・11-1-2-5-8 出土遺物
- 図版26 SI10-SB1. 道構外出土遺物



第1章 調査経過と遺跡の立地環境

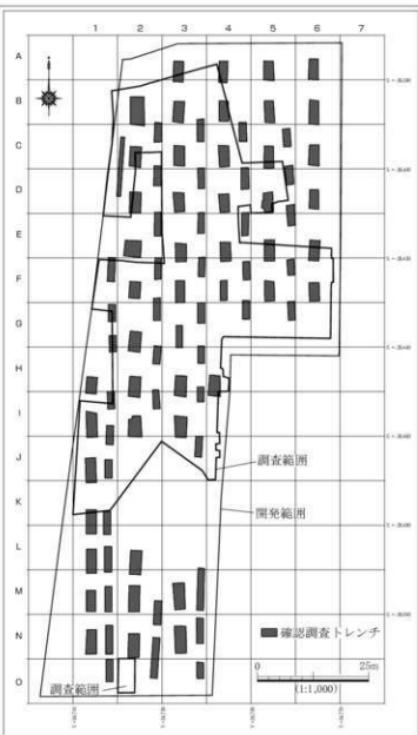
第1節 調査に至る経緯

平成28年12月5日、日新住宅販売株式会社代表取締役 香佐原滋之氏（以下、事業者）から「埋蔵文化財の取扱いについて（確認）」の文書が八千代市教育委員会（以下、市教委）に提出された。市教委は現地踏査を行い、開発面積6,921.39m²の内、6,301.39m²が周知の埋蔵文化財包蔵地（麦丸宮前上遺跡）に含まれると判断し、12月21日、その旨を事業者に回答した。回答後、事業者と協議を行い、遺跡の範囲、性格等を明らかにするための確認調査を実施するに至った。12月5日、事業者から文化財保護法93条の届出が提出され、市教委は準備が整った平成29年6月12日に確認調査を開始した。調査は、6月28日まで行い、弥生時代の堅穴建物跡、古墳時代の堅穴建物跡等を検出し、協議範囲は3,540m²となった。この結果を受け、市教委と事業者で協議が行われ、記録保存（発掘調査）の措置をとることになった。調査の実施については、民間調査機関による実施が合意され、市教委は、民間調査機関各社から調査計画書・積算書の提出を求めた。事業者との協議を重ね、適正な調査実施が可能と判断した調査機関の中から株式会社地域文化財研究所が選定された。平成29年9月28日、事業者、株式会社地域文化財研究所、市教委との間で発掘調査の実施に関する協定書を締結し、同日、株式会社地域文化財研究所から市教委に文化財保護法92条の届出が提出され、本調査実施に至った。

第2節 調査方法と調査経過

発掘調査は、平成29年10月30日から平成30年1月18日までの2ヶ月半にわたり実施した。事前に行われた確認調査（第1図）において検出された遺構を中心に調査範囲が設定された。調査にあたっては調査を終了した地点から部分的に開発工事を行う予定であったため、便宜上、調査区をI～III区に分け（第2図）、I区から順に調査を進めていった。

表土掘削は重機を使用し、発生土は工事中に搬出するという工程の都合により、I～III区の全ての表土掘削を行って北東側調査区外の一ヶ所に集積させた。



第1図 確認調査トレーンチ配置図

測量は国家標準直角座標IX系（世界測地系）に基づいた基準点・水準点測量を行い、調査区に合わせた10m四方のグリッド方眼紙を設置した。その後はグリッド杭を基準に遺構平面実測を随時行った。

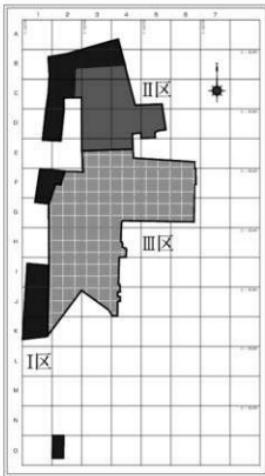
遺構覆土中から出土した遺物については、原則として位置を公共座標を基準に3次元で記録した。また、遺構の実測については平面・土層断面共に縮尺1/20を原則とし、カマドなどは状況に応じて縮尺1/10とした。写真撮影にあたっては35mmモノクロフィルム、35mmカラーリバーサルフィルム、デジタルカメラを併用し、適宜、記録撮影を実施している。

I区の調査は11月1日より遺構確認を行い、奈良・平安時代の堅穴建物跡2棟(SI1・2)と主に中・近世のものとみられる土坑20基、ピット4基、III区へと延びる溝跡3条(SD1～3)を検出した。翌2日からは各遺構の調査を開始し、20日までには各遺構ごとに随時、写真撮影及び実測等の記録作業を進め、翌21日に1回目の空撮を実施、27日には八千代市教育委員会の終了確認を得てI区の調査を終了した。

II区の調査はI区の調査と併行し、11月20日より遺構確認を行い、弥生時代の堅穴建物跡4棟(SI7)、奈良・平安時代の堅穴建物跡2棟(SI8・10)と主に中・近世のものとみられる土坑9基、焼土跡1基と弥生時代堅穴建物跡の周囲を中心にピット6基を検出した。11月28日からは各遺構の調査を開始し、12月12日までには各遺構ごとに随時、写真撮影及び実測等の記録作業を進め、12月13日に2回目の空撮を実施、18日には八千代市教育委員会の終了確認を得てII区の調査を終了した。

III区の調査はI・II区の調査とほぼ同時併行で遺構確認を行い、弥生時代の堅穴建物跡4棟(SI3・4・5・6)、古墳時代の堅穴建物跡2棟(SI9・11)、奈良・平安時代の堅穴建物跡1棟(SI5)とI区から延びる溝跡3条(SD1・2・3)のほかに縄文時代の土坑7基と主に中・近世とみられる土坑13基、ピット5基を検出した。12月からは各遺構の調査を開始した。12月28日から翌平成30年1月8日まで年末年始の調査の長期休止を挟み、1月11日までには各遺構ごとに随時、写真撮影及び実測等の記録作業を進め、1月12日には3回目の空撮を実施、18日には八千代市教育委員会の終了確認を得て、全ての調査を終了した。

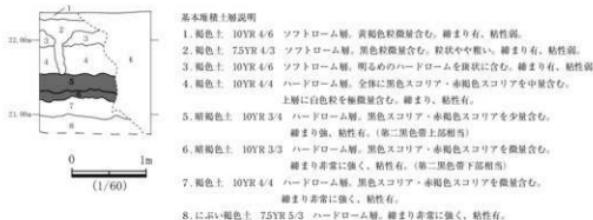
整理調査は平成30年1月29日から開始した。出土した遺物全てを水洗いし、乾燥後に各遺物に対し可能な限り注記を行った。注記に際しては麦丸宮前上遺跡e地点の遺跡略号「153e」と出土地点を記載した。出土した遺物は接合・復元作業を行い、その後全て分類して種別や個体・破片ごとの点数を数え、出土遺物集計表(第18表)に掲載している。遺物は全て原寸大で実測し、ロットリングを使用してトレースを行い、掲載遺物写真はデジタルカメラを使用し撮影している。一方、遺構図は修正を加えた上でデジタルトレースを行った。遺構図作成及び原稿執筆は遺物の整理と併行して進めた。編集はDTPソフトを用い報告書を作成し、印刷所へ入稿した後は、校正を重ね、報告書の刊行に至った。



第2図 調査区域区分図

第3節 基本堆層

基本堆積土層の確認は、I区K-1グリッドで大きな擾乱の深度を確認するために掘り下げた部分を利用し、更に1.5m四方の範囲を拡張して、観察を行った（第7図・図版6）。調査区北側と東側の傾斜地により形成された遺物包含層堆積部分（第2章・第2節参照）を除き、大部分が平坦面で3層（ソフトローム層）上面が各遺構の検出面となっている。現地表より遺構確認面までは30~40cmとなる。遺構確認面から1.6m下層まで掘り下げ土層を観察しており、立川ローム層第二黒色帯相当と想定される層を掘り抜いている。旧石器時代の遺物は検出されなかった。



第3図 基本堆積土層図 (S=1/60)

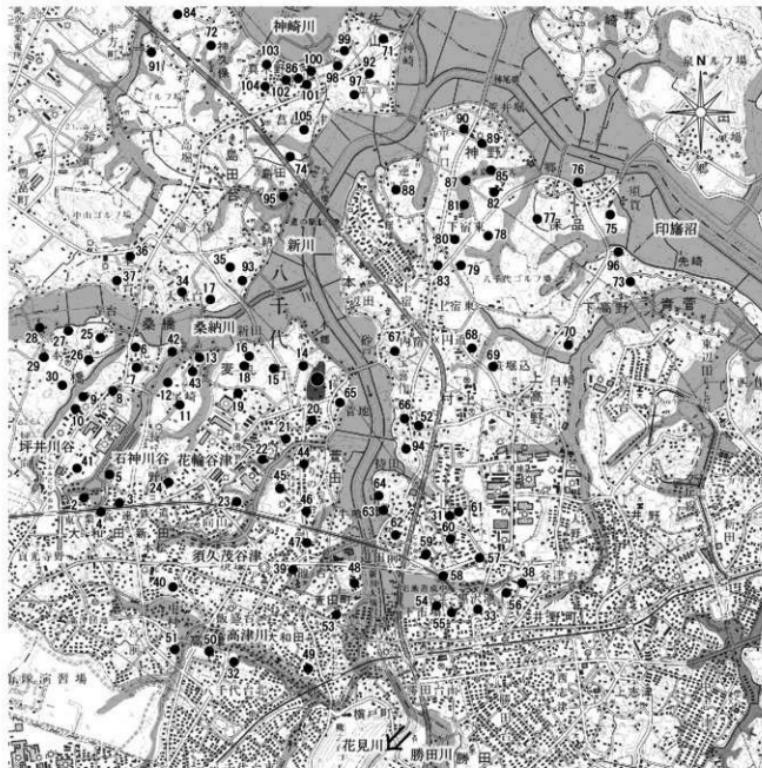
第4節 遺跡の位置と環境

八千代市は下総台地の北西部に位置する。市域を占める台地は樹枝状に谷が入り込む複雑な地形を形成し、谷沿いの台地上には各時代の遺跡が数多く点在している（第4図）。丸宮前上遺跡周辺の地形を概観すると、現在は花見川に接続され東京湾へと放水されているが、かつては印旛沼へと注いでいた新川が南流し、支流の桑納川、支谷となる須久茂谷津とともに三方が大きく区切られている。更に本地点の周囲には浅い小支谷が入り込むことで、半島状の舌状台地が形成されている（第5-6図）。本遺跡の立地する標高は20~22mを測り、緩やかに南から北の台地突端に向って傾斜している。新川との比高差は13mである。

近隣には今回の調査に関連する弥生時代~古墳時代前期の大規模集落を検出している萱田遺跡群の一部を為す権現後遺跡(20)やヲサル山遺跡(21)、音戸ノ台遺跡(65)などの展開が見られ、他の各時代にも重要な遺跡が市内には数多く所在する。以下では時代ごとの周辺遺跡を概観する。

旧石器時代 本跡南側に隣接する萱田遺跡群の権現後遺跡(20)、ヲサル山遺跡(21)、北海道遺跡(44)、坊山遺跡(45)、井戸向遺跡(46)、白幡前遺跡(47)では、合わせて6つの文化層より遺物集中地点241か所、炉跡1基が検出され、17,215点（石器15,072点、礫・砾片2,143点）もの遺物が出土した。最も古い立川ロームⅨ・X層からは局部磨製石斧が出土し注目される。須久茂谷津奥部の向山遺跡(23)では遺物集中地点、新川対岸の村上込ノ内遺跡(60)ではⅢ層の蝶群、新川上流の沖塚遺跡(55)では3ヶ所のブロック群が検出されて、他にも高津川流域の一本松前遺跡(40)や高津新山遺跡(50)、神崎川流域の島田地区の間見穴遺跡(105)や神野貝塚(89)、桑納川から更に分かれた石神川最奥部のライノ作遺跡(3)でも遺物集中地点が検出されるなど貴重な資料が提供され、県内でも該期の遺跡が比較的多い地域となっている。

縄文時代 旧石器時代終末から草創期の遺物とされる石器が市内でも多く確認されている。白幡前

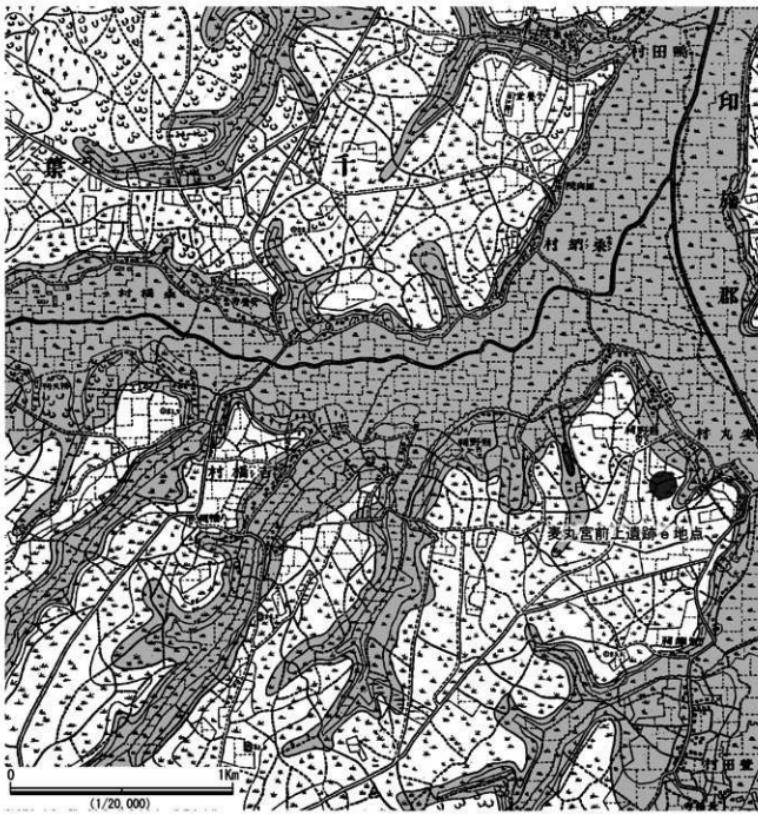


1. 丸山前上道路	16. 新田道路	31. 村上一号墳	46. 丹那道路	61. 名主山道路	76. 大門山道路	91. 原山道路
2. 伴ノ台道路	17. 奈鶴新田道路	32. 内込道路	47. 白幡前道路	62. 間間内道路	77. 那道跡	92. 道地道路
3. ライノ作道路	18. 新田台道路	33. 黒沢台古墳	48. 川崎山道路	63. 正定前道路	78. 上谷道路	93. 桑納古墳群
4. ライノ作跡道路	19. 丸山台道路	34. 大東台道路	49. 球場古墳	64. 持田道路	79. 雷南道路	94. 西山道路
5. 大相田新田芝山道路	20. 推現後跡跡	35. 桑納道路	50. 高尾新山道路	65. 菅地ノ台道路	80. 雷跡	95. 朝城城跡
6. 炒見前道路	21. ワサル山道路	36. 追分道路	51. 商都跡跡	66. 七百余所神社古墳	81. 江山北道路	96. 丸和西原道路
7. 洪内道路	22. ワサル山南道路	37. 本郷台道路	52. 宮内道路	67. 米木城跡	82. 栗谷道路	97. 平行台古墳群
8. 内野道路	23. 向山道路	38. 新林道路	53. 上ノ山道路	68. 阿蘇中学校東側道路	83. 下宿山道路	98. 田波山道路
9. 西内野道路	24. 長兵南野山道路	39. 池ノ台道路	54. 沖塚古墳	69. 平足道路	84. 作山道路	99. 佐山貝塚
10. 西内野街道路	25. 古野都幾道路	40. 一本松前道路	55. 沖塚道路	70. 下野新山道路	85. 境屋道路	100. 佐山的道路
11. 吉柳芝山道路	26. 吉柳新山道路	41. 内野南道路	56. 二重城跡跡	71. 子の神山道路	86. 真大寺向山道路	101. 真木寺古墳
12. 平作道路	27. 大作道路	42. 吉柳城跡	57. 村上第1塚群	72. 妙正神道路	87. 向境道路	102. 東山久保道路
13. 猪子山道路	28. 青戸道路	43. 尾崎の跡	58. 村上第2塚群	73. 南谷道路	88. 逆水道路	103. 瓜ヶ作道路
14. 丸山道路	29. 東向道路	44. 北海道道路	59. 枝上神社古墳	74. 真田込ノ内道路	89. 神野貝塚	104. 松原道路
15. 水神道路	30. 西芝山道路	60. 低山道路	60. 村上込ノ内道路	75. おおひた道路	90. 神野芝山古墳群	105. 間見穴道路

第4図 周辺遺跡分布図 (S=1/50,000)

遺跡(47)、仲ノ台遺跡(2)、高津新山遺跡(50)、池ノ台遺跡(39)では石槍が、権現後遺跡(20)、吉橋芝山遺跡(11)、おおびた遺跡(75)、高津新山遺跡で有舌尖頭器が出土している。次いで早期の遺跡として権現後遺跡で出土した井草1式土器を市内最古とし、早期前葉撫糸文期から早期後葉条痕文期までの炉穴や陥し穴が台地上で多数確認された。高津新山遺跡では撫糸文期の堅穴住居跡1軒が検出されている。瓜ヶ作遺跡(103)では早期後半の炉穴93基、ヲサル山遺跡(21)では条痕文期を主とした炉穴19基、陥し穴1基、間見穴遺跡(105)では撫糸文期花輪台式土器や早期後葉の堅穴住居跡4軒、堅穴状遺構2基、炉穴27基、土坑7基、小貝塚20か所、内野南遺跡(41)では早期後半の堅穴住居跡3軒、炉穴10基などが検出されている。他にも撫糸文期稻荷台式土器や条痕文系土器が多く出土し、328基の炉穴を検出した上谷遺跡(78)や撫糸文期花輪台式、平坂・天矢場式が出土し、炉穴11基を検出した向境遺跡(87)などがある。隣接する麦丸遺跡(14)でも早期の炉穴が1基確認されている。前期では、低調な関山式期から黒浜式期に至り遺跡数が増加する傾向にある。内野南遺跡(41)では黒浜式期住居跡8軒、仲ノ台遺跡(2)では黒浜式期住居跡10軒、浮島式期の小堅穴状遺構1基、ワイノ作遺跡(3)では黒浜式期住居跡1軒、ワイノ作南遺跡(4)では黒浜式期住居跡24軒とマガキを主体とした地点貝層1ヶ所、大和田新田芝山遺跡(5)では黒浜式期住居跡3軒が検出されている。以上はいずれも花輪谷津最奥部で近接しており大きな纏まりを形成していることが窺える。他にも新林遺跡(38)では浮島・興津式期の土坑41基、二重掘遺跡(56)では浮島・興津式期の堅穴状遺構1基、土坑37基、瓜ヶ作遺跡(103)では黒浜・興津式期の住居跡17軒が確認されている。中期になると市内では遺跡数が減少し、大規模な集落は見られなくなる。五領ヶ台式期では上谷遺跡(78)で土坑墓を検出し、阿玉台式期ではヲサル山南遺跡(22)で8軒と道地遺跡(92)、ヲサル山遺跡(21)で各1軒の堅穴住居跡を検出している。加曾利E式期では松原遺跡(104)、向山遺跡(23)、田原塙遺跡(98)、長兵衛野南遺跡(24)で堅穴住居跡を検出する程度に留まる。更に後・晩期になんしても減少傾向は続くが、神崎川沿いには後期を主体とする大規模集落で、加曾利B式～安行I式期の佐山貝塚(99)と点列環状貝塚の神野貝塚(89)がある。

弥生時代～古墳時代前期 八千代市内におけるこの時期の集落は弥生時代後期から古墳時代初頭にかけてが中心となる。前代の中期は少なく、宮ノ台式期の栗谷遺跡(82)、逆水遺跡(88)、田原塙遺跡(98)などが散見される程度であるが、後期になると顕著な増加傾向を示し、萱田遺跡群の権現後遺跡(20)、ヲサル山遺跡(21)、北海道遺跡(44)、井戸戸向遺跡(46)、白幡前遺跡(47)では合計172棟の後期から古墳前期にかけての堅穴建物跡が検出されている。その北東側の首地ノ台遺跡(65)でも3棟が確認されている。萱田遺跡群から小支谷を挟んだ南東側では川崎山遺跡(48)で55棟、上ノ山遺跡(53)で5棟、新川対岸の村上遺跡群では村上込ノ内遺跡(60)で14棟、沖塚遺跡(55)では弥生時代末期の製鉄遺構が検出され、他にも浅間内遺跡(62)、名主山遺跡(61)で堅穴建物跡が確認されている。東方に位置する別的小支谷最奥部では平沢遺跡(69)で10棟、阿蘇中学校東側遺跡(68)で20棟と別の纏まりを見せ、目を転じて新川が神崎川と合流し印旛沼へと注ぐ地点では大規模な集落が形成されている。保品・神野地区では近接して分布する栗谷遺跡(82)で92棟、上谷遺跡(78)で61棟、境堀遺跡(85)で31棟、向境遺跡(87)で1棟、役山東遺跡(81)で3棟が検出されている。神崎川と新川に挟まれ平島状となる台地上には229棟を検出した佐山台遺跡(100)を中心道地遺跡(92)で81棟、間見穴遺跡(105)で52棟が確認され一帯は該期の一大拠点とみられている。市域には大規模な集落が展開しているがそれに比して方形周溝墓や出現期古墳は少ない。中期には宮ノ台式土器に伴う方形周溝墓11基が検出された栗谷遺跡(82)がみられるが、その後は北関東系の影響が色濃くなり、墓制もそれに伴い壺棺墓



第5図 周辺旧地形図 (S=1/20,000)

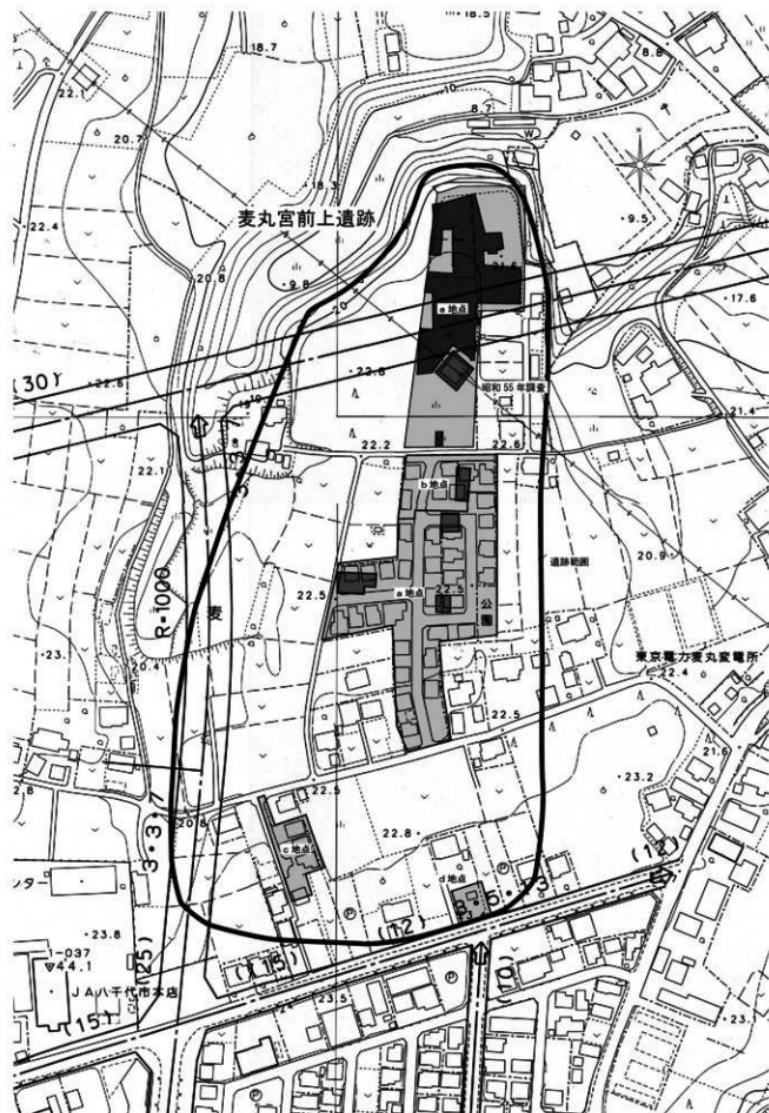
(墓)が散見されるようになる。後期末以降になると前述した栗谷遺跡で有段口縁壺を伴う全長13mの大型の方形周溝墓1基が検出されている。更に古墳時代前期に入ると間見穴遺跡(105)では小型の方墳や方形周溝墓を伴い、全容は不明であるが前方後方墳の可能性を残す全長28mの方墳が確認されている。他に間見穴遺跡周辺の東山久保遺跡(102)、松原遺跡(104)、田原塚遺跡(98)や栗谷遺跡周辺の上谷遺跡(78)、境堀遺跡(85)、向境遺跡(87)や萱田遺跡群のヲサル山遺跡(21)、井戸向遺跡(46)でも小型の方墳や方形周溝墓が検出されている。

古墳時代中・後期 安定し大規模集落を形成した前代に比べ、中期以降は集落規模も縮小傾向を示し、竪穴建物跡の棟数も大きく減少する。中期には川崎山遺跡(48)で竪穴建物跡33棟、北海道遺跡(44)で22棟、上谷遺跡(78)で10棟、道地遺跡(92)で4棟などが確認されている。本跡の近接する音地ノ台遺跡(65)でも竪穴建物跡4棟が検出されているに過ぎない。向境遺跡(87)では中期から後期に

かけてのカマド出現期の堅穴建物跡が6棟検出されている。後期では北海道遺跡(44)で12棟、権現後遺跡(20)で10棟、川崎山遺跡(48)で2棟が確認され、いずれも石製模造品工房跡が検出されている。他にも内込遺跡(32)で20棟、道地遺跡(92)で5棟が確認されているが、やはり小規模集落が散見される程度である。次に周辺の古墳を概観すると神野芝山古墳群(90)の二号墳では直径約30mの円墳で箱式石棺から10数体の人身骨が検出され、5世紀中頃の四号墳は直径約50mの円墳で粘土郭、刀・鏡・石枕などが出土している。5世紀末から6世紀代とみられる桑納古墳群(93)の二号墳は全長34mの帆立貝形古墳で、円筒埴輪や人物埴輪などが出土している。新川東岸の根上神社古墳(59)は6世紀代の築造とみられ、市内最大の前方後圓墳で全長約50mを測る。7世紀初頭に比定される平戸台古墳群(97)の二号墳は方墳で、筑波石が使用された箱式石棺からは追葬が繰り返されたとみられ15体もの人骨が出土した。更に直径約40mの円墳である真木野古墳(101)や6世紀中頃から7世紀中頃にかけ築造された間見穴遺跡(105)の円墳5基からもやはり箱式石棺から人骨が出土している。7世紀以降の小規模な古墳には、直径約23mの円墳である沖塚古墳(54)、南北約28m・東西約10mの方墳で横穴式石室をもち、直刀、鉄鎌、勾玉などが出土した村上一号墳(31)、箱式石棺をもつ方墳である黒沢台古墳(33)や堀場台古墳(49)などがある。本跡の近接する音地ノ台遺跡(65)の台地縁辺部には直径約22mの円墳である音地ノ台古墳があり、破碎された須恵器大甕が出土している。以上のように市域には代表的な古墳が単独で存在する例が多く、明確な古墳群を形成しない地域との指摘がなされている。

奈良・平安時代 八千代市域の大部分は印旛沼南西岸から新川流域に展開した『和名類聚抄』にある「下總國印波郡村神郷」に比定されている。新川中流域に展開する主要な集落の一つが該期の研究に多大な資料を提供してきた村上込ノ内遺跡(60)である。集落は8世紀前半から9世紀後半まで変遷し、堅穴建物跡155棟、掘立柱建物跡24棟が確認されている。他にも壹田遺跡群の権現後遺跡(20)、ヲサル山遺跡(21)、北海道遺跡(44)、坊山遺跡(45)、井戸向遺跡(46)、白幡前遺跡(47)では8世紀中頃から10世紀代まで変遷し、総数で堅穴建物跡562棟、掘立柱建物跡227棟が確認されている。印旛沼南西岸の保品・神野地区では近接する栗谷遺跡(82)、上谷遺跡(78)、境堀遺跡(85)、向境遺跡(87)、役山東遺跡(81)、雷遺跡(80)では8世紀中頃から10世紀後半まで変遷し、総数で堅穴建物跡382棟、掘立柱建物跡252棟が確認されている。それ以外にも纏まりをもつ集落としては、製鉄造構が確認されている高津新山遺跡(50)で堅穴建物跡111棟、掘立柱建物跡21棟、帶金具や銅椀が出土した浅間内遺跡(62)で堅穴建物跡59棟、掘立柱建物跡6棟、間見穴遺跡(105)で堅穴建物跡45棟、掘立柱建物跡15棟が確認されている。本跡の近接する音地ノ台遺跡(65)でも堅穴建物跡26棟、掘立柱建物跡18棟が検出されている。これら市内の古代集落の多くは8世紀後半から規模を拡大し、9世紀中頃に最盛期を迎えた後、9世紀後半から10世紀にかけ縮小し消滅していくといった一般的な変遷過程を辿ることができる。

中・近世 八千代市域の中世遺跡の調査例は多くはないが、康応2年(1390年)銘のある武藏型板碑や仏具の銅製花瓶、青磁碗などの陶磁器類が出土し、鎌倉時代の13世紀後半から続く正覚院館跡(63)、土塁・堀が調査され、戦国期の痕跡が顕著ではあるが方形居館とみられ、その端緒はそれ以前に遡るとみられる高津館跡(51)、戦国期を主とする吉橋城跡(42)や米本城跡(67)、その米本城跡に付随し、15世紀後半を中心とする生活感のある陶磁器類が出土した下宿東遺跡(83)は城下集落とみられる。12世紀後半から16世紀までの断続的な痕跡を残す集落跡・墓域跡である井戸向遺跡(46)、15世紀後半の陶磁器類が出土し中世後半を主とする土坑墓と火葬跡を検出した作山遺跡(84)、他にも



第6図 調査範囲及び既往の調査地点 (S=1/2,500)

吉橋城跡に関連するとみられる堀、溝、地下式坑などが検出された妙見前遺跡(6)、渋内遺跡(7)、道路跡と土坑墓、火葬跡が検出された間見穴遺跡(105)などがあり、調査されたものに限れば、15世紀後半以降のものが比較的多く見受けられる。近世遺跡では、村上第1塚群(57)、村上第2塚群(58)や栗谷遺跡(82)内にある栗谷塚の他に、間見穴遺跡(105)では古墳を再利用した塚など民間信仰に関連するような塚が点在している。八千代市域は幕府直轄の小金牧南端部に位置する下野牧の範囲内にあり、佐倉道が通る関係から、交通集落としての大和田宿が営まれ、成田参詣の宿場としても活況を呈した。当該地域は現在の手賀沼や印旛沼、中世には「香取の海」と称され、かつて広がっていた古鬼怒湾の入江の奥部にあたり、鬼怒川水系や香取内海の水上交通を通じて常陸や下野方面へと続く交通の要衝にあたり、中・近世に限らず各時代においても大きな位置を占めていたと考えられる。

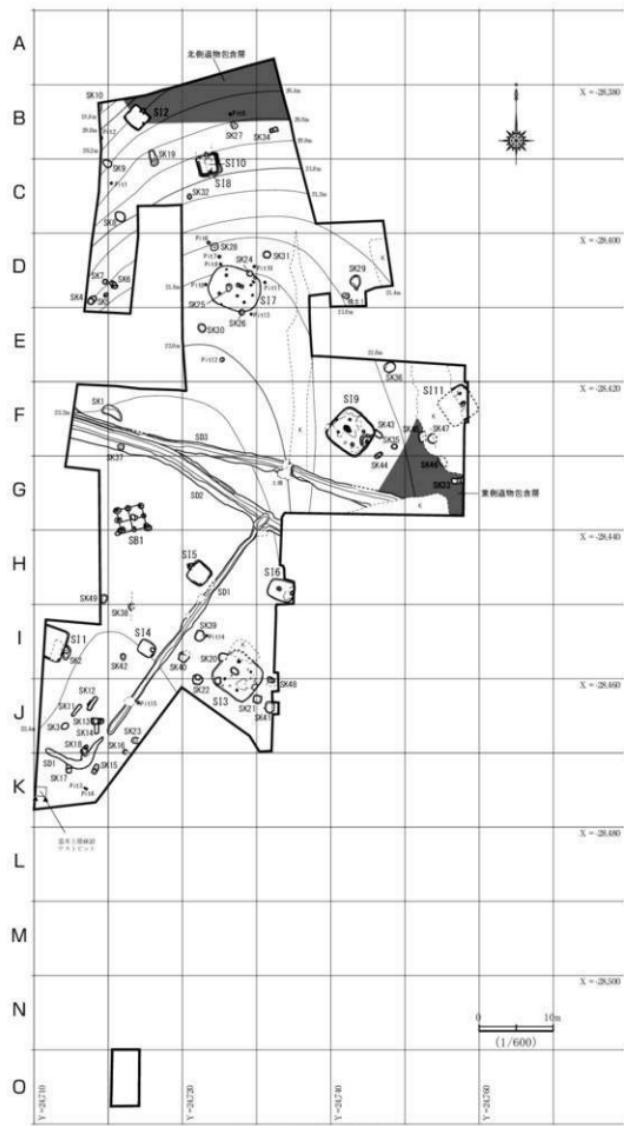
第5節 麦丸宮前上遺跡における既往の調査について

麦丸宮前上遺跡は八千代市域の中央部に位置し、これまでに5ヶ所の調査が実施されている（第6図・第1表）。これらによると、遺跡内で発掘調査が行われたのは昭和55年が最初であったが、土坑と少量の繩文土器の出土に留まつたようである。a地点の調査では、初めて古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての堅穴建物跡が4棟確認され、続く北側に隣接するb地点の調査においてもほぼ同時代の堅穴建物跡2棟が確認された。これにより集落がさらに北側の台地先端部に展開している可能性が示唆された。一方、遺跡の南側においては、c地点で遺構・遺物がともに検出されず、d地点でも近世以降の溝と土坑及び同時期とみられる素焼きの土器がわずかに認められているに留まる。そして北側の地点よりも南側の地点の方が遺構・遺物の密度が希薄になると指摘されている。

今回の調査地は、八千代市麦丸字宮前1395-1、1398-1に所在し、「e地点」として調査を行った。a・b両地点のさらに北側にあたり、台地先端部まで広がった地点が対象である。

第1表 麦丸宮前上遺跡調査一覧表

遺跡名・ 地点名	文 献	主な遺構・遺物
麦丸宮前上遺跡	※ 一 未報告（※調査時、麦丸測路の範囲が麦丸宮前上遺跡の範囲を含んでいたため、麦丸遺跡として調査された。昭和55年調査）	遺構なし：繩文土器、砥石
	a 地点 2010 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成21年度』「麦丸宮前上遺跡 a 地点」八千代市教育委員会（本調査は未報告）	奈良時代堅穴建物跡4：奈良時代土師器・須恵器（確認調査）
	b 地点 2011 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成22年度』「麦丸宮前上遺跡 b 地点」八千代市教育委員会	奈良・平安時代堅穴建物跡2：奈良時代土師器
	c 地点 2011 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成22年度』「麦丸宮前上遺跡 c 地点」八千代市教育委員会	遺構・遺物なし
	d 地点 2016 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成27年度』「麦丸宮前上遺跡 d 地点」八千代市教育委員会	近代以降構跡、土坑：近世以降土器



第7図 調査区全体図

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 調査の概要

調査対象範囲は3,540m²で、前述のように調査区はⅠ～Ⅲ区の3区画に分割して調査を実施している。調査区は東側に新川が流れ、その新川より入江状に谷が北側から西側まで回り込んで入り込み、半島状の舌状台地を形成している。現地表から遺構確認面までの深さは0.3～0.5mで、ほとんどの遺構が台地平坦面で検出されている。調査区北側と東側は台地縁辺部にあたり原地形が傾斜しており、その斜面には主に縄文時代の遺物を含む遺物包含層が形成されていた。東側は大きな土地改変が加えられたようで、搅乱が多く、斜面地に盛土して平坦面を造成している。調査前まで畠地として利用されていたが、表土中に含まれる遺物は少なく、その多くが遺構に伴う遺物である。

O-2グリッドに位置するⅠ区の飛び地は確認調査時に遺構の可能性があるプランを検出したため調査を実施した。規模の大きな搅乱も多く、遺構とみられたプランも調査した結果、特に遺物も出土せず、覆土の状態などから近・現代の搅乱と判断した。

今回のe地点発掘調査によって検出された遺構は、縄文時代の土坑12基・遺物包含層2ヶ所（北側・東側）、弥生時代後期の竪穴建物跡4棟・ピット6基、古墳時代前期の竪穴建物跡2棟、奈良・平安時代の竪穴建物跡5棟・掘立柱建物跡1棟・溝状遺構1条、中・近世の溝状遺構2条・土坑37基・ピット9基・焼土跡1基であった。遺物は縄文時代草創期の無文土器と石器、早期の茅山下層式・前期の黒浜式・浮島式・粟島台式、中期の五領ヶ台式・阿玉台式、後期の堀之内式・加曾利B式・安行式・曾谷式の各土器、弥生時代後期の土器、古墳時代前期の土師器、奈良・平安時代の土師器・須恵器が出土した。総点数で677点を数え、収納箱で5箱（収納箱容量：縦54cm×横34cm×深さ15cm）である。

縄文時代の土坑12基は縄文時代早期～後期の各時期の遺物は遺構外や、表土層中からの出土がほとんどである。その多くが細片で占めら、器面は摩耗していた。これらの遺物については後述する（第7節）。覆土の状態などから12基を縄文時代の遺構と判断したが、遺物を伴わないと時期が判然としない。SK43～49の7基には焼土が含まれ、炉穴の可能性も考えたが、遺物を伴わず、被熱面も認められなかったため該期の土坑として扱った。一方でSK19は北側遺物包含層中に入り、草創期とみられる注口土器（SK19-1・2）を伴っていた。舌状台地先端へ向う傾斜地に形成された調査区北側遺物包含層からはSK19と同じく草創期に比定される遺物がまとまって出土している。また、調査区東側のG-5グリッド以東を中心とした地点にも遺物包含層が形成されており、遺物が少量ながら出土している。

一方、中・近世の土坑は、規模、形状、覆土などから中・近世の時期とみられる土坑が37基検出されている。多くの土坑は覆土が单層で人為的な堆積とみられ、出土遺物は少なく、出土しない土坑も認められた。遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器の細片が混在し、多くは耕作に関連した土坑であると考えられる。SK11・12などはその形状から、害獣駆除を目的とした陥し穴である可能性も想定される。

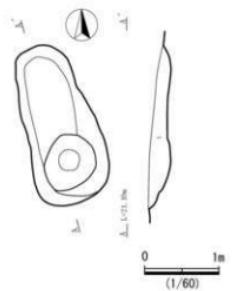
第2節 繩文時代

(1) SK19と遺物包含層

SK19 (第8・9・10図、第3表、図版5・22)

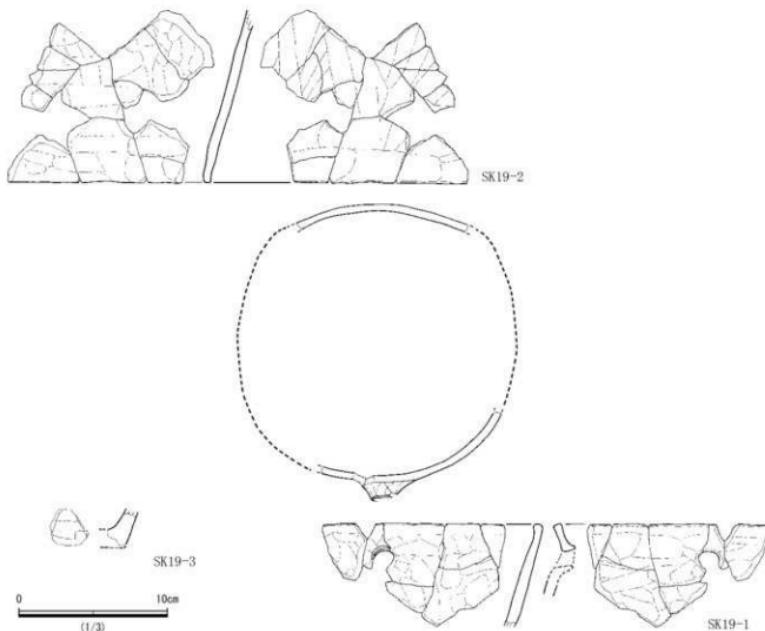
【位置】B-C-2 グリッドに位置する。【規模と形状】平面は楕円形を呈する。規模は、長軸 2.18 m、短軸 1.04 m、深さ 0.24m、主軸方向は N-19° - W を測る。底面南側にはピット状の窪みがみられた。

【覆土】黒褐色土主体の単層で、斑文状のテフラがみられる。【遺物】底面のピット状の窪みからまとまって出土した。総点数は接合した 1・2 を各 1 点として 14 点を数える。出土状態から全て同一個体の破片であると判断し一括で取り上げた。1 は注口付土器で、2・3 も胎土から同一個体とみられる。また、北側遺物包含層より出土した 4・5 の土器（第11図）も同一個体である可能性がある。外面は無文で器面は主に縱方向へナデられ、丁寧な作りである。口縁直下に内側より穿孔され注口部が貼り付けられている。穿孔により胴部が一部重みを見せている上に全体が方形状を呈すると考えられる。



SK19
1. 黒褐色土 10YR3/2 斑紋状のテフラがみられる。
細まり・粘性有。遺物包含層。

第8図 SK19



第9図 SK19出土遺物

【所見】本遺構は、北側遺物包含層中に形成されており、その落ち込みの上層部でまとまった遺物が出土した。土器の出土状態や、後述する北側遺物包含層出土の底部が方形状の無文土器（同図1）とは形態・規模等が類似し、同一個体の可能性があることなどから、本遺構の時期は縄文時代草創期と判断された。そこで器面に付着した炭化物から14C年代測定法（AMS法）を試みたいと考えたが、分析対象のサンプルが接合資料1・2からは採取できなかったため、止むを得ず接合関係はないが成形や胎土から同一個体と判断した破片を用いて測定している（第3章）。

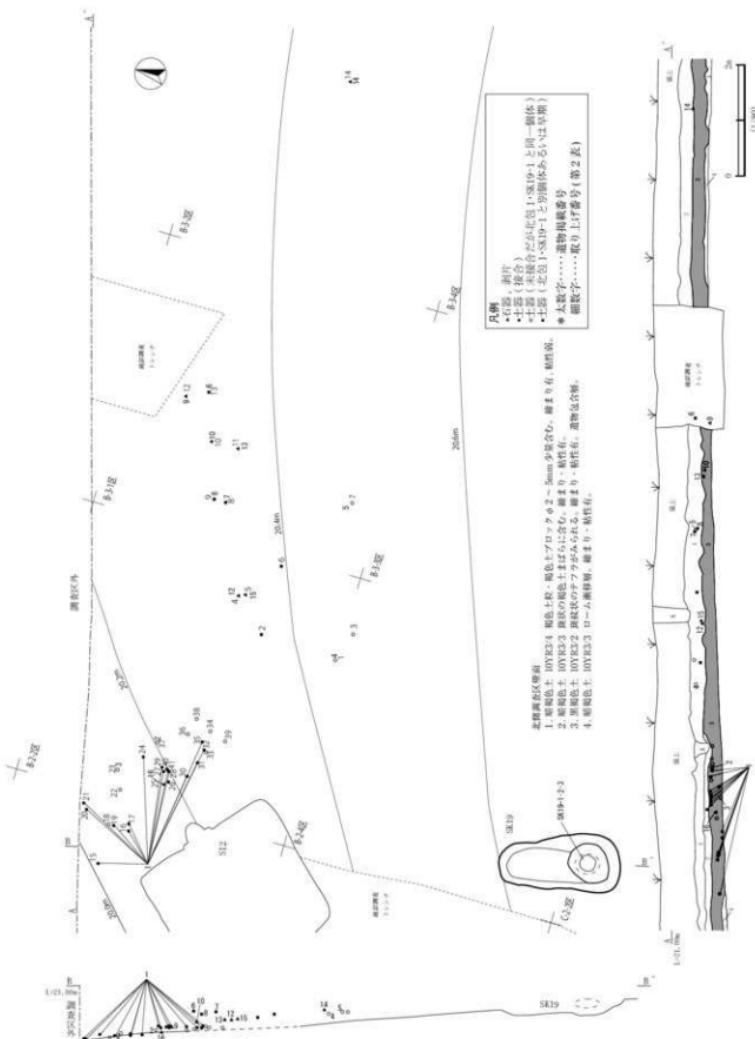
北側遺物包含層（第10・11・12・13図、第2・3表、図版4・5・22）

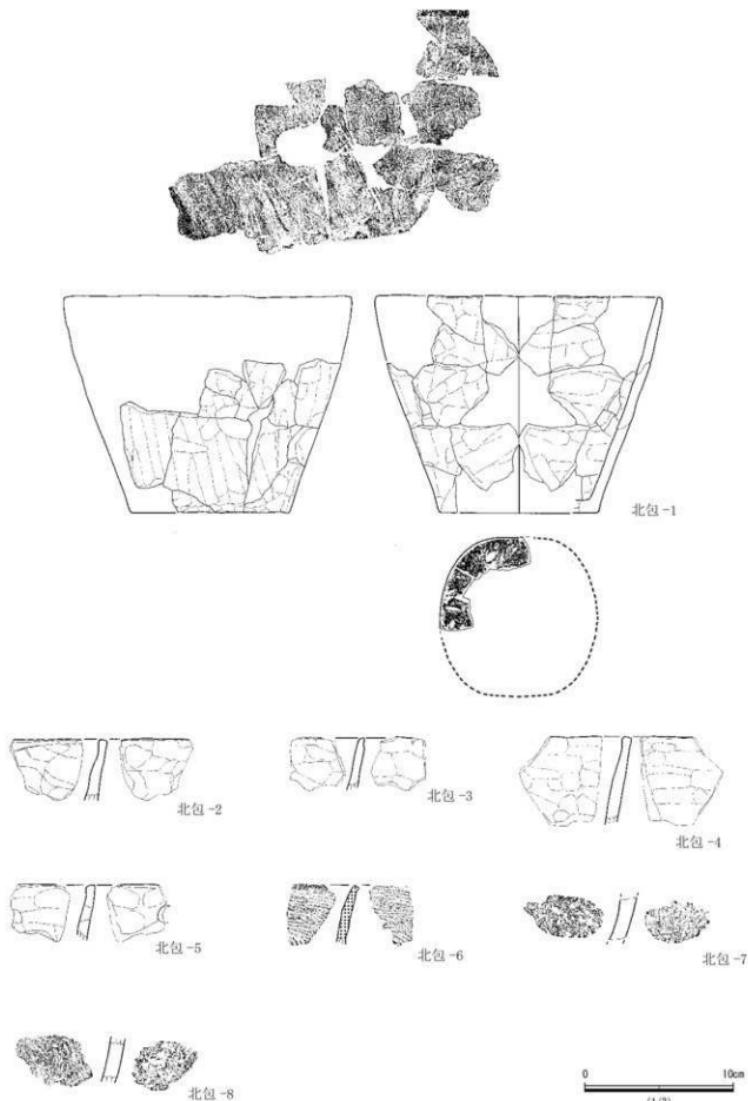
北側の遺物包含層は傾斜に沿って、およそグリッドのCラインより北側に形成されていた（第7図）。層位的には第10図の3層が遺物包含層に該当し、層厚は20～30cmを測る。斑紋状のテフラが多量に含まれる黒褐色土であった。遺物は、B-2グリッド2区を中心に集中し、更にその東側へ散在している。東西方向の垂直分布は斜面下部で作団した土層団に投影しているためズレが生じているが、全て3層中からの出土である。出土位置を記録した遺物総点数は41点で、土器片が34点、石器・剥片が7点である。いずれも細片であるがそのうちの16片が接合した1点を含む、土器8点と石器・剥片8点を図示した。1は底部が方形を呈する角底の土器で、器高が低い深鉢形土器である。外面に装飾はなく無文で、器面は主に斜めから縱方向へナデつけられた丁寧な作りである。2・3は未接合ではあるが胎土から1と同一の可能性が高い。また、4・5はSK19の注口付土器と胎土が類似し、同一個体である可能性がある。5には

第2表 北側遺物包含層出土遺物一覧表

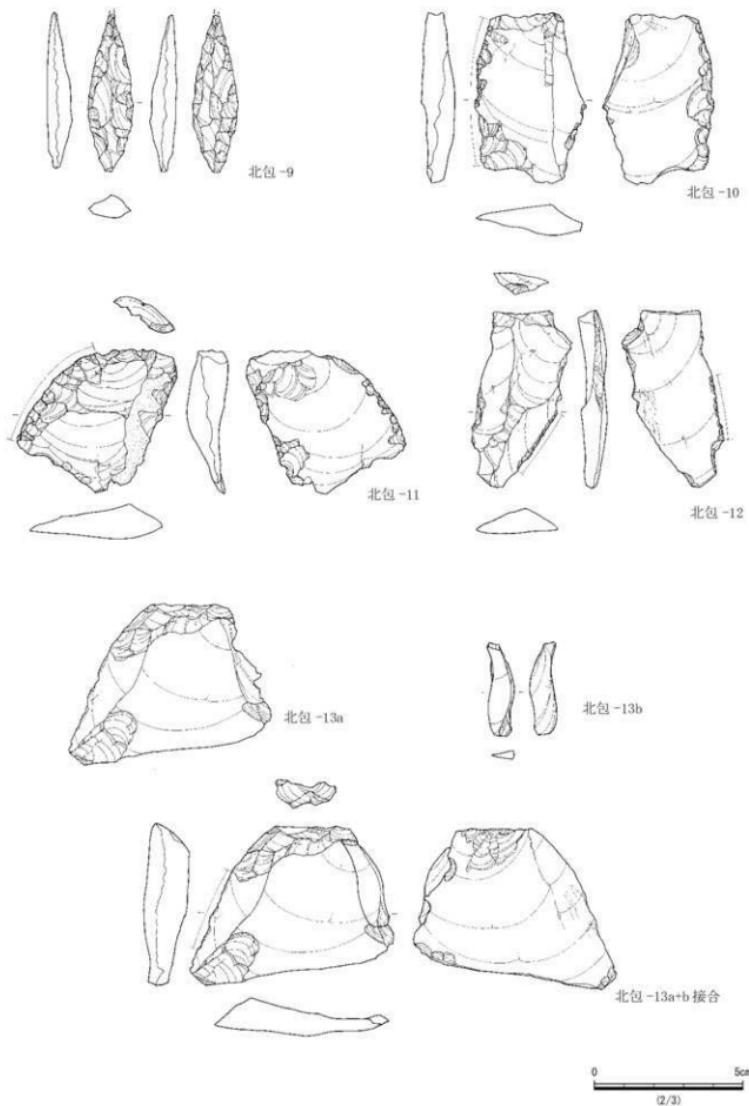
取上番号	揭露番号	種類	器種	部位	文様	備考
1	4	縄文土器	深鉢	口縁部	無文	SK19-1と形態・胎土が類似。
2	—	縄文土器	深鉢	胴部	無文	胎土が複合資料とは異質の同一破片4片。
3	—	縄文土器	深鉢	胴部	無文	内面にV字状工具痕が比較的明瞭。
4	12	石器	剥片	—	—	石片：黒曜石。
5	15	石器	剥片	—	—	石片：黒曜石。
6	—	縄文土器	深鉢	胴部	無文	胎土が複合資料とは異質。
7	5	縄文土器	深鉢	胴部	無文	同破片2片：SK19-1と胎土が類似。
8	7	縄文土器	深鉢	胴部	無文	胎土が複合資料とは異質。
9	8	縄文土器	深鉢	胴部	無文	胎土が複合資料とは異質。
10	10	石器	剥片	—	—	石片：黒曜石。
11	13	石器	剥片	—	—	石片：黒曜石。
12	9	石器	有舌尖頭器	—	—	石片：ガラス質黒色安山岩山(那珂川産)。
13	6	縄文土器	深鉢	口縁部	条痕文	胎土が複合含む。
14	14	石器	剥片	—	—	石片：黒曜石。
15	—	縄文土器	深鉢	胴部	無文	接合資料。
16	1	縄文土器	深鉢	胴部～底部	無文	接合資料。
17	—	縄文土器	深鉢	胴部～底部	無文	接合資料。
18	—	縄文土器	深鉢	胴部	無文	胎土が複合資料と同一。
19	—	縄文土器	深鉢	胴部	無文	接合資料。
20	1	縄文土器	深鉢	胴部～底部	無文	接合資料2片。
21	—	縄文土器	深鉢	胴部	無文	接合資料。
22	—	縄文土器	深鉢	胴部	無文	胎土が複合資料と同一。
23	3	縄文土器	深鉢	胴部	無文	胎土が複合資料と同一。
24	1	縄文土器	深鉢	胴部	無文	接合資料。
25	16	石器	剥片	—	—	石片：黒曜石。
26	—	縄文土器	深鉢	胴部	沈線文	接合資料。
27	—	縄文土器	深鉢	胴部	無文	接合資料。
28	—	縄文土器	深鉢	胴部	無文	接合資料。
29	1	縄文土器	深鉢	胴部	無文	接合資料。
30	—	縄文土器	深鉢	胴部	無文	接合資料。
31	—	縄文土器	深鉢	胴部	無文	接合資料。
32	—	縄文土器	深鉢	胴部	無文	接合資料。
33	—	縄文土器	深鉢	胴部	無文	胎土が複合資料と同一。
34	—	縄文土器	深鉢	胴部	無文	胎土が複合資料と同一。
35	1	縄文土器	深鉢	口縁部	無文	接合資料。
36	—	縄文土器	深鉢	胴部	無文	胎土が複合資料と同一。
37	2	縄文土器	深鉢	口縁部	無文	胎土が複合資料と同一。
38	—	縄文土器	深鉢	胴部	無文	胎土が複合資料と同一。
39	—	縄文土器	深鉢	胴部	無文	胎土が複合資料と同一。
40	1	縄文土器	深鉢	胴部	無文	接合資料。
41	—	縄文土器	深鉢	胴部	無文	接合資料。

第10図 調査区北側遺物包含層

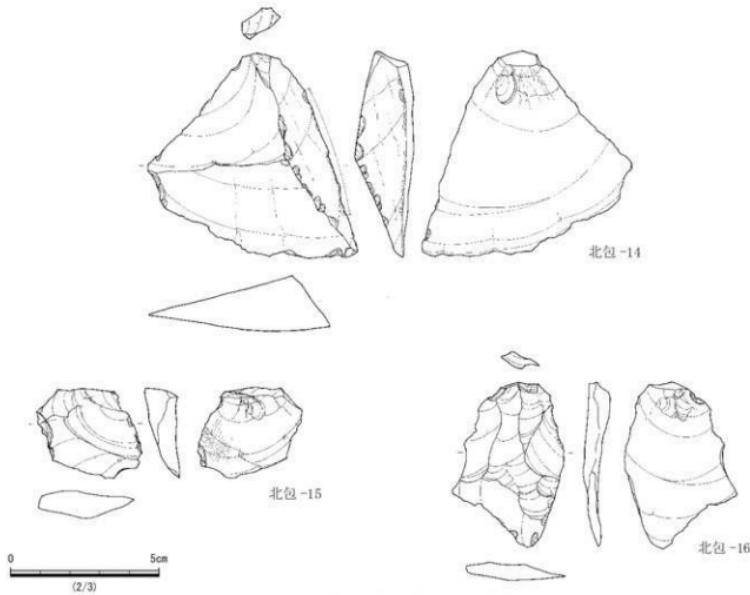




第11図 北側遺物包含層出土遺物①



第12図 北側遺物包含層出土遺物②



第13図 北側遺物包含層出土遺物③

第3表 SK19・北側遺物包含層出土遺物観察表

遺物番号	団面 参考 寸法	種類 基盤	白壁 器高 底径	部位 既存半・製作方法・その他特徴	胎土	色調 (外面/内面)	焼成	備考
SK19	1. 瓦文土器 既存半 既口付土器	(18.9) (6.9)	口縁一側扁、丸みを帯びた両端、口唇部角状化、外面無文、縫・斜位のナダ。内面無文、縫・斜位のナダ。既存半、穿孔跡に隙間に生み、孔直徑1.5mm。	白色粘、石英、雲母、 赤褐色粘	7. SYR5/3に高い場 7. SYR6/6根	良好	2と同一個体。	
	2. 瓦文土器 既存半 既口付土器	(13.6) (11.6)	口縁一側扁、丸みを帯びた両端、口唇部角状化、外面無文、縫・斜位のナダ。内面無文、縫・斜位のナダ。	白色粘、石英、雲母、 赤褐色粘	7. SYR4/1焼灰 7. SYR6/6根	良好	1と同一個体。	
	3. 瓦文土器 既存半	(2.5) —	藍紫色、外面無文、内面ナナフジ形。	白色粘、石英、角閃 石、赤褐色粘	10YR6/4C/5C-5D 7. SYR6/6根	普通		
北側遺物 包含層	1. 瓦文土器 既存半	(18.9) 14.5 (10.5)	口縁一側扁40mm、丸みを帯びた両端、口唇部角化に内傾気味、外面無文、縫・斜位のナダ。内面無文。	白色粘、石英、角閃 石、赤褐色粘	7. SYR4/1焼灰 10YR5/3C/5B-5D 7. SYR6/4根	普通		
	2. 瓦文土器 既存半	(4.1) —	口縁片、口唇部角化、僅かに内傾気味、外面無文、縫・斜位のナダ。内面無文。	白色粘、石英、赤褐色 粘	7. SYR4/1焼灰 7. SYR6/4に高い根	普通	1と同一個体。	
北側遺物 包含層	3. 瓦文土器 既存半	(2.5) —	口縁片、口唇部角化に内傾気味、外面無文、斜位のナダ。内面無文。	白色粘、石英、赤褐色 粘	10YR4/1焼灰 10YR6/4C/5D-5E 7. SYR6/4根	普通	1と同一個体。	
	4. 瓦文土器 既存半	(5.9) —	口縁片、口唇部角化、僅かに内傾気味、外面無文、縫・斜位のナダ。	白色粘、石英、雲母、 角閃石、赤褐色粘	7. SYR4/4に高い根 7. SYR6/4根	普通		
北側遺物 包含層	5. 瓦文土器 既存半	(3.6) —	口縁片、口唇部角化、僅かに内傾気味、外面無文、内面 無文。	白色粘、石英、赤褐色 粘	7. SYR4/4に高い根 7. SYR6/3に高い根	普通	往口付土器か。	
	6. 瓦文土器 既存半	(4.9) —	口縁片、外内面横位の条文。	礫塊、白色粘、石英、 赤褐色粘	SYR6/6根 SYR4/1焼灰	普通	早朝後半 茅山下層式。	
北側遺物 包含層	7. 瓦文土器 既存半	(2.8) —	胴部片、外面無文、内外面ナダ。	白色粘、石英、雲母、 赤褐色粘	SYR5/6に高い根 SYR6/3に高い根	普通	8と同一個体。 早朝後半。	
	8. 瓦文土器 既存半	(2.1) —	胴部片、外面無文、内外面ナダ。	白色粘、石英、雲母、 赤褐色粘	SYR5/4C/5D-5E SYR6/3に高い根	普通	7と同一個体。 早朝後半。	
北側遺物 包含層	9. 石器 有舌尖研器	長さ:5.30cm、幅:1.50cm、厚さ:0.90cm、重さ:6.7g、石材:ガラス質黑色安山岩、鄧州河産、ほぼ完形。						
	10. 石器 削器	長さ:5.75cm、幅:3.25cm、厚さ:1.05cm、重さ:19.9g、石材:黒曜石、二次加工痕を有す。						

11	石器 刃片	長さ:4.80cm、幅:5.35cm、厚さ:1.40cm、重さ:20.6g、石材:黒曜石、二次加工痕を有す。鉄分が多く含む。	B-2グリッド 2区出土
12	石器 刃片	長さ:5.95cm、幅:3.40cm、厚さ:1.00cm、重さ:13.8g、石材:黒曜石、微細な剥離痕を有す。	
13	石器 刃片	長さ:5.80cm、幅:6.10cm、厚さ:1.50cm、重さ:37.7g (a=37.6 g+b=0.7g)、石材:黒曜石、微細な剥離痕を有す。aとbが同一。	
14	石器 刃片	長さ:6.96cm、幅:7.10cm、厚さ:2.00cm、重さ:155.3g、石材:黒曜石、微細な剥離痕を有す。	
15	石器 刃片	長さ:3.02cm、幅:3.60cm、厚さ:1.10cm、重さ:8.5g、石材:黒曜石。	
16	石器 刃片	長さ:5.60cm、幅:3.80cm、厚さ:0.80cm、重さ:10.5g、石材:黒曜石。	

東側遺物包含層（第14図、第4表、図版22）

東側の遺物包含層は暗褐色土を主体とし、調査区東側のG-5グリッド以東を中心とした地点に形成されていた（第7図）。その北側から西側にかけて平坦面が広がっており、G-5・6グリッド以南には谷地形による斜面地が形成されている可能性が高い。周辺は現代の深い擾乱が多く、また、調査区外の東側は台地平坦面を造成するため盛土が堆積しているため、原地形が不明瞭である。この遺物包含層中より出土した遺物は15点と多くはなく、いずれも細片ではあるが、3点を図示した。3は縄文時代後期、安行式土器の粗製深鉢である。その他の遺物も縄文時代後期の土器が主体である。



第14図 東側遺物包含層出土遺物

第4表 東側遺物包含層出土遺物観察表

遺物番号	表面形態	横幅 縦幅	目標 高さ 底高さ	形状・残存率・製作技法・その他特徴	胎土	色調 (外面/内部)	焼成	備考
東側遺物包含層	1 縄文土器 深鉢	—	(3.5)	側面部片、半塑縄文LRを施文。	白色粘、石英	10YR7/6明黄褐 10YR7/4にぶい黄褐	良好 堅膜	後期。
	2 縄文土器 深鉢	—	(2.8)	側面部片、半塑縄文LRを施文、3本1組の芯棒が垂下する。	白色粘、石英	7.5YR7/4にぶい褐 10YR6/4にぶい黄褐	普通	後期。
	3 縄文土器 深鉢	(3.2)	—	側面部片、薄手、斜めの条縄文、粗製。	白色粘、石英、漂母	5YR8/4にぶい赤褐 5YR8/4にぶい黄褐	普通	後期安行式。

(2) 土坑

SK1（第15図、図版6）

【位置】F-1・2グリッドに位置する。【規模と形状】平面が歪んだ長楕円形を呈する。規模は、長軸2.93m、短軸1.25m、深さ0.43m、主軸方向はN-64°-Wを測る。【覆土】3層に分層され、上層は暗褐色土が主体となり、下層はロームブロックが混じる。自然堆積と考えられる。【遺物】出土していない。【所見】覆土の状態などから縄文時代の造構と判断したが、形状から風倒木痕の可能性がある。

SK2（第15図、図版6）

【位置】I-1グリッドに位置する。一部をSIIに壊され失われている。【規模と形状】平面が長楕円形を呈する。規模は、残存値で長軸2.03m、短軸1.04m、深さ0.53m、主軸方向はN-6°-Eを測る。底面にはピット状の窪みがみられた。【覆土】暗褐色土、黒褐色土、褐色土、にぶい黄褐色土の7層に分層され、自然堆積と考えられる。【遺物】出土していない。【所見】覆土の状態などから縄文時代

の遺構と判断したが、形状から風倒木痕の可能性がある。

SK3 (第15図、図版6)

【位置】J-1グリッドに位置する。【規模と形状】平面は楕円形を呈する。規模は、長軸1.09m、短軸0.82m、深さ0.18m、主軸方向はN-53°-Eを測る。浅い鍋底状を呈し、底面は平坦である。【覆土】3層に分層され、黒褐色土と暗褐色土とにぶい黄褐色土からなる。自然堆積とみられる。【遺物】出土していない。【所見】覆土の状態などから縄文時代の遺構と判断した。

SK10 (第15図)

【位置】B-1グリッドに位置する。【規模と形状】大部分が調査区外になる。平面形状は楕円形を呈するものとみられる。規模は、検出範囲で、長軸1.06m、短軸0.37m、深さ0.28mを測る。主軸方向はN-9°-Wを測る。【覆土】ローム粒を微量含む暗褐色土を主体とした単層。【遺物】沈線を施した破片が1点出土している。【所見】覆土の状態や出土遺物から縄文時代の遺構と判断した。

SK43 (第15図、図版6)

【位置】F-5グリッドに位置する。一部をSI9に壊され失われている。また、一部植物の根により搅乱を受けている。【規模と形状】平面が楕円形を呈する。規模は、残存値で長軸1.58m、短軸0.73m、深さ0.23m、主軸方向はN-58°-Wを測る。底面はやや起伏をもつ。【覆土】暗褐色土、黒褐色土、褐色土を主体とした8層に分層され、一部に焼土が混じる。【遺物】出土していない。【所見】覆土の状態などから縄文時代の遺構と判断した。

SK44 (第15図、図版6)

【位置】F・G-5グリッドに位置する。【規模と形状】平面が楕円形を呈する。規模は、長軸1.19m、短軸0.67m、深さ0.38m、主軸方向はN-58°-Eを測る。底面は起伏を持ち、段がみられる。【覆土】暗褐色土、褐色土を主体とした6層に分層され、一部に焼土が混じる。【遺物】出土していない。【所見】覆土の状態などから縄文時代の遺構と判断した。

SK45 (第16図、図版6)

【位置】F-6グリッドに位置する。東側半分が搅乱により失われている。【規模と形状】平面は楕円形を呈するものとみられる。規模は、残存値で長軸1.46m、短軸0.60m、深さ0.18m、主軸方向はN-18°-Wを測る。底面はやや起伏をもつ。【覆土】暗褐色土、褐色土を主体とした5層に分層され、一部に焼土が混じる。【遺物】弥生土器の細片2点が出土しているが細片のため混入したものとみられる。【所見】覆土の状態などから縄文時代の遺構と判断した。

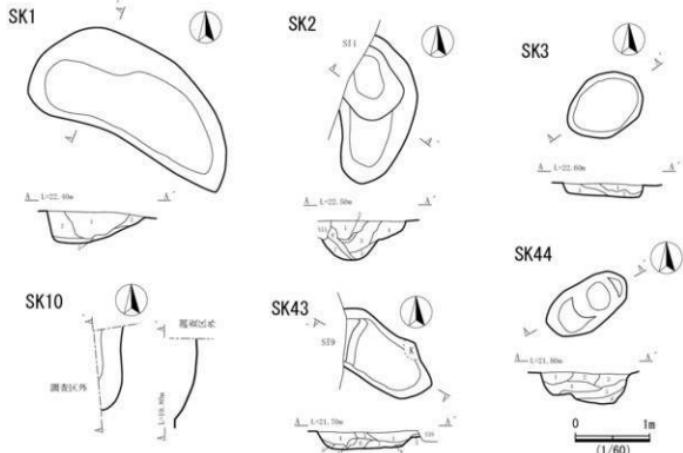
SK46 (第16図、図版6)

【位置】G-6グリッドに位置する。僅かに西側が残るのみでそのほとんどが搅乱により失われている。【形態・規模】平面形状は円形または楕円形か。規模は、残存値で長軸1.50m、短軸0.24m、深さ0.25mを測る。【覆土】覆土は暗褐色土、黒褐色土を主体とした4層に分層され、一部に焼土が混じる。【遺物】

細片であるが縄文土器2点、弥生土器2点、土師器2点が出土し、縄文土器以外は細片で混入したものとみられる。【所見】覆土の状態や出土遺物から縄文時代の遺構と判断した。

SK47 (第16図、図版7)

【位置】F-6グリッドに位置する。搅乱下より検出された。上部は現代の大きな搅乱により削平され、さらに東側半分が搅乱により失われている。【形態・規模】平面は楕円形を呈するものとみられる。規模は、残存値で長軸1.28m、短軸0.97m、深さ0.28m、主軸方向はN-10°-Eを測る。【覆土】灰黄褐色土、灰褐色土、暗褐色土、褐色土を主体とした8層に分層され、一部に焼土が混じる。【遺物】弥生土器とみられる細片が1点出土しているが、細片のため混入したものとみられる。【所見】覆土の状態などから縄文時代の遺構と判断した。



SK1

1. 黄褐色土 10YR3/3 黄褐色土斑状に認め。縮まり有、粘性弱。
2. にぶい黄褐色土 10YR4/4 ローム質。ローム質φ 5~10mm 多量(20%)含む。縮まり、粘性弱。

3. 褐色土 10YR4/4 ローム質。褐色土斑状に多量(20%)含む。縮まり、粘性有。

SK2

1. 黄褐色土 10YR3/3 ローム質。ローム質φ 5~10mm 少量含む。縮まり有、粘性弱。
2. 褐色土 10YR4/4 ローム質。縮まり有、粘性有。

SK3

1. 黄褐色土 10YR3/3 黄褐色土斑状に認め。縮まり有、粘性弱。
2. にぶい黄褐色土 10YR4/4 ローム質。ローム質φ 5~10mm 多量(20%)含む。縮まり、粘性弱。

SK4

1. 黄褐色土 10YR3/3 黄褐色土斑状に認め。縮まり有、粘性弱。
2. にぶい黄褐色土 10YR4/4 ローム質。ローム質φ 5~10mm 多量(20%)含む。縮まり、粘性弱。

SK5

1. 黄褐色土 10YR3/3 黄褐色土斑状に認め。縮まり有、粘性弱。
2. にぶい黄褐色土 10YR4/4 ローム質。ローム質φ 5~10mm 多量(20%)含む。縮まり、粘性弱。

SK6

1. 黄褐色土 10YR3/3 黄褐色土斑状に認め。縮まり有、粘性弱。
2. にぶい黄褐色土 10YR4/4 ローム質。ローム質φ 5~10mm 多量(20%)含む。縮まり、粘性弱。

SK7

1. 黄褐色土 10YR3/3 黄褐色土斑状に認め。縮まり有、粘性弱。
2. にぶい黄褐色土 10YR4/4 ローム質。ローム質φ 5~10mm 多量(20%)含む。縮まり、粘性弱。

SK8

1. 黄褐色土 10YR3/3 黄褐色土斑状に認め。縮まり有、粘性弱。
2. にぶい黄褐色土 10YR4/4 ローム質。ローム質φ 5~10mm 多量(20%)含む。縮まり、粘性弱。

SK9

1. 褐色土 7.5YR4/6 ロームプロックφ 2~3mm 少量。焼土プロックφ 2~5mm 中量含む。縮まり有、粘性弱。

SK10

1. 褐色土 7.5YR4/6 ロームプロックφ 2~3mm 少量。焼土プロックφ 2~5mm 中量含む。縮まり有、粘性弱。
2. 黑褐色土 7.5YR3/2 烧土を斑状に含む。縮まり有、粘性弱。

SK11

1. 黑褐色土 7.5YR3/2 烧土を斑状に含む。縮まり有、粘性弱。
2. 黑褐色土 7.5YR3/3 烧土を斑状に含む。縮まり有、粘性弱。

SK12

1. 黑褐色土 7.5YR3/3 烧土を斑状に含む。縮まり有、粘性弱。
2. 黑褐色土 7.5YR3/4 烧土を斑状に含む。縮まり有、粘性弱。

SK13

1. 黑褐色土 7.5YR3/4 烧土を斑状に含む。縮まり有、粘性弱。
2. 黑褐色土 7.5YR3/5 烧土を斑状に含む。縮まり有、粘性弱。

SK14

1. 黑褐色土 7.5YR3/5 烧土を斑状に含む。縮まり有、粘性弱。
2. 黑褐色土 7.5YR4/6 烧土を斑状に含む。縮まり有、粘性弱。

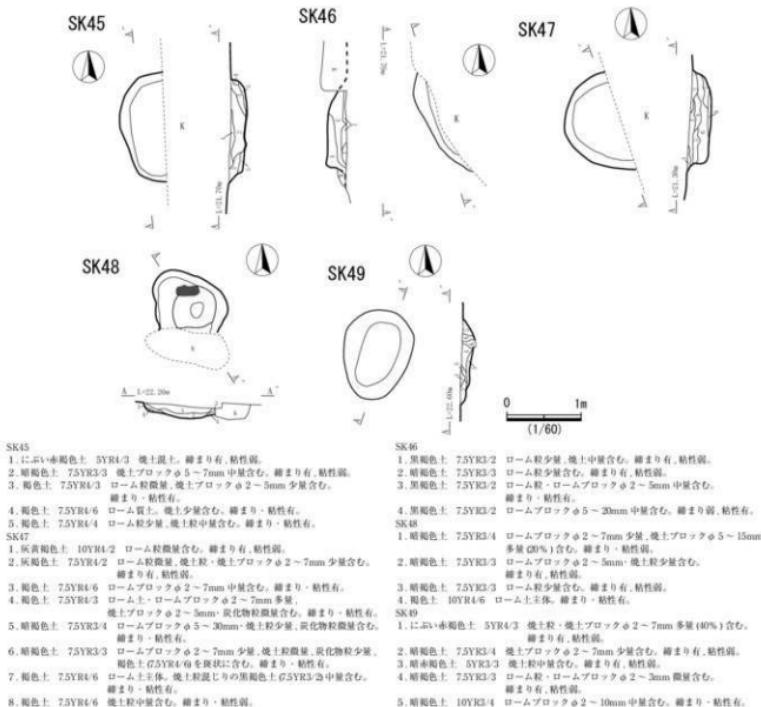
第15図 SK1·2·3·10·43·44

SK48 (第16図、図版7)

【位置】 I・J-4 グリッドに位置する。南側半分が擾乱により失われている。【形態・規模】 平面は梢円形とみられる。規模は、残存値で長軸 0.80 m、短軸 0.81 m、深さ 0.16m を測る。底面にはピット状の浅い窪みがみられた。【覆土】 暗褐色土、褐色土を主体とした4層に分層され、一部に焼土が混じる。【遺物】 出土していない。【所見】 覆土の状態などから縄文時代の遺構と判断した。

SK49 (第16図、図版7)

【位置】 H-1 グリッドに位置する。【形態・規模】 平面は梢円形を呈する。規模は、長軸 1.23 m、短軸 0.93 m、深さ 0.15m を測る。【覆土】 暗褐色土を主体とした5層に分層され、一部に焼土が混じる。また、植物の根により擾乱を受けている。【遺物】 出土していない。【所見】 覆土の状態などから縄文時代の遺構と判断した。



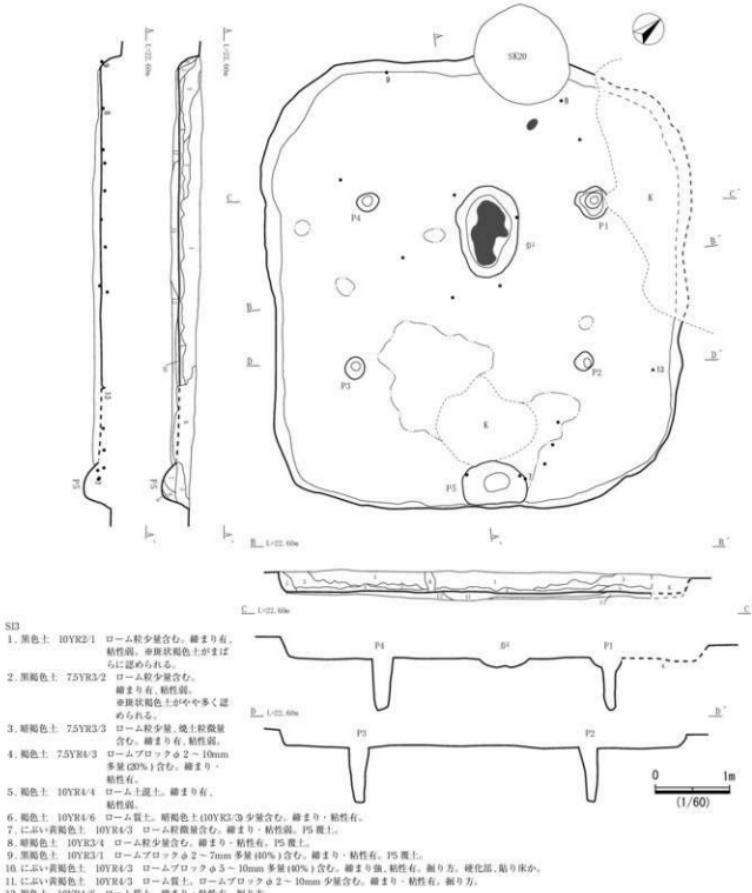
第16図 SK45・46・47・48・49

第3節 弥生時代

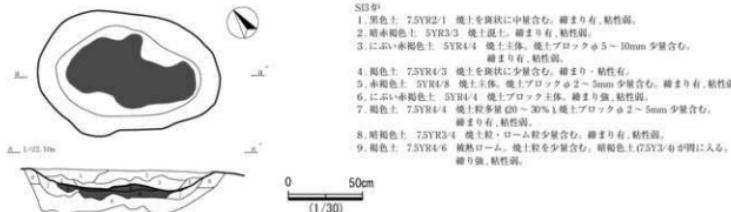
(1) 堪穴建物跡

SI3 (第17・18・19図、第5表、図版7・23)

【位置】1-J-3・4グリッドに位置する。【形態・規模】北壁の一部がSK20に壊されている。また、擾乱により東側の壁及び床面の一部が失われている。平面形状はやや歪な隅丸長方形を呈し、規模は、南北軸で6.05m、東西軸で5.52m、主軸方向はN-40°-Wを測る。炉の位置より、南東側が出入り口である可能性が高い。【覆土】黒色土、黒褐色土、暗褐色土、褐色土など6層に分層され、自然堆積層と想定される。



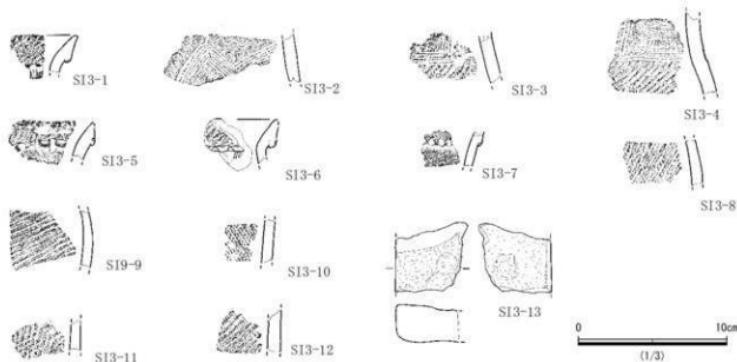
第17図 SI3



第18図 SI3炉

積を呈し、床面までの深さは30cmを測る。【床面・壁】床面は平坦でP2とP3の中間とP5周辺に硬化面がみられる。周溝は検出されていない。壁は緩やかに立ち上がる。床面には10cmの貼り床状の堆積土が認められる。【ピット】P1~6のピット6基が床面より検出されている。P1は最大径45cm・深さ72cm、P2は最大径25cm・深さ72cm、P3は最大径31cm・深さ74cm、P4は最大径30cm・深さ70cm、P5は最大径87cm・深さ19cmを測る。P1~4は規則的に配されており、その深さからも柱穴と判断される。P5は南東壁際中央に位置し、炉との位置関係からも出入り口施設に伴うピットと判断される。【炉】中心よりやや北西側に1基を検出した。炉の平面形状は楕円形で最大径123cm・深さ77cmを測り、よく被熱した火床面を残す。炉より図示した弥生土器の甕1~10が出土している。

【遺物】出土遺物は少なく、いずれも細片が多い。出土位置は炉周辺と出入り口ピット周辺にやや集中する傾向がみられる。覆土中より出土した遺物は総点数で36点（うち石製品1点）である。土器はいずれも細片であるが、そのうち弥生土器12点、石製品1点を図示した。土器はいずれも広口壺ともされる甕で、1・5・6・7は複合口縁で繩文が施文され、口縁部下端に刺突文がみられる。2・3・4の頸部には4~6本の同時施文具による櫛描文が施文され、縦区画や横走文、小波状文、山形文がみられる。8~12の胴部には全面に単節繩文、附加条繩文、撚糸文が施文されている。【所見】本遺構は、その形態や出土遺物が「北関東系土器」とされる土器で占められており、弥生時代後期前葉と判断される。



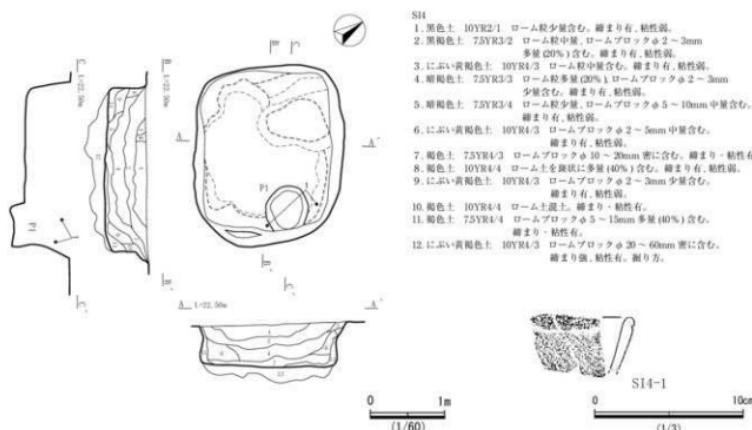
第19図 SI3出土遺物

第5表 SI3出土遺物観察表

遺物 番号	図版 番号	種類 器形	口径 器高 底径	断面・残存率・製作技術・その他の特徴	胎土	色調 (外面/内面)	焼成	備考
SI3	1	陶生土器 甕	(2.6)	口縁部分、複合口縁に單唇縫、LRを施文。口縁部下端に沈め引きをして錐状状になった部分を刺焼した疑似交互焼突文。以下に範囲を示す部分の内側は焼成不良で黒褐色。	白色粘、赤褐色斑	7.SYR5/2灰褐色 7.SYR4/2灰褐色	普通	
	2	陶生土器 甕	(3.2)	側面片、地文突文。6本同時施工による山形文と4本による同時施工具による小波状文が構成する。	石英、長石、雲母	10YR6.2/2灰褐色 10YR4.2/2灰褐色	普通	
	3	陶生土器 甕	(3.5)	頭～脚部分、頭部増文無し。6本同時施工による櫛描文が縦方向と底部下端に構成する。頭部單唇縫、LRを施文。	白色粘、石英	7.SYR4/1灰褐色 7.SYR4/1灰褐色	普通	
	4	陶生土器 甕	(5.4)	頭～脚部分、頭部地文無し。5本同時施工による櫛描文が縦方向と底部下端に構成する。頭部單唇縫、LRを施文。	白色粘、石英、雲母	7.SYR4/1に5-6-7 赤褐色斑	普通	
	5	陶生土器 甕	(2.6)	口縁部分、複合口縁に單唇縫、LRを施文。口縁部下端に沈め引きをして錐状状になった部分を刺焼した疑似交互焼突文。	白色粘、角閃石	7.SYR4/1灰褐色 7.SYR4/2灰褐色	普通	
	6	陶生土器 甕	(3.6)	口縁部分、複合口縁に單唇縫、LRを施文。口縁部下端に沈め引きをして錐状状になった部分を刺焼した疑似交互焼突文。頭部に櫛文が付かれて確認される。	白色粘、石英	7.SYR4/1灰褐色 7.SYR4/2灰褐色	普通	
	7	陶生土器 甕	(2.5)	口縁部分、複合口縁に單唇縫、LRを施文。口縁部下端に錐状状工具による刺焼。他に前穿孔も見られる。	石英、長石	10YR6.0/6灰褐色 10YR6.0/6灰褐色	普通	
	8	陶生土器 甕	(3.0)	脚部片、附加系1種+LRを施文。	石英、長石、雲母	10YR3/1灰褐色 10YR4/2/2灰褐色	普通	
	9	陶生土器 甕	(3.9)	脚部片、附加系1種+LR+2Bを施文。	白色粘、石英、雲母	7.SYR4/1灰褐色 7.SYR4/4灰褐色	良好	
	10	陶生土器 甕	(2.8)	脚部片、斜位の地文LRを施文。	白色粘	7.SYR4/1に5-6-7 7.SYR4/4に5-6-7	普通	
	11	陶生土器 甕	(2.6)	脚部片、單唇縫LRを施文。	白色粘、角閃石	10YR3/2灰褐色 10YR3/2灰褐色	普通	
	12	陶生土器 甕	(2.8)	脚部片、單唇縫LRを施文。	白色粘、雲母	7.SYR4/1に5-6-7 7.SYR4/1灰褐色	普通	
	13	6製品 砂石	長さ:(4.50) cm、幅:(4.90) cm、厚さ:(2.40) cm、重さ:(2.6) g、石材:花崗岩、砾石の一部。					

SI4（第20図、第6表、図版7-8-23）

【位置】1-2グリッドに位置する。【形態・規模】他と比較して小規模であるが深い。隅丸長方形を呈する。規模は、南北軸で2.39 m、東西軸で1.98 m、主軸方向はN-53°-Wを測る。【覆土】黒色土、黒褐色土、暗褐色土、にぶい黄褐色土、褐色土の11層に分層された自然堆積を呈し、床面までの深さは60cm



第20図 SI4・SI4出土遺物

を測る。【床面・壁】床面は平坦で顕著な硬化面は認められない。周溝は検出されていない。壁は垂直に立ち上がる。床には最大で30cmの貼り床が認められる。掘り方は起伏に富む。【ピット】南東壁際中央よりやや東によりピット1基が検出されている。P1は最大径58cm・深さ21cmを測る。その位置より出入り口施設に関するピットと判断される。【炉】検出されなかった。【遺物】覆土中より出土した遺物は1点である。1は2点の接合資料で、口唇部が小さく折り返され、以下に単節繩文が施された繩文土器とみられるが、いずれも上層部からの出土で、遺構には伴わないと考えられる。

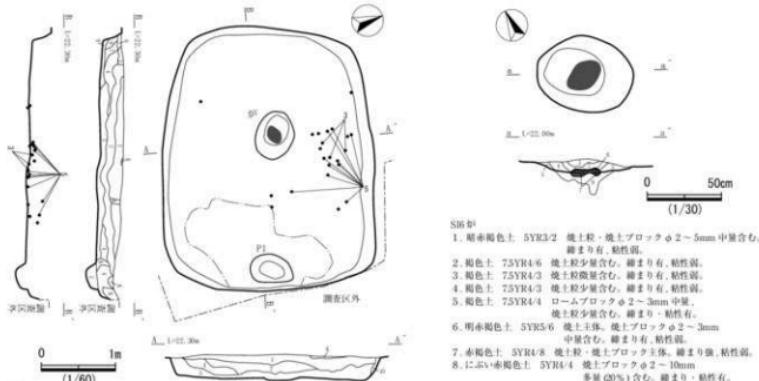
【所見】形態的に他の竪穴建物跡とは規模や深さの面など明らかに差異がある。床面は特に硬化した部分はないものの隅丸方形の形状や掘り方のように粗い掘り込みなどから竪穴建物跡としたが、大形の土坑の可能性もある。遺構の時期を判断できる遺物が出土していないが遺構の形状から弥生時代の所産と思われる。

第6表 SI4 出土遺物観察表

遺物 番号	固有 番号	種類 記載	目録 登録 番号	部位・保存率・製作技法・その他特徴	地質	色調 (外壁／内壁)	性状	備考
SI4	1	繩文土器 圓筒	— (3.5) —	口縁部・半周圓筒を施す。	石英、長石、雲母	10YR6/4にぶい黄褐色 10YR3/2黒褐色	普通	

SI6 (第21-22図、第7表、図版8-9-23)

【位置】H-4 グリッドに位置する。【形態・規模】東側が調査区外となるため、調査区を拡張した。平面形状はやや歪な長楕円形を呈する。規模は、南北軸で288m、東西軸で3.53m、主軸方向はN-73°-Wを測る。【覆土】黒色土、黒褐色土、暗褐色土、にぶい黄褐色土、褐色土など10層に分層され



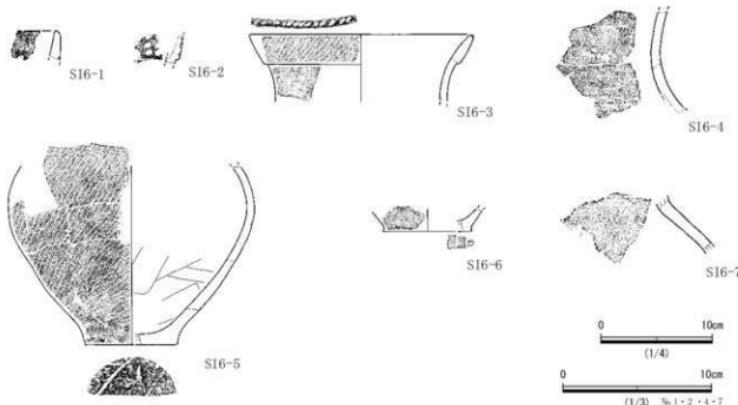
SI6

- 黒褐色土。10YR3/1 ローム粒少量含む。縮まり有、粘性弱。
- 黒色土。10YR2/1 ローム粒・ロームブロックφ2~5mm 少量含む。縮まり有。粘性弱。
- 黒褐色土。10YR2/4 ロームブロックφ2~10mm 中量含む。縮まり有、粘性弱。
- 黒褐色土。10YR2/3 ローム微混・ロームブロックφ2~10mm 中量含む。縮まり有、粘性弱。
- にぶい黄褐色土。10YR4/3 ロームブロックφ5~15mm 多量(30%)含む。縮まり有、粘性弱。
- 褐色土。10YR4/4 ローム粒少量含む。縮まり有、粘性弱。
- 黒褐色土。10YR4/5 ローム粒少量含む。縮まり有、粘性弱。
- にぶい黄褐色土。10YR4/3 ロームブロックφ5~10mm 多量(20%)含む。縮まり有、粘性弱。
- 黒褐色土。10YR4/6 ローム質土。黒褐色土底面上に多量(30%)含む。縮まり、粘性有。

- SI6解説
- 褐赤褐色土。5YR3/2 地上部・地上ブロックφ2~5mm 中量含む。縮まり有、粘性弱。
 - 褐色土。7.5YR4/6 地上部少量含む。縮まり有、粘性弱。
 - 褐色土。7.5YR4/3 地上部微量含む。縮まり有、粘性弱。
 - 褐色土。7.5YR4/3 地上部少量含む。縮まり有、粘性弱。
 - 褐色土。7.5YR4/4 ロームブロックφ2~3mm 中量含む。縮まり有、粘性弱。
 - 褐色土。7.5YR4/5 地上部少量含む。縮まり有、粘性弱。
 - 明赤褐色土。5YR5/6 地上部・地上ブロックφ2~3mm 中量含む。縮まり有、粘性弱。
 - 赤褐色土。5YR4/6 地上部・地上ブロック土体。縮まり強、粘性弱。
 - にぶい黒褐色土。5YR4/4 地上部ブロックφ2~10mm 多量(20%)含む。縮まり有、粘性弱。

第21図 SI6

た自然堆積を呈し、床面までの深さは33cmを測る。【床面・壁】床面は平坦でP1の周辺が硬化している。周溝は検出されていない。壁は緩やかに立ち上がる。【ピット】1基が東壁際中央で検出されている。P1は最大径61cm・深さ14cmを測り、炉との位置関係から出入り口施設に関するピットと判断される。【炉】中央より東寄りに1基を検出している。炉の平面形状は楕円形で最大径65cm・深さ10cmを測り、よく被熱した火床面を残す。【遺物】出土遺物は少なく、いずれも細片が多い。出土位置は炉の北側に纏まる傾向が認められる。覆土中より出土した遺物は総点数で22点である。そのうち土器7点を図示した。1と2は同一個体とみられる。複合口縁で複合部には無文に円形刺突文が3段施文されている。3も複合口縁で附加条縄文が施される。4は頭部無文で胴部には附加条縄文が施され、端部には2列のS字状結節文がみられる。白井南式土器の範疇と判断される。5は全面に附加条縄文が施され、等間隔にS字状結節文が巡る。6は単節縄文が全面に施文される。5・6の底面には木葉痕がみられる。7は混入したとみられる土師器底である。【所見】本遺構は、その形態や出土遺物が「北関東系土器」と称される土器で占められており、弥生時代後期前葉と判断される。



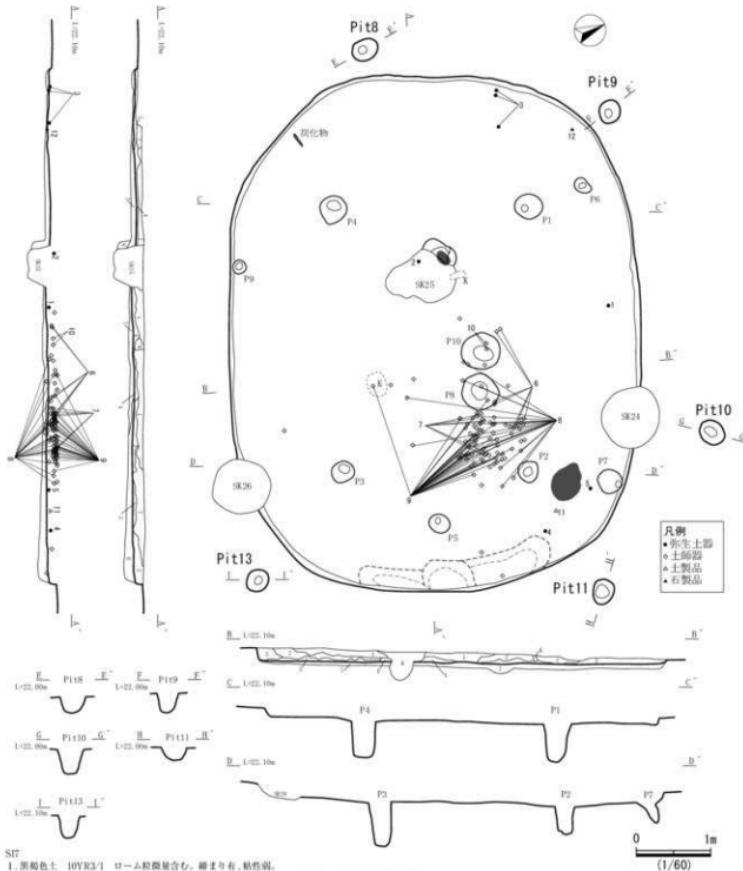
第22図 S16出土遺物

第7表 S16出土遺物観察表

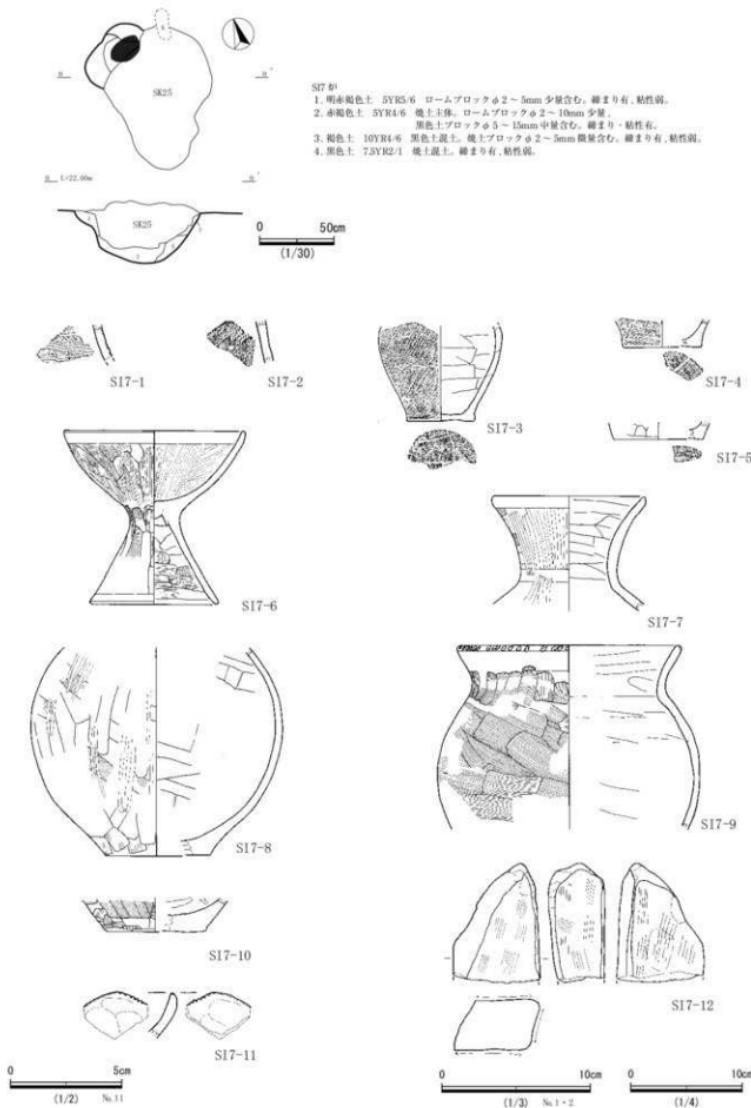
遺構 番号	表面 特徴	横幅 高さ	口径 高さ 底径	部位・保存率・製作技法・その他特徴	胎土	色調 (外面/内面)	焼成	備考
S16	1 弥生土器 底	—	(2.0) —	口縁部片、複合口縁、地文無文、円形刺突文が施される。	白色粘、赤褐色粘	S16/4明赤褐 S16/3C灰い赤褐	良好	2と同一個体。
	2 弥生土器 壁	—	(1.9) —	口縁部片、複合口縁、地文無文、円形刺突文が3段に施される。	白色粘、赤褐色粘	S16/4明赤褐 S16/3C灰い赤褐	普通	1と同一個体。
	3 弥生土器 底	(20.0) (6.0) —	— — —	口縁～頸部片、複合口縁で附加条縫文(種R-2B)を施す。口縁部は縫文端部によるきず、底部は地文無文。	白色粘、石英、長石	S16/6繩 10V6/2C2黄褐	普通	
	4 弥生土器 壁	(6.9) —	— —	縫～頸部片、縫部は無文、縫部は附加条縫文(種R-2B)が施され、縫部に2列のS字状結節文が施される。	白色粘、石英、長石、 赤青石	7.3W6/1褐色 7.3W6/2灰褐色	普通	
	5 弥生土器 底	(16.0) (8.2) —	— — —	腹～近部40%存、地文に附加条縫文(種R-2B)にS字状結節文等開削孔に構せずする。底面に木葉痕、内面にコタ付する。	白色粘、石英、長石、 藍母、赤褐色粘	S16/6繩 S16/6繩	普通	縫構外21と同一個体。
	6 弥生土器 底	(2.0) (8.0) —	— — —	底底片、地文に単節縫文Rを施す。底面に木葉痕。	白色粘、石英、長石、 藍母	S16/4C黒灰 S16/4C黒褐	普通	
	7 土師器 底	(3.6) —	— —	縫～頸部片、内外面ナゲ。	白色粘、石英、雲母	S16/6繩 S16/4C出い縫	普通	混入遺物。

SI7 (第23-24図、第8表、図版9・23)

【位置】D-E-3-4 グリッドに位置する。SK24-25-26に壊されている。【形態・規模】平面形状は小判形を呈する。規模は、南北軸で 6.94 m、東西軸で 5.58 m、主軸方向は N -68° - W を測る。【覆土】黒褐色土、暗褐色土、にぶい黄褐色土、褐色土の5層に分層された自然堆積を呈する。床面までの深さは 15cm を測り、掘り込みは浅い。【床面・壁】床面は平坦で全体的にやや硬化している。周溝



第23図 SI7



第24図 SI7炉・SI7出土遺物

は検出されていない。壁は緩やかに立ち上がる。床面には10cmの貼り床が認められる。【ピット】P1～10のピット10基と竪穴外にPit8～11・13のピット5基が周囲を囲むように配されている。P1～10はいずれも床面より検出されている。P1は最大径39cm・深さ49cm、P2は最大径26cm・深さ37cm、P3は最大径31cm・深さ59cm、P4は最大径39cm・深さ45cm、P5は最大径28cm・深さ33cm、P6は最大径25cm・深さ16cm、P7は最大径31cm・深さ35cm、P8は最大径51cm・深さ17cm、P9は最大径18cm・深さ20cm、P10は最大径52cm・深さ28cmを測る。P1～4は規則的に配されており主柱穴と判断される。P5は炉との位置関係より出入り口に関するピットとみられる。その他のピットには、その建物規模より補助的な柱穴の可能性がある。また、竪穴外に配されたPit8～11・13のピット5基はPit8が最大径28cm・深さ22cm、Pit9が最大径32cm・深さ26cm、Pit10が最大径37cm・深さ30cm、Pit11が最大径34cm・深さ17cm、Pit13が最大径31cm・深さ29cmを測る。【炉】中央よりやや西側に1基検出しているが、SK25と重複し壊されている。平面形状は楕円形を呈していたとみられ、最大径78cm・深さ31cmを測り、よく被熱した火床面が僅かに残存する。【遺物】出土遺物は規模の割に少なく、いずれも細片が多い。出土位置はP2とP8の間付近にまとまっている。覆土中より出土した遺物は総点数で61点（うち土製品1点、石製品1点）、そのうち土器12点、石製品1点を図示した。1～5の弥生土器はいずれも広口壺とも称せる甕で、1は3本同時施文具による櫛描波状文が横走する。2・3・4の胴部には附加条縄文が施文される。4・5の底面には木葉痕がみられる。6～10は古墳時代の土師器である。高环・壺・甕にはいずれもハケ調整がみられ、およそ古墳時代前期後半の範疇と判断されるが9の甕は口唇部にキザミが認められ古相を示す。【所見】建物跡の形態としては弥生時代の所産と考えられる。遺物は、土師器が竪穴建物跡の範囲内の1・2層中から纏まって出土しているのに対し、弥生土器は主に下層の3～5層中に出土している。周囲では後述する古墳時代前期の竪穴建物跡SI9-11が検出されており、意図してこの場所に廃棄している可能性も想定される。これらの状況を重視して、本造構の時期を弥生時代後期前葉と判断した。

第8表 SI7出土遺物観察表

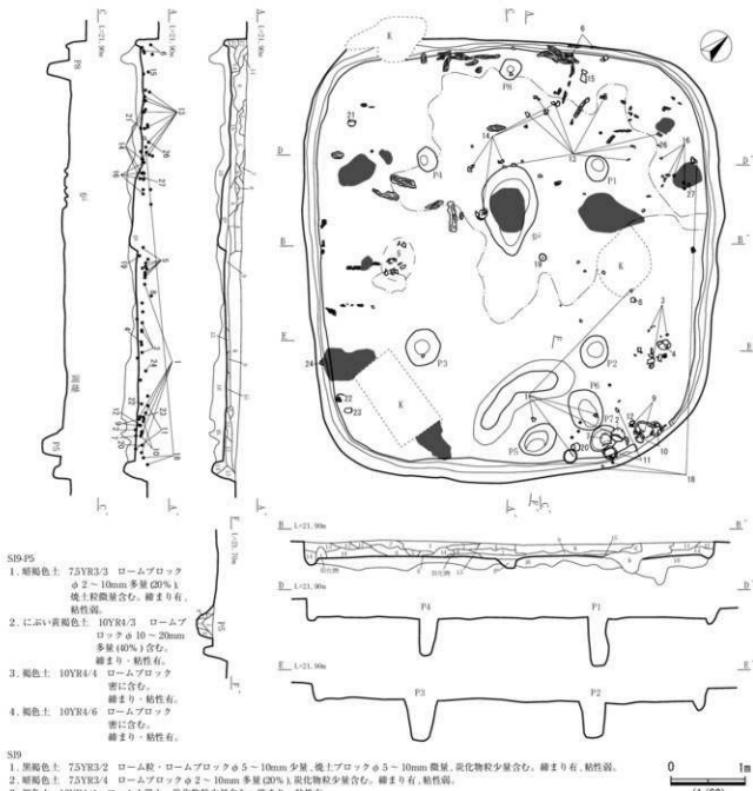
遺物 番号	固有 番号	種類 ・形態	口径 ・底径	部伝・保存率・製作技術・その他特徴		胎土	色調 (外観/内面)	焼成	備考
				部伝	保存率				
SI7	1	弥生土器 甕	(2.4) —	筒形片、地又無れ、3本同時施文具による櫛描波状文が3段以上横走する。	良好	白色粘、石英、赤褐色 7.5106/41c-54a-6根	10YR6/4にぶい黄褐 7.5106/41c-54a-6根	良好	
	2	弥生土器 甕	(2.9) —	筒形片、附加条1種LR+2Rを施文。	良好	白色粘、石英 5105/41c-54-6根 5106/41c-54-6根		普通	
	3	弥生土器 甕	(6.5) (6.0)	筒形片、附加条1種LR+2Rを施文。底面に木葉痕。外面横行付。	良好	白色粘、石英、雲母、赤褐色 7.5106/41c-54-6根	10YR6/4にぶい黄褐 10YR6/41c-54-6根	普通	
	4	弥生土器 甕	(2.5) (7.0)	胴～底部片、附加条1種LR+2Rを施文。底面に木葉痕。	良好	白色粘、石英、長石、雲母、赤褐色 7.5106/41c-54-6根 7.5106/41c-54-6根		普通	
	5	弥生土器 甕	(8.0) —	底面片、附加条ナダ、底面に木葉痕。	良好	白色粘、石英 7.5105/6根 7.5106/2根		普通	
	6	土師器 高环	(16.2) 16.5 (11.0)	20%存、外部外表面・斜辺ハケ後一面に磁化ミガキ、内部表面・斜辺ミガキ、口唇部ヨコナザ、外部外表面ハケ、内部横位ハケ、下端ヨコナダ。	良好	白色粘、石英、雲母 7.5106/41c-54-6根 7.5106/6根		普通	表入遺物。
	7	土師器 甕	(13.6) (16.2)	口縁～胴部20%存、口唇部ヨコナザ、外表面ハケ後、磁化ミガキ、内部横位ハケ。	良好	白色粘、石英、雲母、赤褐色 5105/41c-54-6根 5106/6根	10YR6/4にぶい黄褐 5106/6根	良好	表入遺物。
	8	土師器 甕	(18.7) (9.7)	胴～底部片、胴部外表面ハケ後、ナラズレ一部にヘウミガキ付。内部内凹部ヨコナダ。	良好	白色粘、石英、長石、雲母、赤褐色 5105/41c-54-6根 5105/6根		良好	表入遺物。
	9	土師器 甕	(16.1) (16.5)	口縁～胴部60%存、口唇部にハケ工具によるキザミ。口縫部ヨコナザ。外表面・斜辺ハケ、内表面・斜辺のヘーラナ。外表面付着。	良好	白色粘、石英、雲母、赤褐色 7.5106/41c-54-6根 5105/6根	10YR6/4にぶい黄褐 5105/6根	普通	表入遺物。
	10	土師器 甕	(3.1) (9.0)	胴～底部片、外表面・斜辺ハケ、内表面ナダ。	良好	白色粘、石英、赤褐色 5106/6根 5105/6根		普通	表入遺物。
	11	土製品 ミニチャイア土器	(2.0) —	高円形のミニチュア土器の外縁部、口部にキザミ。	良好	白色粘、雲母 10YR6/4にぶい黄褐 5105/6根		普通	表入遺物。
	12	6製品 砥石	—	長さ：(16.7) cm、幅：(7.9) cm、厚さ：(5.1) cm、重さ：(502.2) g、石材：砂岩。	良好				

第4節 古墳時代

(1) 壓穴建物跡

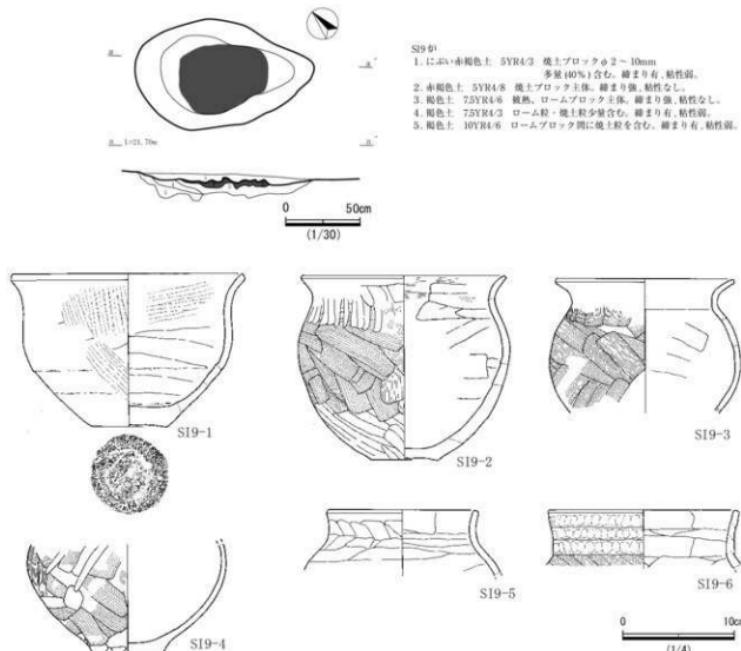
SI9 (第25・26・27図、第9表、図版9-10・11・24・25)

【位置】F-4-5グリッドに位置する。一部に擾乱がみられる。【形態・規模】平面形状はやや歪な隅丸方形を呈する。規模は、南北軸で5.97m、東西軸で5.65m、主軸方向はN -52° - Wを測る。

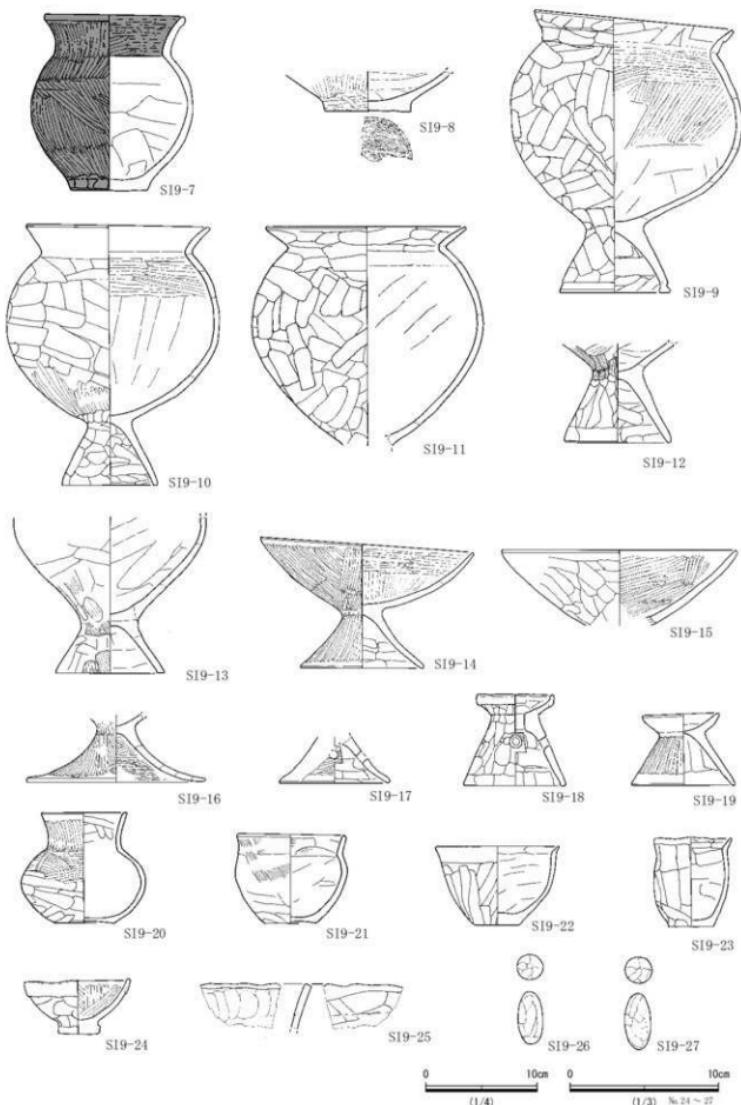


第25図 SI9

【覆土】黒褐色土、暗褐色土、褐色土を主体とした15層に分層された自然堆積を呈するが、建物跡西側は層が乱れており焼失後の堆積かまたは搅乱の影響を受けている可能性がある。床面までの深さは20cmを測る。【床面・壁】床面は平坦で炉付近を中心に硬化しているが、西側には広がりが認められない。焼失かまたは搅乱の影響があったためと思われる。周溝は南東隅を除き巡り、壁は緩やかに立ち上がる。床には最大18cmの貼り床が認められ、掘り方は起伏をもつ。【ピット】P1～8のピット8基が床面より検出されている。P1は最大径36cm・深さ65cm、P2は最大径45cm・深さ48cm、P3は最大径51cm・深さ56cm、P4は最大径34cm・深さ48cm、P5は最大径54cm・深さ24cm、P6は最大径58cm・深さ10cm、P7は最大径39cm・深さ15cm、P8は最大径28cm・深さ32cmを測る。P1～4は規則的に配されており柱穴と判断される。P5は炉との位置関係より出入り口に関するピットとみられ、数cmの高まりをもつ周堤が付随する。【炉】中央よりやや北西側に1基検出している。平面形状は長楕円形で、最大径122cm・深さ7cmを測り、よく被熱した火床面がみられる。【遺物】出土遺物は比較的遺存度の良いものが多く、南東隅には壺類が纏まって出土している。覆土中より出土した遺物は総点数で127点（うち土製品2点）である。そのうち土器25点、土製品2点を図示した。壺には平底と台付の両者が混在する。5の壺はハケ調整ではないが口縁部が直立気味で多摩型壺の影響が窺える。6の壺は前代に系譜をもつ3段の輪積装飾がみられ古相を示す。一方10・11などはハケではなく



第26図 SI9炉・SI9出土遺物①



第27図 S19出土遺物②

第9表 S19出土遺物觀察表

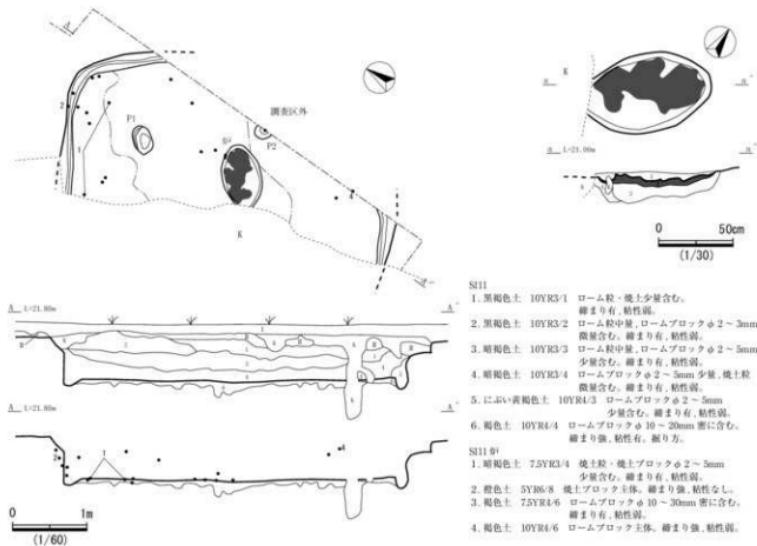
遺物 番号	図面 番号	種類 器種	径深 高径 直徑	部位・保存率・製作技術・その他の特徴	胎土	色調 (外面/内面)	焼成	備考
1	土師器 甕	21.6 13.5 6.0	70%存、外面部に口縁部黒漆器。外面部・斜位ヘラミガキ、内部上半横・斜位ヘラミガキ。下半横部ヘラマダ、底面に木梶漆。	白色粘、右黄、黒斑、 赤褐色斑。	7. SYE6/4に占比1根 7. SYE5/6明褐	普通		
2	土師器 甕	18.4 16.5 6.0	90%存、口縁部ヨコナダ。腹部外面上端斜位ヘラケズリ、以下斜位ヘラカ、脚部下斜位ナダ。内面部・斜位ヘラマダ、底面ナダ。	白色粘、右黄、長石、 黒斑	7. SYE7/6根 7. SYE5/4に占比1根	良好		
3	土師器 甕	(16.0) 12.0	口縁～腹部50%存、内面部表面黒漆器。外面部・斜位ヘカ、内面部斜位ヘラマダ。	白色粘、右黄、長石	7. SYE4/4に占比1根 7. SYE5/2灰褐	普通		
4	土師器 甕	— (9.7) 6.4	脚～底部40%存、内面部表面黒漆器。外面部・斜位ヘカ、底面ナダ。	白色粘、右黄、長石	2. SYE6/6根 2. SYE5/6明赤褐	普通		
5	土師器 甕	(13.5) (5.8)	口縁～脚部30%存、内面部表面黒漆器。口縁部ヨコナダ、脚部ナダ。脚部外面斜位ヘラマダ、内面部・斜位ヘラマダ。	白色粘、右黄、黒斑	2. SYE5/6明赤褐 2. SYE6/6赤褐	良好		
6	土師器 甕	(17.0) (5.2)	口縫部片、口縫部外面下斜位～段の輪縫痕、周縫直压が顕著、内面部ヨコナダ、脚部斜位ヘバハ。	白色粘、右黄、長石、 黒斑	SYE6/6根 SYE5/5明赤褐	良好		
7	土師器 甕	12.6 15.8 7.0	定期、内面部表面に口縁部黒漆器。内面部斜位ヘラミガキ、口縫部ヨコナダ・ミガキ。脚部内部斜位・斜位ヘラマダ、底面ナダ、外部ヨコナダと内面部ヨコナダに占比1に近似。	白色粘、右黄、黒斑	2. SYE5/6明赤褐 2. SYE6/6根	普通		
8	土師器 甕	— (7.8)	脚～近底部、外縁ヘラカ、内面ヘラナダ、底面に木梶漆。	右黄、黒斑、赤褐色粘	2. SYE5/6明赤褐 2. SYE5/6明赤褐	良好		
9	土師器 台付甕	18.6 25.3	口縁～全体90%存、口縫部外面下斜位の輪縫痕、口縫部ヨコナダ、脚部・斜位ヘラカ、脚部斜位ヘバハ。脚部内部斜位・斜位ヘラマダ、内面部表面黒漆器。	白色粘、右黄、黒斑、 赤褐色粘	2. SYE5/6明赤褐 7. SYE6/4に占比1根	普通		
10	土師器 台付甕	10.0 23.0 8.5	定期、脚部斜位ヘラカ、脚部上面に輪縫痕ヘラカ、脚部ヨコナダ、脚部内部斜位・斜位ヘラマダ、内面部表面黒漆器。	白色粘、右黄、黒斑	2. SYE5/6明赤褐 2. SYE6/8明赤褐	普通		
11	土師器 台付甕	18.6 (19.5)	口縁～脚部70%存、口縫部ヨコナダ、脚部斜・斜位ナダ、内面部表面黒漆器。	白色粘、右黄、黒斑、 赤褐色粘	7. SYE7/6根 7. SYE7/12.5に占比1根	普通		
12	土師器 台付甕	— (9.0) 9.5	脚～台部20%存、脚部表面ヘカ、内面部ナダ。台部外面ナダ、内面部ヨコナダ。内面部ヨコナダ。	白色粘、右黄、長石、 黒斑	SYE5/5明赤褐 SYE6/4に占比1根	普通		
13	土師器 台付甕	(14.0) (9.8)	脚～台部20%存、外面部ヘラヘラナダ、内面部ヘラナダ。外面部表面黒漆器、内面部表面黒漆器。	白色粘、右黄、黒斑、 赤褐色粘	2. SYE5/6赤褐 2. SYE5/6明赤褐	普通		
14	土師器 高杯	19.2 11.7 11.0	90%存、口縫部ヨコナダ、外面部・斜位ヘカ。底部内面部ナダ、脚部下端ヨコナダ、内面部表面黒漆器。	白色粘、右黄、 赤褐色粘	2. SYE5/6明赤褐 2. SYE6/6赤褐	普通		
15	土師器 高杯	(21.0) (6.7)	脚部片、口縫部ヨコナダ、外面部斜位ナダ、内面部・斜位のミガキ。	白色粘、右黄、黒斑、 赤褐色粘	7. SYE6/4に占比1根 10YR7.5/4.5に占比1根	普通		
16	土師器 高杯	— (6.0) 16.0	脚部40%存、外面部・斜位ヘカ。底部内面部ナダ、脚部下端ヨコナダ、ヨコナダ。	白色粘、右黄、角閃、 赤褐色粘	7. SYE6/4に占比1根 7. SYE5/4に占比1根	普通		
17	土師器 脚台	(4.1) (10.0)	脚盤片、外面部・斜位ヘカ。内面部ナダ。3.5所透孔。	白色粘、右黄、黒斑	2. SYE5/6赤褐 SYE6/4に占比1根	普通		
18	土師器 脚台	7.0 9.2	70%存、外面部ナダ。3.5所の透孔。うち1は所貫通。	白色粘、右黄、赤褐色粘	SYE5/6赤褐 7. SYE5/6明赤褐	普通		
19	土師器 脚台	6.9 6.5 9.4	完形、受け皿ヨコナダ、脚部外面表面ヘラカ、脚部下端ヨコナダ。内面部ナダ、脚部焼付片。	白色粘、右黄、黒斑、 角閃石	2. SYE5/6明赤褐 2. SYE4/4赤灰	普通		
20	土師器 小型壺	7.6 5.3	完形、口縫部ヨコナダ、脚部及び脚部上半纏・斜位ヘカ。脚部下端ヘラカ、内面部ナダ。外面部表面黒漆器。	白色粘、右黄、赤褐色粘	10YR6.4/2.5に占比1根 10YR6.4/2.5に占比1根	普通		
21	土師器 小型壺	9.7 8.6 5.3	完形、口縫部ヨコナダ、脚部外面表面ヘラカ。底部ナダ、内面部表面黒漆器。外面部焼付片、内面部表面黒漆器。	白色粘、右黄、角閃、 赤褐色粘	SYE6/4に占比1根 SYE4/6赤褐	普通		
22	土師器 小型甕	11.0 7.0 4.0	80%存、口縫部ヨコナダ。外面部・斜位ナダ、内面部・斜位ヘラカ。	白色粘、右黄、赤褐色粘	SYE6/6根 SYE5/5明赤褐	普通		
23	土師器 小型甕	7.0 4.0	ほぼ完形、口縫部ヨコナダ、脚部外面表面・斜位ナダ、底面ナダ、内面部表面ヘラカ。底部内面部焼付片。	白色粘、右黄、長石、 赤褐色粘	7. SYE6/6根 SYE6/4に占比1根	普通		
24	土師器 小型台付 鉢	7.2 3.6 2.7	完形、焼付片ヨコナダ。口縫部ヨコナダ、体部外面ナダ、底面ナダ、内面部表面ヘラカ。内面部焼付片。	白色粘、右黄、赤褐色粘	SYE4/6赤褐 SYE5/5明赤褐	普通		
25	土師器 甕カ	(3.0)	口縫部片、外面部表面による連続焼付、内面部ヨコナダ。	右黄、長石、赤褐色粘	SYE5/6明赤褐 SYE5/6明赤褐	普通		
26	土製品 模造品	—	長さ:3.70cm、横:1.70cm、重さ:11.8g。完形、指輪によるナダ。	白色粘	7. SYE2/1黑	普通		
27	土製品 模造品	—	長さ:3.50cm、横:1.70cm、重さ:11.3g。完形、指輪によるナダ。	白色粘、黒斑	SYE5/4に占比1根	普通		

ケズリ・ナダ調整でくの字状を呈する頭部の屈曲も急であり新相を示す。20～23の小型甕・壺類や24の小型台付鉢など小型の土器が目立つが小型丸底壺は出土していない。これらは26・27の土製品を含め祭祀的な行為に関連した遺物とみられる。【所見】本遺構は、床面には焼土や炭化材が多くみられ、焼失竖穴建物跡であると考えられる。時期は遺構の形態や出土遺物から、やや幅があるものの古墳時代前期前半の範疇と判断される。

SI11 (第28・29図、第10表、図版12・25)

【位置】F-6グリッドに位置する。西側は大きく搅乱により失われている。南東側は調査区外で道路に接しており、可能な限り拡張を行った。【形態・規模】平面形状は隅丸方形とみられる。規模は、南北軸で450m、東西軸は残存値で286m、主軸方向はN-53°-Eを測る。【覆土】黒褐色土、暗褐色土、にぶい黄褐色土などの5層に分層された自然堆積を呈する。床面までの深さは65cmを測り、掘り込みは深い。【床面・壁】床面は平坦で炉付近を中心に硬化している。確認範囲では周溝が認められ、壁は垂直に立ち上がる。床は最大15cmの貼り床が認められ、掘り方はやや起伏をもつ。

【ピット】ピット2基が床面より検出されている。P1は最大径39cm・深さ26cm、P2は東側が調査区外となり、確認範囲で最大径20cm・深さ10cmを測る。P1はやや浅いが炉との位置関係から柱穴と判断される。【炉】中央よりやや北東側に配されている。一部を搅乱により壊されているが、平面形状は楕円形で、残存値で最大径83cm・深さ20cmを測り、よく被熱した火床面が認められる。【遺物】出土遺物は少なく細片が多い。やや北隅に纏まって出土している。覆土中より出土した遺物は総点数で23点と少ない。土器はいずれも細片であるが、そのうち弥生土器3点と土師器1点を図示した。1は土師器の甕でナデ調整。2は尖唇状の口縁部で折り返され、無節縄文が施されている。3と4は同一個体とみられ、複合口縁で、縱方向に羽状縄文が施されている。【所見】本遺構は、その形態から古墳時代前期で、1の土師器が遺構に伴い、2~4の弥生時代後期の遺物は出土位置から混入したものと判断される。SI9とも近いことから同様に前期前半である可能性が高い。



第28図 SI11



第29図 S11出土遺物

第10表 S11出土遺物観察表

遺構 番号	開面 面種	種類 面種	口縁 深さ 直径	部族・残存率・製作技法・その他の特徴	断土	色調 (外観/内面)	焼成	備考
S11	1	土師器 壺	(1.6) (2.3) —	口縁部分、口縁部コナダ。 口縁部分、複合口縁で無頭を瓶底、口肩部は擦削して無頭部が圓文原体によるキザが施されているとみられる。瓶部は無頭。	白色地、石英、赤褐色地 T.3YR6/4に近い褐 7.5YR6/3に近い褐	良好		
	2	陶生土器 広口壺	(3.2) —	口縁～瓶底片、複合口縁で附加条1周BL-2L-1B-2Eで縱方向に羽状構成をとる。口肩部は圓文原体によるキザ。	石英、雲母 10YR5/2K黃褐色 10YR6/4C-5A-5B	普通	壺入遺物。	
	3	陶生土器 広口壺	(2.7) —	口縁～瓶底片、複合口縁で附加条1周BL-2L-1B-2Eで縱方向に羽状構成をとる。口肩部は圓文原体によるキザ。	石英、雲母、赤褐色地 7.5YR6/6褐	普通	壺入遺物。4と同一個体。	
	4	陶生土器 広口壺	(2.7) —	口縁～瓶底片、複合口縁で附加条1周BL-2L-1B-2Eで縱方向に羽状構成をとる。口肩部は圓文原体によるキザ。	石英、雲母 10YR6/4C-5A-5B	普通	壺入遺物。3と同一個体。	

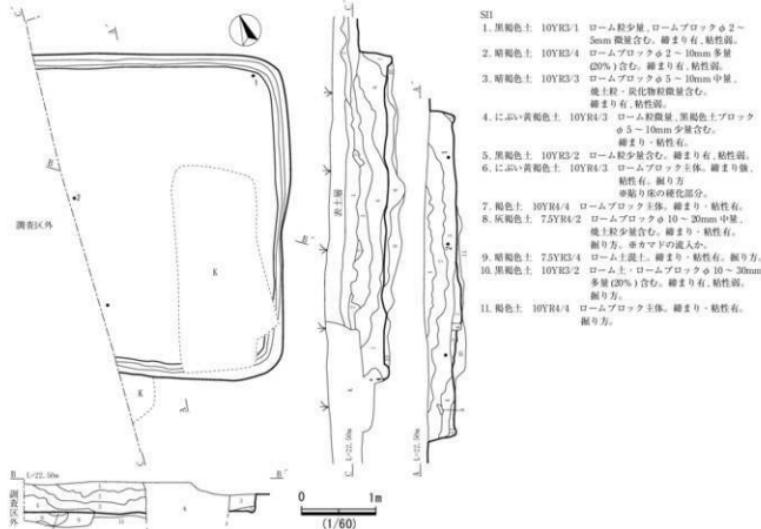
第5節 奈良・平安時代

(1) 竪穴建物跡

S11 (第30-31図、第11表、図版12-13-25)

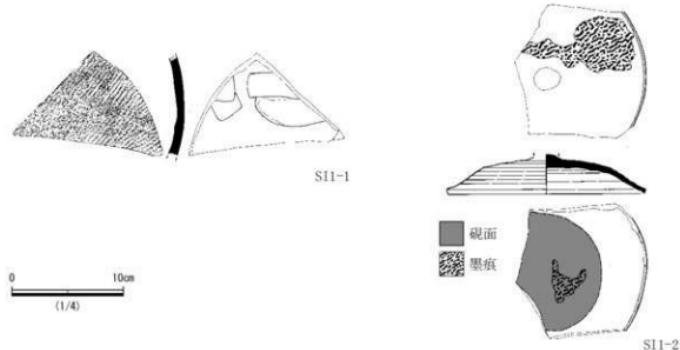
[位置] I-1 グリッドに位置する。西側は調査区外となる。また、擾乱により一部が失われている。

[形態・規模] 挖り込みはやや深い。平面形状は正方形を呈するものとみられる。規模は、南北軸で4.37



第30図 S11

m、東西軸で残存値で3.47m、主軸方向はN-25°-Eを測る。【覆土】黒褐色土、暗褐色土、にぶい黄褐色土、褐色土などの7層に分層され自然堆積を呈し、床面までの深さは40cmを測る。【床面・壁】床面はやや起伏をもち、全体的に硬化している。周溝は検出範囲で全周する。壁は垂直に立ち上がる。床は最大25cmの貼り床が認められ、掘り方は起伏をもつ。【ピット】掘り方も含め検出されていない。【カマド】検出されていないが、掘り方8層の土層が、カマドからの流れ込みとも捉えられ、西側に残存する可能性がある。【遺物】出土遺物は極めて少ない。覆土中より出土した遺物は4点のみである。そのうち須恵器2点を図示した。1は須恵器の蓋で外面に斜位の平行叩きがみられる。2は須恵器の蓋で、内面に顕著な磨り面が認められることや内外面の一部に墨が付着していることから、転用硯として二次利用されたとみられる。【所見】本遺構は、その形態や極めて少ない出土遺物から判断すれば、奈良・平安時代、およそ9世紀前半の範疇と判断される。



第31図 SI1出土遺物

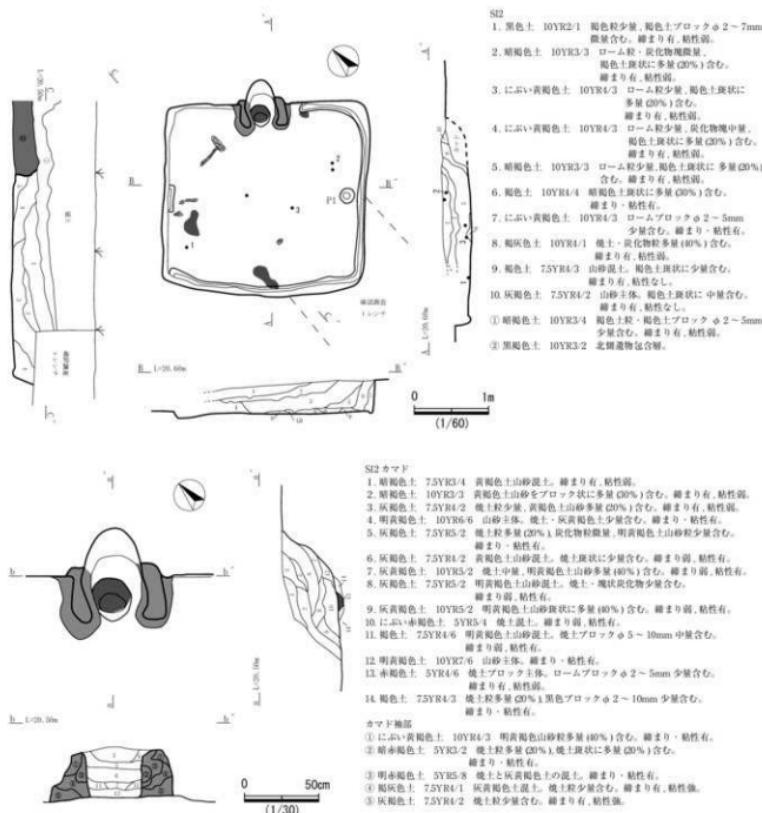
第11表 SI1出土遺物観察表

遺構 番号	回復 番号	種類 記録	目録 登録 底辺	部位・保存率・製作技法・その他特徴	施主	色調 (外面/内面)	焼成	備考
SI1	1 須恵器 蓋	—	(9,2) —	側面部、外面部の平行タタキ、横穴のナデ、当具痕あり。	石英	10986/1黒灰 10987/1灰白	薄元	
	2 須恵器 蓋	17,6 (3,5) —	天井-口縁部69%存、ロクロ成型、天井部同軸ヘラケツリ、内面 中央部に鏡面として転用されている。内外面に塵付着。	石英、長石、雲母 SI1/1灰白 SI1/1灰	薄元	転用硯		

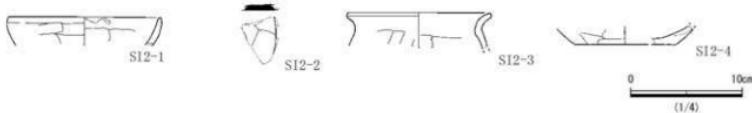
SI2（第32-33図、第12表、図版13-25）

【位置】B-2グリッドに位置する。緩やかな斜面地にあり北側遺物包含層を掘り込んで構築されている。【形態・規模】平面形状は方形を呈する。規模は、南北軸で2.54m、東西軸で2.75m、主軸方向はN-43°-Eを測る。【覆土】黒色土、暗褐色土、にぶい黄褐色土、褐色土、灰褐色土などの10層に分層された自然堆積を呈し、床面までの深さは42cmを測る。【床面・壁】床面は平坦で顕著な硬化面は認められない。周溝はカマドの東側から西側隣まで巡る。壁は垂直に立ち上がる。床は直床に近く、貼り床は確認できなかった。【ピット】南東壁際中央に1基が検出されている。P1は最大径21cm・深さ8cmを測る。壁際にある位置関係から、出入り口に関するピットと判断されるが、カマドとの位置が対面にならないのは、斜面地という制約があったためであろうか。主柱穴は検出されていない。【カマド】北東壁の中央に位置する。全長は75cm、壁から煙道は31cmである。幅は両袖が残

存し、左袖 48cm、右袖 42cm で構築材には山砂が用いられている。燃焼部の奥行きは 44cm、幅 33cm である。火床面は明瞭に残り径 28cm で、被熱層は 4cm である。P1 が出入り口に伴うとすれば、東側への付設を意識したものであろうか。【遺物】出土遺物は少なく細片が多い。平面分布は散在しており、偏重は認められない。床面には少量だが焼土や炭化材が認められる。覆土中より出土した遺物は総点数で 11 点である。そのうち土師器 3 点、須恵器 1 点を図示した。1 は非ロクロ成形で、ケズリ調整の土師器杯で口唇部にタールが付着しており、灯明具として使用された可能性がある。【所見】本遺構は、その形態や少ない出土遺物から奈良・平安時代、概ね SI1 と近似する 9 世紀前半の範疇と判断される。



第32図 SI2



第33図 SI2 出土遺物

第12表 SI2 出土遺物観察表

遺構 番号	平面 番号	種類 記載	目録 登録 番号	部位・残存率・製作技法・その他の特徴	新土	色調 (外観/内面)	焼成	備考
SI2	1	土師器 甕	(13.6) (2.6) —	口縁部、口縁部ヨコナギ、体外側面ヘラケズリ、内面ナギ、口唇部タール付着。	白色粘、石英、赤褐色 3185.6明水施 3185.6明水施	普通		
	2	須恵器 甕	(0.6) —	底面片、クロク形、底面一定方向のヘラケズリ。	石英 2.5V6/2R黄 2.5V6/2R黄	薄元		
	3	土師器 甕	(13.6) (3.2) —	口縁部～側面片、口縁部ヨコナギ、外表面底面ヘラケズリ、内面横底面ヘラケズリ。	石英、長石、雲母、半 透明 10V4/2R黄 10V5/2R黄 —	普通		
	4	土師器 甕	— (1.6) (9.0)	底面片、側面斜底面ヘラケズリ。底面一定方向のヘラケズリ、内面端 面削離。	白色粘、石英、赤褐色 7.5V8/3R 7.5V8/3R —	普通		

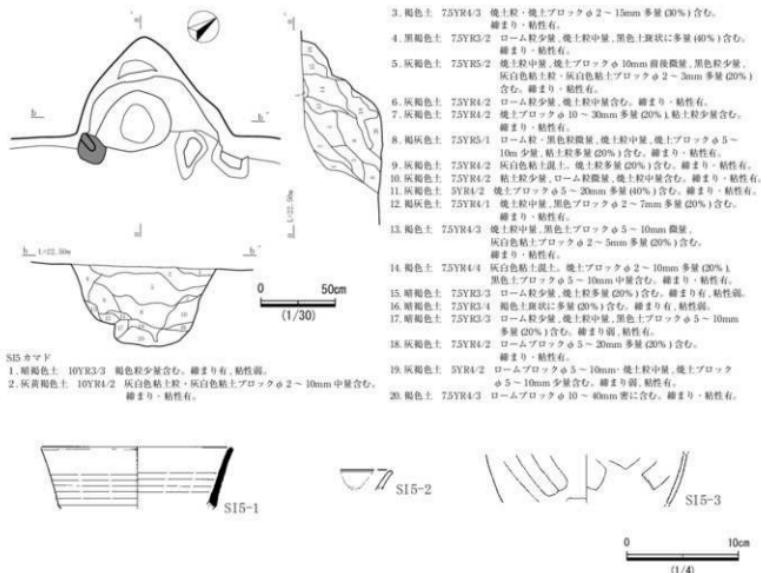
SI5 (第34-35図、第13表、図版13-14・25)

【位置】 H-3 グリッドに位置する。【形態・規模】 平面形状はやや正方形を呈する。規模は、南北軸で 2.83 m、東西軸で 2.91 m、主軸方向は N-50°-W を測る。【覆土】 黒褐色土、暗褐色土、にぶい黄褐色土、褐色土を主体とする 16 層に分層された自然堆積を呈する。床面までの深さは 45cm を測り、掘り込みは深い。【床面・壁】 床面はやや起伏をもち、全体的に硬化している。周溝はカマドの東側から南東壁中央までと南隅に検出されている。壁は垂直に立ち上がる。床は最大 25cm の貼り床が認められ、掘り方は起伏をもつ。【ピット】 掘り方とも含め検出されなかった。【カマド】 北西壁の中央に位置する。火床面は残存せず、ほぼ掘り方が露呈した状態であった。左袖が僅かに残っているものの、検出状況であった。廃棄時に意図して壊されたものと考えられる。残存値で全長は 93cm、



第34図 SI5

壁から煙道は 70cm である。幅は 99cm で、左袖が僅かに残存し、右袖は失われていたが地山に痕跡が認められる。左袖から構築材は灰褐色の粘土が使用されていたようである。燃焼部は奥行き 87cm、幅 56cm である。【遺物】出土遺物は少なく細片が多い。中央よりやや南東側に集中箇所がみられる。覆土中より出土した遺物は総点数で 13 点である。そのうち須恵器 1 点、土師器 2 点を図示した。2 はロクロ成形の土師器坏、3 は薄手の土師器甕で武藏型である。【所見】本遺構は、その形態や極めて少ない出土遺物から判断すれば、奈良・平安時代、およそ 9 世紀前半と判断される。



第35図 SI5 カマド・SI5 出土遺物

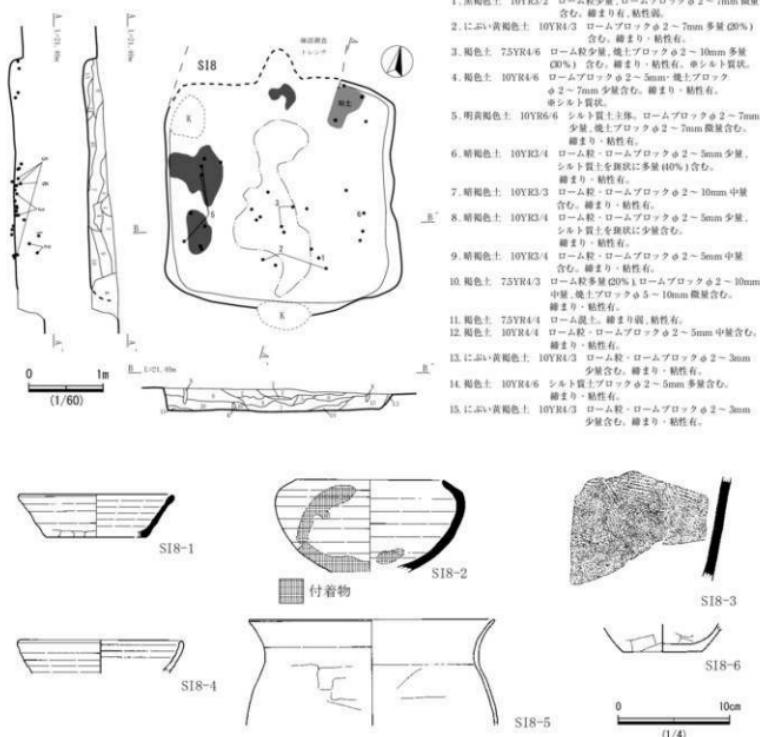
第13表 SI5 出土遺物観察表

遺物番号	出土地番号	種類・形態	口径・器高・底径	部位・残存率・製作技術・その他の特徴	粘土	色調(外表面/内面)	機成	備考
SI5	1	須恵器坏	(11.0) (3.6)	口縁～全体断片、ロクロ成形。	白色粘土、石英、石閃。	10YR6.2/2(黄褐色) 10YR6.2/2(灰褐色)	複元	
	2	土師器坏	(1.7)	口縁部分、ロクロ成形。	白色粘土、石英、赤褐色粘土。	10YR4.1(褐灰) 10YR4.1(灰灰)	普通	
	3	土師器甕	(4.4)	胴部断片、外面斜面～ラケズリ、内面斜面～ラナダ、薄手。	白色粘土、石英、黄褐色粘土。	51B6.4(B) 51B6.4(B)	良好	

SI8 (第36図、第14表、図版14・15・25)

【位置】B-C-3 グリッドに位置する。SI10 を壊し、緩やかな斜面地の北側遺物包含層を掘り込んで構築されている。本遺構は SI10 と同じ地点で建物を拡張し、建て替えたと判断される。また、一部に搅乱が入り失われている。【形態・規模】平面形状はやや正方形を呈する。規模は、南北軸で 3.03 m、東西軸で 3.07 m、主軸方向は N -15° -W を測る。【覆土】黒褐色土、暗褐色土、にぶい

黄褐色土、褐色土などの15層に分層され、層が乱れていることやローム質土が多く含まれていることから人為堆積を呈すると考えられる。床面までの深さは35cmを測る。【床面・壁】床面は平坦で中央部が硬化している。周溝は検出されていない。壁は緩やかに立ち上がる。掘り方は確認できなかった。【ピット】ピットは掘り方も含め検出されなかった。【カマド】北壁の中央に位置する。そのほとんどが搅乱により失われており、焼土が僅かに残存する程度で、規模などは把握できなかった。【遺物】平面分布は散在しており、やや南壁寄りに偏重している。床面には少量ではあるが焼土やカマドの構築材の一部とみられる灰褐色粘土が北東隅に認められる。覆土中より出土した遺物は総点数で79点である。今回の調査で該期の遺構では比較的遺存度の良好な遺物が出土している。そのうち土器3点、須恵器3点を図示した。2は鉄鉢模倣の須恵器で比較的小型、3はいわゆるバケツ形の須恵器甕で胎土に雲母が顕著であり新治窯産とみられる。5の土器甕は薄手で頸部がコの字状気味となる武藏型甕である。【所見】本遺構は、遺構形態や出土遺物から奈良・平安時代、8世紀末から9世紀初頭と判断される。



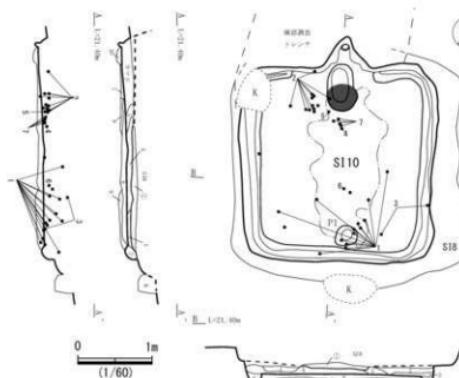
第36図 SI8・SI8-1出土遺物

第14表 S18出土遺物観察表

遺構番号	図面番号	種類	目録登録高さ(底辺)	部位・残存率・製作技法・その他の特徴	土	色調(外面/内面)	焼成	備考
S18	1	瓦芯器 片	(13.8) 3.9 (9.0)	口縁～底断片。ロクロ成形。底部下端手持ち～ハラケズリ。底面に 凹凸～タケズリ。	白色粘土、6黄、黑色漆 出物	S18/1灰 S18/1灰	普通	
	2	瓦芯器 鉢	13.0 (9.2)	口縁～底断90%存。ロクロ成形。内外面の一部にタル状物質付 着。漆。	石英、長石、黑色漆出 物	2.S18/1黄灰 2.S18/1黄灰	普通	
	3	瓦芯器 鉢	— (9.2)	脚部片。外面部横位の平行タタキ。横位のナダ、指擦痕。	石英、漂母	2.S18/2黄灰黄 2.S18/3黄灰	普通	
	4	土師器 鉢	(14.4) (3.0) —	口縁部片。ロクロ成形。	石英、長石、赤褐色粒	10YR6.4赤～黄褐 10YR6.4赤～黄褐	普通	
	5	土師器 盤	(21.8) (9.5)	口縁～脚部片。口縁部タコナギ。外面部横位～ハラケズリ。内面部横位 ナダ。薄手。	石英、角閃石、赤褐色 粒	5YR6.6褐 5YR6.6褐	普通	
	6	土師器 盤	— (2.5) (7.0)	脚～底部片。脚部斜位～ハラケズリ。底面一方向へのハラケズリ。内 面部斜面剥離。	石英、角閃石	7.S18/1灰灰 10YR5.3赤～黄褐	普通	

SI10 (第37-38図、第15表、図版15・26)

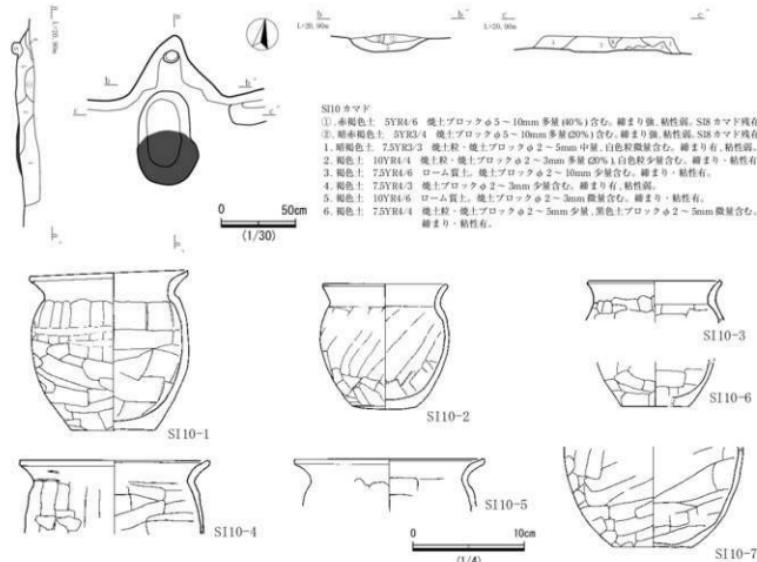
【位置】B-C-3グリッドに位置する。上部をS18に壊されているが、下部は残存していた。そのS18構築以前に同じ地点で、緩やかな斜面地の北側遺物包含層を掘り込んで構築されている。また、一部に擾乱が入り失われている。【形態・規模】残存する掘り込みは浅い。平面形状は方形を呈する。規模は、南北軸で2.59m、東西軸で2.58m、主軸方向はN-15°-Wを測る。【覆土】暗褐色土、褐色土などの6層に分層され、南側の層が大きく乱れていることから、S18の掘り方が床面近くまで達していた可能性が高い。床面までの深さは残存値で10cm、上部のS18を含めると30cmを測る。【床面・壁】床面は平坦で中央部が硬化している。周溝はカマド部分を除き全周している。壁は緩やかに立ち上がる。床は最大10cmの貼り床が認められ、掘り方はやや起伏をもつ。【ピット】ピット1基が南壁際中央の床面より検出されている。P1は最大径32cm・深さ21cmを測る。覆土はロームブロックが少量混じる黒褐色土の単層で、カマドとの位置より出入り口に関するピットと判断される。【カマド】北壁の中央に位置する。袖や火床面は残されておらず、ほぼ掘り方が露呈している状態であった。後



第37図 SI10

- SI10
①. 黒色土 10YR4/4 ロームブロックφ 10～20mm 粒に
含む。繊まり強。粘性有。
半S28粘土硬化部分。
1. 基礎土 10YR3-3 ロームブロックφ 5～10mm 中量
含む。繊まり有。漆面。
 2. に赤い黄褐色土 10YR4-3 ロームブロックφ 5～
20mm 粒に含む。繊まり強。粘性有。
 3. に赤い黄褐色土 10YR4-7 ロームブロック
φ 10～30mm 粒に含む。
 4. 黑色土 10YR4-4 ロームブロックφ 5～20mm
多量(20%) 黑褐色土ブロック。
 5. 黑色土 7SYR4/4 ロームブロックφ 5～15mm
多量(20%) 黑褐色土ブロック。
繊まり、粘性有。
 6. 基礎土 10YR3-3 ロームブロックφ 2～5mm 中量
含む。繊まり弱。粘性有。漆面。
 7. 黑色土 7SYR4/4 壁土ブロックφ 2～10mm
多量(20%) 黑褐色土ブロック
φ 5～10mm 少量含む。繊まり、粘性有。
 8. に赤い黄褐色土 10YR4-7 ロームブロック
φ 10～20mm 粒に含む。繊まり、粘性有。漆面。
 9. 黑色土 10YR4-4 ロームブロックφ 3～5mm
繊まり、粘性有。
 10. 黑色土 10YR4-6 ローム質。壁土ブロック
φ 2～3mm 間隔含む。繊まり、粘性有。

にSI8が建て替えを行った際、カマドはそのまま再利用したと考えられる。全長は101cm、壁から煙道は40cmである。被然痕が掘り方にも認められ、良く使用されていたものと推測される。【遺物】SI8同様、該期の遺構では比較的の遺存度の良好な遺物が出土している。出土位置はカマド周辺と出入り口ピット付近に纏まりをみせる。覆土中より出土した遺物は総点数で28点である。出土遺物のうち土師器7点を図示した。いずれも小型の甕で占められ、1・3の甕はSI8出土のものと接合することから、SI8の掘り方に含まれた遺物の可能性がある。【所見】本遺構は、遺構の形態や出土遺物、重複するSI8との新旧関係からおよそ8世紀後葉と判断されるが、出土遺物からはSI8とはさほど時期差を伴わないことが窺える。



第38図 SI10 カマド・SI10 出土遺物

第15表 SI10 出土遺物観察表

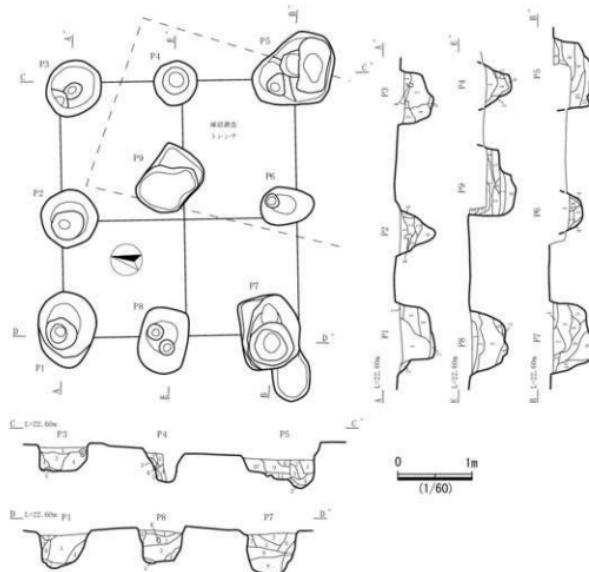
遺物 番号	出雲 番号	種類 器種	径高 高径比	部品・複合率・製作技術・その他特徴	土質	色調 (外観/内面)	焼成	備考
SI10	1	土師甕 小型甕	14.0 14.2 7.5	口縁～底部90%存、口縁部コナデ、胴部外表面に半偏緻・下平櫛・斜縫～ハカリズミ、内面偏緻～ハナダ、底面ナダ。	白色粘、石英、漂母、赤褐色粘	7. SYR4/3に、白・黒 7. SYR5/4開発	普通	
	2	土師甕 小型甕	11.0 11.3 5.6	口縁～底部80%存、口縁部コナデ、胴部外表面偏緻～斜縫～ハカリズミ、内面偏緻～ハナダ、底面ナダ、外面保付着。	白色粘、石英、漂母、赤褐色粘	10YR5/2灰黄褐 7. SYR5/2灰褐	普通	
	3	土師甕 甕	(11.0) —	口縁～胴部片、口縁部コナデ、胴部外表面偏緻～ハカリズミ、内面偏緻～ハナダ、内面器剥離。	白色粘、石英、漂母	SYR6/6灰 SYR1/4灰灰	普通	
	4	土師甕 甕	(16.0) (6.6)	口縁～胴部片、口縁部コナデ、胴部外表面偏緻～ハカリズミ、内面偏緻～ハナダ、外面保付着。	白色粘、石英、漂母 SYR5/4明赤褐	SYR4/2灰褐 SYR5/4明赤褐	普通 5-7と同一個体。	
	5	土師甕 甕	(16.0) (4.7) —	口縁～胴部片、口縁部コナデ、胴部外表面偏緻～ハカリズミ、内面偏緻～ハナダ、外面保付着。	白色粘、石英、漂母、赤褐色粘	SYR5/6明赤褐 SYR5/5C灰5-6灰褐	普通 4-7と同一個体。	
	6	土師甕 小型甕	(4.0) (6.0)	胴～底部、胴部外表面偏緻～ハカリズミ、内面偏緻～ハナダ、底面ナダ、外面保付着。	石英、赤褐色粘	SYR6/4C灰5-6 10YR7/4C灰5-6灰褐	普通	
	7	土師甕 甕	— (9.0) (7.0)	胴～底部、胴部外表面偏緻～斜縫～ハカリズミ、内面偏緻～ハナダ、底面～ハカリズミ、薄手、外面保付着。	白色粘、石英、漂母、赤褐色粘	SYR5/4C灰5-6 2. SYR5/6明赤褐	普通 4-5と同一個体。	

(2) 挖立柱建物跡

SB1 (第39-40図、第16表、図版16-26)

【位置】 G-H-2 グリッドに位置する。【形態・規模】 柱穴が9基 (P1～9) 検出され、東西方向で二間、南北方向で二間の総柱の掘立柱建物跡である。主軸方向は N-14°-W を示す。規模は東西 4.15 m、南北 3.50 m を測り、東西方向に長い長方形を呈する。柱穴間の距離は、東西方向で P1・2 間は 1.45 m、P2・3 間は 1.83 m、P8・9 間は 2.10 m、P9・4 間は 1.52 m、P7・6 間は 1.95 m、P6・5 間は 1.90 m を測る。南北方向で P1・8 間は 1.48 m、P8・7 間は 1.45 m、P2・9 間は 1.30 m、P9・6 間は 1.45 m、P3・4 間は 1.45 m、P4・5 間は 1.90 m を測る。P1 は残存値で最大径 102 cm、深さ 43 cm、P2 は最大径 79 cm、深さ 45 cm、P3 は最大径 78 cm、深さ 45 cm、P4 は最大径 58 cm、深さ 46 cm、P5 は最大径 122 cm、深さ 48 cm、P6 は最大径 81 cm、深さ 24 cm、P7 は最大径 98 cm、深さ 56 cm、P8 は最大径 90 cm、深さ 44 cm、P9 は最大径 92 cm、深さ 57 cm である。【覆土】 黒褐色土、暗褐色土、にぶい黄褐色土、明黄褐色土、褐色土で構成され、明瞭な柱痕や版築は確認されなかったが、P1・7 のように底面で僅かに柱の厚痕が残る柱穴もある。

【遺物】 出土遺物はごく僅かで、国示した P1 より出土した土師器壺の底部片と P2 より出土した土師器壺の細片の 2 点に留まる。国示した 1 は土師器壺でロクロ成形後体部下端を手持ちヘラケズリ調整し、器形は内湾気味に立ち上がる。【所見】 僅かな出土遺物からの判断ではあるが、周囲の奈良・平安時代の遺構とも考慮し、およそ 8 世紀末から 9 世紀初頭と判断される。



第39図 SB1

SB1-P1	1. 黒褐色土。10YR4/2 ローム粒微量。ロームブロックφ2~5mm 少量含む。 縦まり有、粘性弱。	11. 暗褐色土。10YR3/3 ローム粒多量(20%)。ロームブロックφ5~15mm 中量含む。 縦まり・粘性弱。	
	2. にぶい黄褐色土。10YR4/3 ローム粒微量含む。縦まり有、粘性弱。	SB1-P6	1. にぶい黄褐色土。10YR4/3 ローム粒中量。ロームブロックφ2~3mm 少量含む。 縦まり有、粘性弱。
	3. 黄褐色土。10YR4/4 ローム粒微量含む。縦まり有、粘性弱。	2. 暗褐色土。10YR3/3 ローム粒・ロームブロックφ2~3mm 少量含む。 縦まり有、粘性弱。	
	4. 黄褐色土。10YR2/3 ロームブロックφ2~3mm 少量含む。縦まり有、粘性弱。	3. 暗褐色土。10YR3/4 ローム粒・ロームブロックφ2~3mm 中量含む。縦まり有、粘性弱。	
	5. 黄褐色土。10YR4/6 ローム質。縦まり・粘性有。	4. 細褐色土。10YR4/4 ロームブロックφ2~7mm 多量(30%)含む。 縦まり有、粘性弱。	
	6. 茶色土。10YR4/4 ロームブロックφ2~5mm 多量(20%)含む。縦まり有、粘性弱。	SB1-P7	1. 細褐色土。10YR4/4 ローム粒・ロームブロックφ2~5mm 少量含む。 縦まり有、粘性弱。
	7. にぶい黄褐色土。10YR4/3 ローム粒微量含む。縦まり有、粘性弱。	2. 暗褐色土。10YR3/3 ロームブロックφ2~3mm 中量含む。縦まり有、粘性弱。	
SB1-P2	1. 黄褐色土。10YR3/3 ローム粒少量含む。縦まり有、粘性弱。	3. 黑褐色土。10YR3/3 ローム粒・ロームブロックφ2~3mm 少量含む。 縦まり有、粘性弱。	
	2. 黑褐色土。10YR2/2 ローム粒微量含む。縦まり有、粘性弱。	4. 黑褐色土。10YR3/3 ローム粒・ロームブロックφ2~3mm 中量含む。縦まり有、粘性弱。	
	3. 黑褐色土。10YR2/1 ローム粒・ロームブロックφ2~3mm 少量含む。 縦まり有、粘性弱。	5. 黄褐色土。10YR3/3 ローム粒・ロームブロックφ2~3mm 中量含む。縦まり有、粘性弱。	
	4. にぶい黄褐色土。10YR4/3 ローム粒微量含む。縦まり有、粘性弱。	6. 黄褐色土。10YR3/4 ローム粒・ロームブロックφ2~10mm 中量含む。 縦まり有、粘性弱。	
	5. 黄褐色土。10YR4/4 ローム粒微量含む。縦まり有、粘性弱。	7. 黄褐色土。10YR3/4 ローム粒・ロームブロックφ2~5mm 多量含む。 縦まり有、粘性弱。	
	6. 黑褐色土。10YR2/4 ローム粒・ロームブロックφ2~10mm 少量含む。 縦まり有、粘性弱。	8. にぶい黄褐色土。10YR4/3 ローム粒・ロームブロックφ2~10mm 多量(30%)含む。 縦まり有、粘性弱。	
	7. 黑褐色土。10YR2/3 ロームブロックφ2~5mm 中量含む。縦まり有、粘性弱。	9. 黑褐色土。10YR3/3 ロームブロックφ2~3mm 中量含む。縦まり有、粘性弱。	
	8. にぶい黄褐色土。10YR4/3 ローム粒・ロームブロックφ2~5mm 中量含む。縦まり有、粘性弱。	10. にぶい黄褐色土。10YR4/3 ローム粒・ロームブロックφ2~10mm 多量(40%)含む。 縦まり有、粘性弱。	
SB1-P3	1. 黄褐色土。10YR3/4 ローム粒少量。ロームブロックφ2~5mm 微量含む。 縦まり有、粘性弱。	SB1-P8	1. 黄褐色土。10YR3/4 ローム粒中量。縦まり有、粘性弱。
	2. 黑褐色土。10YR2/4 ローム粒少量。ロームブロックφ2~5mm 微量含む。 縦まり有、粘性弱。	2. 黄褐色土。10YR3/3 ローム粒・ロームブロックφ2~3mm 少量含む。 縦まり有、粘性弱。	
	3. にぶい黄褐色土。10YR4/3 ローム粒・ロームブロックφ2~5mm 中量含む。縦まり有、粘性弱。	3. 黑褐色土。10YR3/2 ロームブロックφ2~10mm 少量含む。縦まり有、粘性弱。	
	4. 黄褐色土。10YR2/3 ローム粒多量(20%)含む。縦まり有、粘性弱。	5. 黑褐色土。10YR4/6 ロームブロックφ2~5mm 少量含む。縦まり有、粘性弱。	
	5. にぶい黄褐色土。10YR4/3 ローム粒・ロームブロックφ2~7mm 多量(20%)含む。 縦まり有、粘性弱。	6. にぶい黄褐色土。10YR4/4 ローム粒・ロームブロックφ2~5mm 少量含む。 縦まり有、粘性弱。	
	6. 黄褐色土。10YR2/4 ローム粒・ロームブロックφ2~10mm 多量(10%)含む。縦まり有、粘性弱。	SB1-P9	1. 明褐色土。10YR4/6 ローム土主導。縦まり強、粘性有。
	7. 黑褐色土。10YR4/4 ローム粒微量。縦まり有、粘性弱。	2. にぶい黄褐色土。10YR4/3 ローム粒・ロームブロックφ2~3mm 多量(20%)含む。縦まり有、粘性弱。	
	8. 黄褐色土。10YR2/3 ローム粒・ロームブロックφ2~5mm 含む。縦まり有、粘性弱。	3. 黄褐色土。10YR3/4 ロームブロックφ2~5mm 少量含む。縦まり有、粘性弱。	
	9. 黄褐色土。10YR3/4 ローム粒・ロームブロックφ2~3mm 少量含む。縦まり有、粘性弱。	4. にぶい黄褐色土。10YR4/3 ロームブロックφ2~5mm 中量含む。縦まり有、粘性弱。	
	10. 茶色土。10YR4/4 ローム粒・ロームブロックφ2~10mm 含む。縦まり有、粘性弱。	5. にぶい黄褐色土。10YR4/3 ロームブロックφ2~5mm 多量(30%)含む。縦まり有、粘性弱。	



0 10cm
(1/4)

第40図 SB1出土遺物

第16表 SB1出土遺物観察表

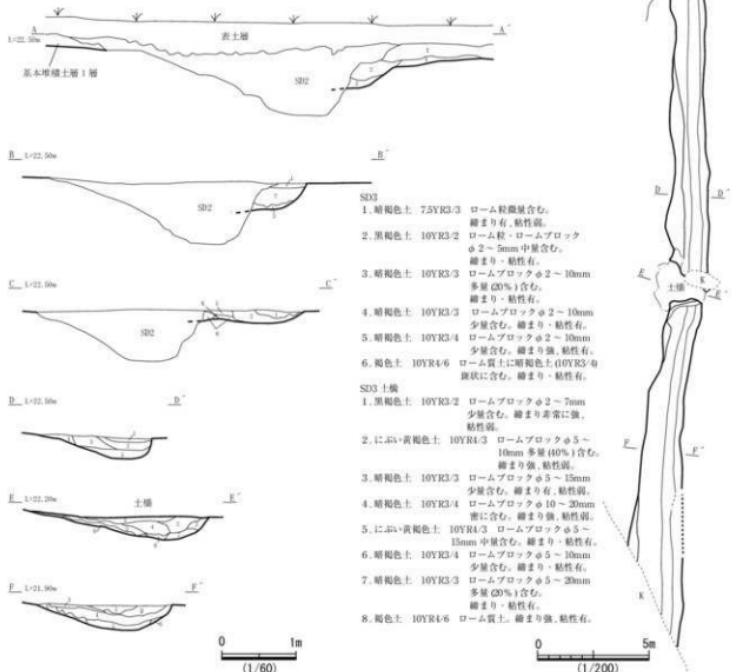
遺物番号	固有番号	種類 形態	直径 横幅 厚さ	部位・推存率・製作技術・その他の特徴	土質	色調 (外観/内面)	焼成	備考
SB1	1	土器部 外	(2.8) (8.8)	体～底部部。クロコ形成。体部下端手持ちハラケズリ。	白色土。右葉、左葉 白	T. SYET/1にぶい様 化	T. SYET/1焼成	良好

(3) 構造構造

SD3 (第41図、図版17-18)

【位置】F-1グリッドからG-5グリッドへ、およそ東西方向へと走行し、西側は調査区外へ延びている。東側は擾乱により一部失われているが、こちらも調査区外へ延びている。F-1・2グリッドではSD2と重複し、南側が壊されている。【形態・規模】確認範囲で長さは46m、幅は1.2~2.6m、確認面からの深さは30cm前後を測り、断面形状は緩やかに開くU字状を呈する。走行方向はN-76°Wを示し、西側から東側へと緩やかに下っている。G-4グリッドには、一部擾乱により壊されていたが、

幅は70cmで側面も突き固められ、よく硬化した土橋が架けられていた。【覆土】黒褐色土、暗褐色土、褐色土の6層に分層された自然堆積である。土橋部分は黒褐色土、暗褐色土、にぶい黄褐色土、褐色土が堆積し、表面から側面まで突き固められて硬化していた。よく利用され踏み固められた上面の硬化が顕著である。【遺物】覆土中より出土した遺物は総点数で41点である。出土遺物は細片がほとんどで図示できる遺物はなかった。縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器が混在して出土しているが、縄文土器を除いては奈良・平安時代の遺物が最も多い。【所見】規模、形状、覆土、出土遺物などから、奈良・平安時代の溝と判断され、周囲の遺構を鑑みれば、本遺構も8世紀末から9世紀初頭を中心とした時期の可能性もあるが判然としない。性格としては、北・東・西が谷となる半島状の舌状台地を横断し、更に断面形状が北側の立ち上がりが急で南側が緩やかであることから、平坦地から北側の斜面地を区画するための溝であったと考えられる。



第41図 SD3

第6節 中・近世

(1) 溝状遺構

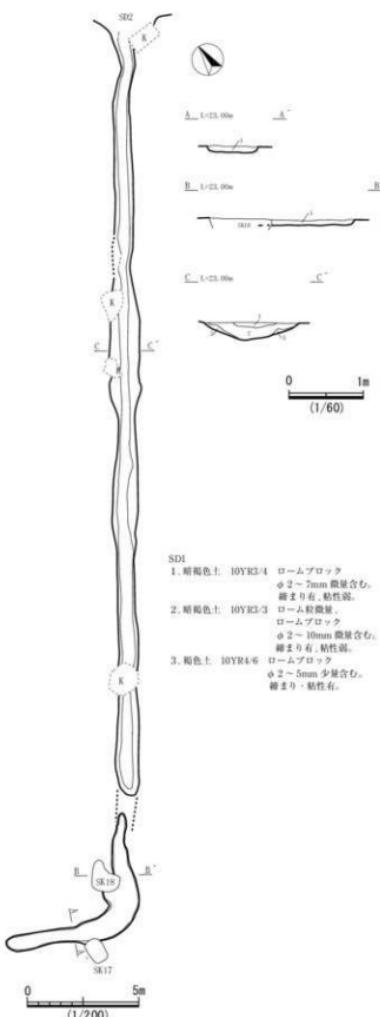
SD1 (第42図、図版17)

【位置】K-1グリッドからH-3グリッドに位置する。南側では北西から南東へ延び、ほぼ90°に折れた後、北東方向へ向ってSD2へと合流する。SK17・18や搅乱により一部壊されている。**【形態・規模】**長さは南側が5.5m、北東側が39.5mを測る。幅は0.6~1.4m、確認面からの深さは20cm前後で断面形状は緩やかに開くU字状、または皿状を呈する。走行方向は南側でN-25°-W、北東側でN-36°-Eを示し、南西側から北東側へと緩やかに下って、SD2に接続する。**【覆土】**暗褐色土、褐色土を主体とした自然堆積である。**【遺物】**覆土中より出土した遺物は総点数で5点である。ほとんどが細片で土師器、須恵器が出土しているが、図示できる遺物はなかった。**【所見】**覆土の状態が中・近世とした土坑と類似し、走行方向もほぼ一致していることから、中・近世の区画溝と考えられる。

SD2 (第43図、図版17・18)

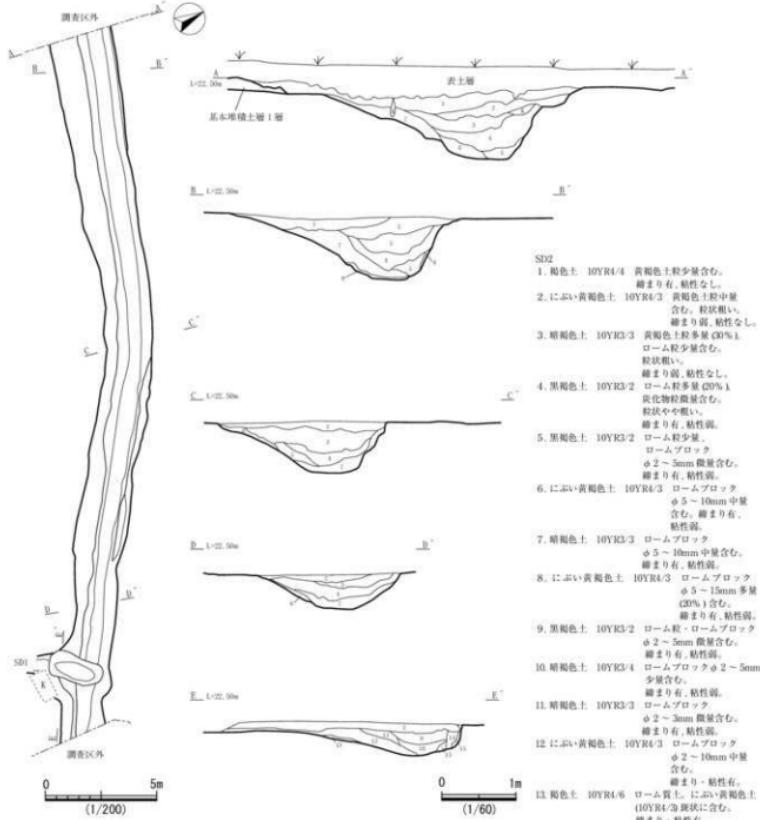
【位置】F-1グリッドからG-4グリッドへ、やや湾曲しながら東西方向へ走行し、両端は調査区外へと延びる。F-1・2グリッドでは、SD3の南側を壊している。また、G-4グリッド地点でSD1と合流する。**【形態・規模】**確認範囲で長さ31m、幅1.8~2.9m、確認面からの深さ45~95cmで断面形状は逆台形状を呈する。走行方向はN-76°-Wを示し、G-2グリッド地点で16°南へ折れる。西側から東側へと緩やかに下っている。

【覆土】黒褐色土、暗褐色土、にぶい黄褐色土、褐色土の15層に分層された自然堆積である。覆土上層から中層にかけ粒子が粗い。**【遺物】**覆土中より出土した遺物は総点数で23点で



第42図 SD1

ある。出土遺物は細片がほとんどで、縄文土器、土師器、石製品が混在して出土しているが、図示できる遺物はなかった。【所見】覆土の状態が中・近世とした土坑と類似し、走行方向もほぼ一致していることから、中・近世の所産と判断した。北・東・西が谷となる半島状の舌状台地を横断し、更に断面形状は北側の立ち上がりが急で南側が緩やかであることから、平坦地から北側の斜面地を区画するための溝であったと考えられる。更に SD1 との合流地点には、土坑状の掘り込みがあり、SD1・2 は関連して利用された可能性がある。



第43図 SD2

(2) 土坑

SK4 (第 44 図、図版 18)

【位置】 D-1 グリッドに位置する。【規模と形状】 平面は楕円形を呈する。規模は、長軸 1.38 m、短軸 0.89 m、深さ 0.20m、主軸方向は N -47° -E を測る。断面は浅い皿状で、底面は一段掘り込まれる。【覆土】 締まりの弱い暗褐色土の単層である。【遺物】 出土していない。【所見】 覆土の状態から中・近世の遺構と判断される。

SK5 (第 44 図、図版 18)

【位置】 D-1 グリッドに位置する。【規模と形状】 平面は楕円形を呈する。規模は、長軸 0.64 m、短軸 0.52 m、深さ 0.27m、主軸方向は N -35° -E を測る。断面は鍋底状で、底面には径 20cm の浅い小ピットがみられる。【覆土】 ローム土の混じる暗褐色土の単層である。【遺物】 出土していない。【所見】 覆土の状態から中・近世の遺構と判断される。

SK6 (第 44 図)

【位置】 D-2 グリッドに位置する。【規模と形状】 平面は長楕円形を呈する。規模は、長軸 1.26 m、短軸 0.77 m、深さ 0.27m を測る。主軸方向は N -46° -W である。底面には長軸の両端に一段の掘り込みがみられる。【覆土】 ロームブロックを少量含む暗褐色土の単層である。【遺物】 出土していない。【所見】 覆土の状態から中・近世の遺構と判断される。

SK7 (第 44 図、図版 19)

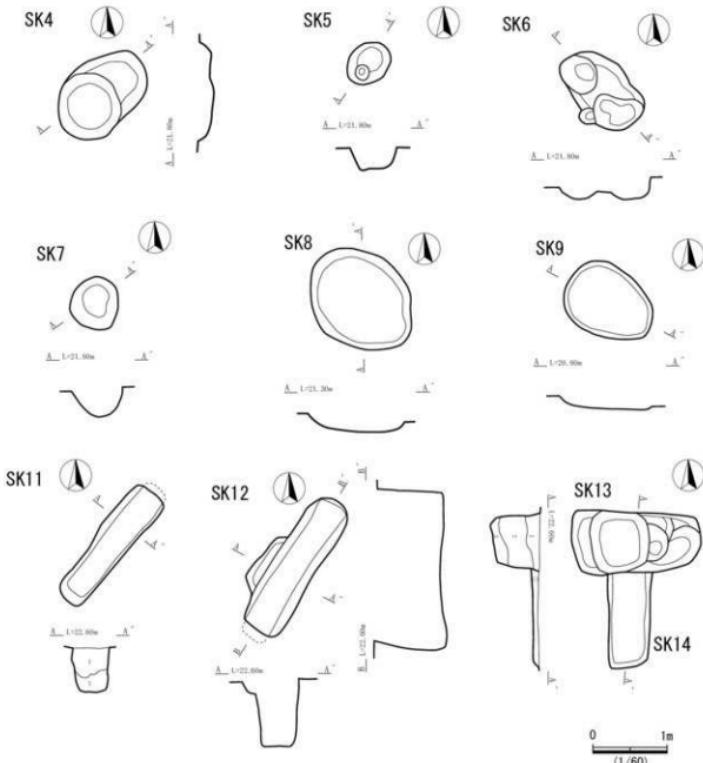
【位置】 D-1 グリッドに位置する。【規模と形状】 平面は円形を呈する。規模は、長軸 0.70 m、短軸 0.67 m、深さ 0.37m、主軸方向は N -50° -E を測る。断面は丸みをおびた鍋底状である。【覆土】 ロームブロックを多量含む暗褐色土の単層である。【遺物】 出土していない。【所見】 覆土の状態から中・近世の遺構と判断される。

SK8 (第 44 図、図版 19)

【位置】 C-2 グリッドに位置する。【規模と形状】 平面が楕円形を呈する。規模は、長軸 1.58 m、短軸 1.28 m、深さ 0.17m、主軸方向は N -48° -W を測る。断面は皿状である。【覆土】 暗褐色土の単層でローム土を含んだ人為堆積である。【遺物】 出土していない。【所見】 覆土の状態から中・近世の遺構と判断される。

SK9 (第 44 図、図版 19)

【位置】 C-1・2 グリッドに位置する。【規模と形状】 平面は楕円形を呈する。規模は、長軸 1.27 m、短軸 0.94 m、深さ 0.12m、主軸方向は N -62° -W を測る。断面は皿状で、底面は平坦である。【覆土】 ロームブロックを中量含む暗褐色土の単層である。【遺物】 出土していない。【所見】 覆土の状態から中・近世の遺構と判断される。



- SK11
 1. 灰黄褐色土 10YR4/2 ロームブロック約5~30mm 多量に含む。縮まり有、粘性弱。
 SK12
 2. 褐色土 10YR4/4 ロームブロック約2~10mm 多量(40%)含む。縮まり・粘性有。
 SK13
 3. 黑褐色土 10YR3/2 ロームブロック約2~7mm 少量含む。縮まり・粘性有。
 SK14
 ①. 削面色土 10YR3/3 ロームブロック約2~7mm 中量含む。縮まり有、粘性弱。

第44図 SK4・5・6・7・8・9・11・12・13・14

SK11 (第44図、図版19)

【位置】J-1 グリッドに位置する。【規模と形状】平面は隅丸長方形を呈する。規模は、長軸 1.87 m、短軸 0.50 m、深さ 0.59m、主軸方向は N-38°-E を測る。断面は深い箱形状、底面は平坦でやや起伏をもつ。【覆土】灰黄褐色土と褐色土の2層に分層され、全体にロームブロックを多量に含む人為堆積である。【遺物】出土していない。【所見】覆土の状態から中・近世とみられ、底面に小ピットなどはみられないが害獣駆除を目的とした陥穴である可能性も想定される。

SK12 (第44図、図版19)

【位置】J-1 グリッドに位置する。【形態・規模】平面は隅丸長方形を呈する。規模は、長軸 2.05 m、短軸 0.58 m、深さ 0.89m、主軸方向は N -38° -E を測る。断面は深い箱形状、底面は平坦でやや起伏をもつ。また、西側上部にテラス状の段を有す。【覆土】灰黄褐色土を主体とした単層で SK11 の1層に類似する。【遺物】出土していない。【所見】覆土の状態から中・近世とみられ、底面に小ピットなどはみられないが害獣駆除を目的とした陥し穴である可能性も想定される。

SK13 (第44図、図版19)

【位置】J-1 グリッドに位置する。SK14 を壊している。【形態・規模】平面は隅丸長方形を呈する。規模は、長軸 1.75 m、短軸 0.83 m、深さ 0.66m、主軸方向は N -88° -E を測る。断面は鍋底状で、底面は起伏をもち、複数の掘り込みがみられる。【覆土】明黄褐色土、黒褐色土、黄褐色土の3層に分層され、ローム土、ロームブロック主体の層が上下にあることから人為堆積と考えられる。【遺物】繩文土器と土師器の細片が僅かに2点出土しているが混入したものとみられる。【所見】覆土の状態から中・近世の遺構と判断される。

SK14 (第44図、図版19)

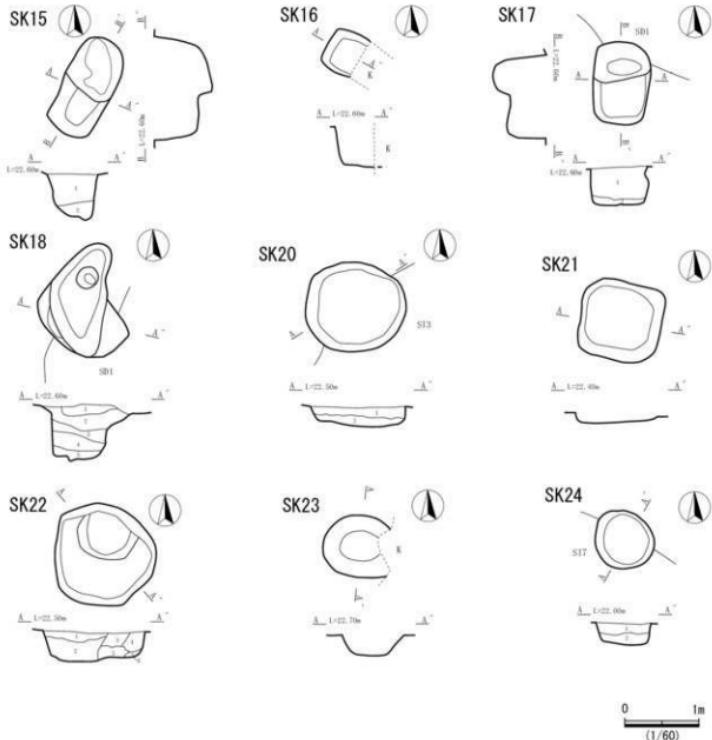
【位置】J-1 グリッドに位置する。SK13 に壊される。【形態・規模】平面は隅丸長方形を呈する。規模は、残存値で長軸 1.31 m、短軸 0.56 m、深さ 0.10m、主軸方向はほぼ N -0° である。断面は皿状で、底面は平坦である。【覆土】ロームブロックを中量含んだ人為堆積で暗褐色土の単層である。【遺物】出土していない。【所見】覆土の状態から中・近世の遺構と判断される。

SK15 (第45図、図版19)

【位置】K-1 グリッドに位置する。【形態・規模】平面は隅丸長方形を呈する。規模は、長軸 1.38 m、短軸 0.66 m、深さ 0.63m、主軸方向は N -28° -E を測る。断面は鍋底状で、底面は起伏をもち、一段深く掘り込まれる。【覆土】灰黄褐色土、暗褐色土の2層に分層され、ロームブロックを多く含んだ人為堆積である。【遺物】出土していない。【所見】覆土の状態から中・近世の遺構と判断される。

SK16 (第45図)

【位置】J-K-2 グリッドに位置する。東側は搅乱により失われている。【形態・規模】平面は隅丸長方形あるいは隅丸方形を呈する。規模は、残存値で長軸 0.53 m、短軸 0.47 m、深さ 0.53m、主軸方向は N -60° -W を測る。断面は鍋底状を呈し、底面は平坦である。【覆土】暗褐色土の単層でロームブロックを多量含んだ人為堆積である。【遺物】出土していない。【所見】覆土の状態から中・近世の遺構と判断される。



0
1m
(1/60)

SK15

1. 黄褐色土 10YR4/2 ローム上・ロームブロックφ 10~40mm 番に含む。締まり有、粘性弱。
2. 棕褐色土 10YR3/3 ロームブロックφ 5~10mm 多量含む。締まり・粘性弱。

3. 黄褐色土 10YR4/2 ローム上・ロームブロックφ 5~20mm 番に含む。締まり・粘性有。
4. 棕褐色土 10YR3/3 ローム上・ロームブロックφ 2~10mm 中量含む。締まり有、粘性弱。

5. 棕褐色土 10YR4/4 ローム上・ロームブロックφ 主体。締まり・粘性有。

SK16

1. 棕褐色土 10YR4/4 ローム質土。締まり・粘性有。
2. 黄褐色土 10YR4/2 ローム上・ロームブロックφ 10~30mm 多量含む。締まり有、粘性弱。
3. 黑褐色土 10YR3/2 ロームブロックφ 5~10mm 少量。褐色土質状に多量(40%) 含む。締まり有、粘性弱。
4. 黄褐色土 10YR4/2 ロームブロックφ 2~10mm 中量含む。締まり有、粘性弱。
5. 棕褐色土 10YR3/3 ローム少量含む。締まり・粘性有。
6. 棕褐色土 10YR3/3 ローム微量含む。締まり・粘性有。

SK22

1. 黄褐色土 10YR4/2 ローム上混土。締まり有、粘性弱。
2. 棕褐色土 10YR4/4 ローム粒・ロームブロックφ 2~10mm 少量含む。締まり有、粘性弱。

SK23

1. 棕褐色土 10YR4/4 ローム質土。締まり・粘性有。
2. 黄褐色土 10YR4/2 ロームブロックφ 2~10mm 少量含む。締まり有、粘性弱。
3. 黑褐色土 10YR3/2 ロームブロックφ 10~30mm 少量含む。締まり有、粘性弱。
4. 黄褐色土 10YR4/2 ロームブロックφ 2~10mm 中量含む。締まり有、粘性弱。
5. 棕褐色土 10YR3/3 ローム少量含む。締まり・粘性有。
6. 棕褐色土 10YR3/3 ローム微量含む。締まり・粘性有。

SK24

1. 棕褐色土 10YR4/4 ロームブロックφ 主体。棕褐色土少量混入。締まり・粘性有。
2. 棕褐色土 10YR4/4 ロームブロックφ 5~10mm 多量含む。棕褐色土中量含む。締まり弱、粘性有。

第45図 SK15-16-17-18-20-21-22-23-24

SK17（第45図）

【位置】K-1 グリッドに位置する。SD1 を壊している。【形態・規模】平面は隅丸長方形を呈する。規模は、長軸 1.12 m、短軸 0.77 m、深さ 0.48m、主軸方向はほぼ N -0°である。断面は鍋底状を呈し、底面は一段掘り込まれる。【覆土】灰黄褐色土、暗褐色土の 2 層に分層され、ロームブロックを多く含んだ人為堆積である。【遺物】出土していない。【所見】覆土の状態から中・近世の遺構と判断される。

SK18（第45図）

【位置】J-K-1 グリッドに位置する。SD1 を壊している。【規模と形状】平・断面とともに不整形である。規模は、長軸 1.50 m、短軸 1.32 m、深さ 0.73m、主軸方向は N -15° - E を測る。底面は起伏をもち、テラスと浅い小ピットがみられる。【覆土】黄褐色土、灰黄褐色土、黒褐色土、褐色土の 5 層に分層され、ロームブロックを多く含んだ人為堆積である。【遺物】出土していない。【所見】覆土の状態から中・近世の遺構と判断される。

SK20（第45図）

【位置】I-3 グリッドに位置する。SI3 を壊している。【規模と形状】平面は梢円形を呈する。規模は、長軸 1.35 m、短軸 1.22 m、深さ 0.27m、主軸方向は N -82° - W を測る。断面は浅い鍋底状を呈し、底面はほぼ平坦である。【覆土】灰黄褐色土、褐色土の 2 層に分層され、ローム土が混在する人為堆積である。【遺物】出土していない。【所見】覆土の状態から中・近世の遺構と判断される。

SK21（第45図）

【位置】J-3-4 グリッドに位置する。【形態・規模】平面は隅丸方形を呈する。規模は、長軸 1.10 m、短軸 1.06 m、深さ 0.14m、主軸方向は N -82° - W を測る。断面は皿状を呈し、底面は平坦である。

【覆土】暗褐色土の単層でロームブロックを少量含む。【遺物】出土していない。【所見】覆土の状態から中・近世の遺構と判断される。

SK22（第45図、図版19）

【位置】I-J-3 グリッドに位置する。【形態・規模】平面はやや歪な円形とみられる。規模は、残存値で長軸 0.84 m、短軸 0.83 m、深さ 0.39m、主軸方向は N -18° - E を測る。断面は鍋底状を呈し、底面はやや起伏をもち、北壁際に一段掘り込まれる。【覆土】黒褐色土、暗褐色土、灰黄褐色土、褐色土の 6 層に分層され、ローム土を均一に含んだ人為堆積とみられる。【遺物】出土していない。【所見】覆土の状態から中・近世の遺構と判断される。

SK23（第45図、図版20）

【位置】J-2 グリッドに位置する。東側が搅乱により失われている。【形態・規模】平面は梢円形を呈する。規模は、残存値で長軸 1.02 m、短軸 0.82 m、深さ 0.28m、主軸方向は N -86° - W を測る。断面は鍋底状を呈し、底面は平坦である。【覆土】暗褐色土の単層でロームブロックを中量含んだ人為堆積である。【遺物】出土していない。【所見】覆土の状態から中・近世の遺構と判断される。

SK24 (第45図、図版20)

【位置】D-3 グリッドに位置する。SI7 を壊している。【形態・規模】平面は楕円形を呈する。規模は、長軸 0.85 m、短軸 0.84 m、深さ 0.28m、主軸方向は N -60° -E を測る。断面は鍋底状を呈し、底面は平坦である。【覆土】褐色土の2層に分層され、ロームブロックを多く含む人為堆積である。

【遺物】出土していない。【所見】覆土の状態から中・近世の遺構と判断される。

SK25 (第46図)

【位置】D-3 グリッドに位置する。SI7 の炉を壊している。【形態・規模】平面は楕円形を呈する。規模は、長軸 0.97 m、短軸 0.74 m、深さ 0.39m、主軸方向は N -16° -E を測る。断面は筒状を呈し、底面は僅かに起伏をもつ。【覆土】にぶい黄褐色土、暗褐色土、黒褐色土、褐色土の4層に分層され、ロームブロックを均一に含んだ人為堆積とみられる。【遺物】出土していない。【所見】覆土の状態から中・近世の遺構と判断される。

SK26 (第46図、図版20)

【位置】E -3 グリッドに位置する。SI7 を壊している。【形態・規模】平面はほぼ円形を呈する。規模は、長軸 0.82 m、短軸 0.75 m、深さ 0.63m、主軸方向は N -6° -E を測る。断面はロート状を呈し、テラスを有す。【覆土】暗褐色土主体のロームブロックを含んだ人為堆積である。【遺物】出土していない。【所見】覆土の状態から中・近世の遺構と判断される。

SK27 (第46図、図版20)

【位置】B-3 グリッドに位置する。【規模と形状】平面が隅丸方形気味の楕円形を呈する。規模は、長軸 0.93 m、短軸 0.75 m、深さ 0.58m、主軸方向は N -45° -W を測る。断面は鍋底状を呈し、丸底である。【覆土】暗褐色土の単層で、ローム粒を多量含んだ人為堆積である。【遺物】出土していない。【所見】覆土の状態から中・近世の遺構と判断される。

SK28 (第46図)

【位置】D-3 グリッドに位置する。【規模と形状】平面が楕円形を呈する。規模は、長軸 1.06 m、短軸 0.95 m、深さ 0.34m、主軸方向は N -57° -E を測る。断面は鍋底状を呈し、底部はやや起伏をもつ。

【覆土】暗褐色土の単層で、ローム粒を多量含んだ人為堆積である。【遺物】出土していない。【所見】覆土の状態から中・近世の遺構と判断される。

SK29 (第46図)

【位置】D-5 グリッドに位置する。【規模と形状】平面が楕円形を呈し、長軸両端に浅い少ビットを伴う。規模は、長軸 2.03 m、短軸 1.39 m、深さ 0.35m、主軸方向は N -3° -W を測る。断面は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。【覆土】褐色土の単層で、暗褐色土が混入した人為堆積である。

【遺物】土師器片3点が出土しているが、いずれも細片で混入したものとみられる。【所見】覆土の状態から中・近世の遺構と判断される。

SK30（第46図、図版20）

【位置】E-3グリッドに位置する。【形態・規模】平面は楕円形を呈する。規模は、長軸1.22m、短軸1.03m、深さ0.33m、主軸方向はN-18°-Wを測る。断面は鍋底状を呈し、底面はほぼ平坦である。【覆土】褐色土を主体とする単層の人为堆積である。【遺物】出土していない。【所見】覆土の状態から中・近世の遺構と判断される。

SK31（第46図、図版20）

【位置】D-4グリッドに位置する。【形態・規模】平面は楕円形を呈する。規模は、長軸1.05m、短軸1.01m、深さ0.46m、主軸方向はN-87°-Wを測る。断面は鍋底状を呈し、底面はほぼ平坦である。【覆土】褐色土を主体とする単層の人为堆積である。【遺物】出土していない。【所見】覆土の状態から中・近世の遺構と判断される。

SK32（第46図、図版20）

【位置】C-3グリッドに位置する。【形態・規模】平面は楕円形を呈する。規模は、長軸0.74m、短軸0.56m、深さ0.35m、主軸方向はN-2°-Wを測る。断面は鍋底状を呈し、底面はほぼ平坦である。【覆土】褐色土を主体とする単層の人为堆積である。【遺物】縄文土器片1点が出土しているが、細片で混入したものとみられる。【所見】覆土の状態から中・近世の遺構と判断される。

SK33（第46図、図版20）

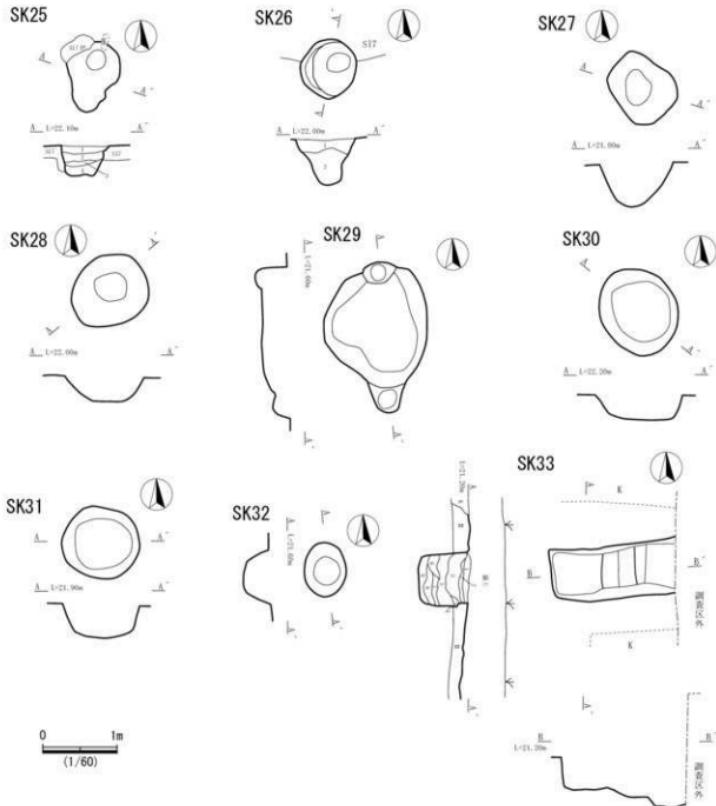
【位置】G-6グリッドに位置する。東側は調査区外となるため全容は不明瞭である。【形態・規模】平面は確認範囲で長方形、底面は3段の階段状となる。規模は、確認範囲で長軸1.68m、短軸0.72m、深さ0.69m、主軸方向はN-85°-Eを測る。【覆土】灰褐色土、灰黄褐色土、明黄褐色土、黒褐色土、にぶい黄褐色土の9層に分層され、ロームブロックが多く含んだ人为堆積である。【遺物】土師器の壊片が2点出土しているが、細片で混入したものとみられる。【所見】覆土の状態から中・近世の遺構と判断される。階段状を呈する出入り口の可能性があり、調査区外に農作業に伴う地下室状の遺構が存在する可能性もある。

SK34（第47図、図版21）

【位置】B-4グリッドに位置する。【規模と形状】平面が隅丸長方形を呈し、階段状のテラスを有す。規模は、長軸1.13m、短軸0.62m、深さ0.73m、主軸方向はN-75°-Eを測る。【覆土】ロームブロックを少量含む灰黄褐色土の単層の人为堆積である。【遺物】出土していない。【所見】覆土の状態から中・近世の遺構と判断される。

SK35（第47図、図版21）

【位置】F-5グリッドに位置する。【規模と形状】平面は楕円形を呈する。規模は、長軸0.83m、短軸0.72m、深さ0.28m、主軸方向はN-89°-Wを測る。断面は鍋底状を呈し、底面は起伏をもつ。【覆土】黒褐色土、暗褐色土、にぶい黄褐色土の3層に分層され、ロームブロックを含む人为堆積である。【遺物】出土していない。【所見】覆土の状態から中・近世の遺構と判断される。



SK25

1. にせい黄褐色土。10YR4/3 ローム段、ロームブロックφ 2~5mm 少量含む。縮まり有、粘性弱。
2. 黄褐色土。10YR4/3 ロームブロックφ 2~5mm 中量、純土を斑状に少量含む。縮まり有、粘性弱。
3. 黑褐色土。10YR4/2 ロームブロックφ 5~10mm、純土を斑状に少量含む。縮まり有、粘性弱。
4. 黑褐色土。7.5YR4/3 ロームブロックφ 5~15mm 中量、純土を斑状に少量含む。縮まり有、粘性弱。単粒状態。

SK26

1. 黄褐色土。7.5YR5-2 ローム段、ロームブロックφ 2~3mm 少量、純土を斑状含む。縮まり、粘性有。
2. 黄褐色土。10YR6/6 ロームブロック主体、灰褐色土G5YR4/2を斑状に含む。縮まり、粘性有。10YR5-5は黄褐色。
3. 黑褐色土。7.5YR4/2 ローム段、ロームブロックφ 5~40mm 中量、炭化物微細含む。縮まり、粘性有。
4. 黑褐色土。7.5YR5-2 ローム段、ロームブロックφ 2~5mm 少量含む。縮まり、粘性有。
5. 黑褐色土。7.5YR4/2 ローム段、ロームブロックφ 2~10mm 中量、同φ 15~30mm 少量含む。縮まり、粘性有。
6. 黑褐色土。10YR4/2 ローム段、ロームブロックφ 2~10mm 中量、黑褐色土G5YR3/2を斑状に含む。縮まり、粘性有。
7. 黑褐色土。10YR4/2 ローム段、ロームブロックφ 2~10mm 中量、黑褐色土G5YR3/2を斑状に含む。縮まり、粘性有。
8. 黑褐色土。10YR4/2 ロームブロックφ 5~10mm 少量含む。縮まり、粘性有。
9. にせい黄褐色土。10YR4/3 ロームブロックφ 5~30mm 多量(20%)含む。縮まり、粘性有。

II 基本断面土解剖層

第46図 SK25・26・27・28・29・30・31・32・33

SK36（第47図、図版21）

【位置】E-5 グリッドに位置する。【規模と形状】平面はやや歪な楕円形を呈する。規模は、長軸 1.61m、短軸 1.33 m、深さ 0.55m、主軸方向は N -59° -E を測る。断面は鍋底状を呈し、底部は起伏をもつ。【覆土】灰黄褐色土、暗褐色土、にぶい黄褐色土、褐色土の4層に分層され、ロームブロックを多く含んだ人為堆積である。【遺物】弥生土器片2点、土製品とみられる破片1点が出土しているが、細片で混入したものとみられる。【所見】覆土の状態から中・近世の遺構と判断される。

SK37（第47図、図版21）

【位置】F-2 グリッドに位置する。SD2 を壊している。【形態・規模】平面は楕円形呈する。規模は、長軸 1.13 m、短軸 0.88 m、深さ 0.43m、主軸方向は N -30° -E を測る。断面は鍋底状を呈し、底面は起伏をもつ。【覆土】灰黄褐色土、暗褐色土、にぶい黄褐色土、褐色土の4層に分層され、ロームブロックを多く含んだ人為堆積である。【遺物】出土していない。【所見】覆土の状態から中・近世の遺構と判断される。

SK38（第47図）

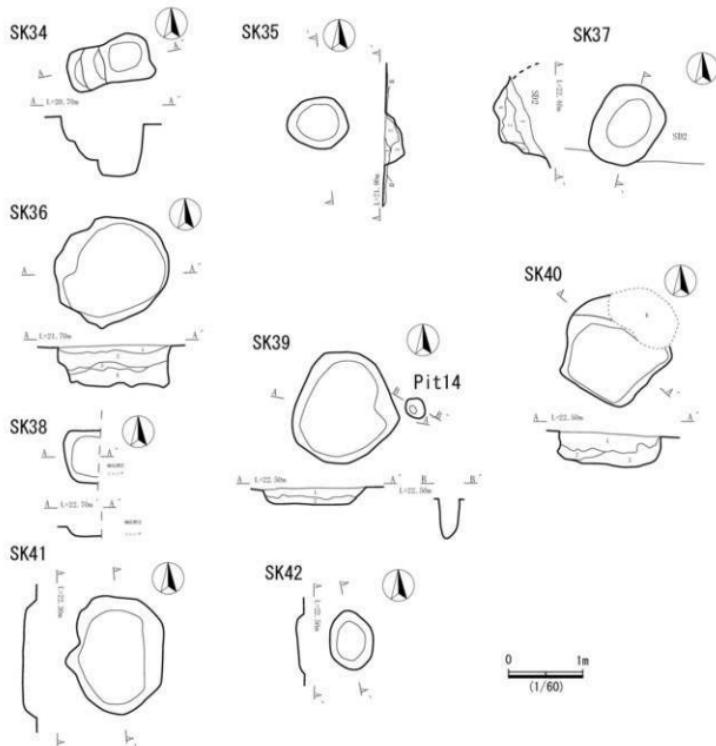
【位置】H-I-2 グリッドに位置する。東側は搅乱により失われている。【形態・規模】平面は隅丸方形を呈するものとみられる。規模は、残存値で長軸 0.72 m、短軸 0.50 m、深さ 0.15m、主軸方向は N -88° -W を測る。断面は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。【覆土】暗褐色土の単層で、ロームブロックを少量含んだ人為堆積である。【遺物】出土していない。【所見】覆土の状態から中・近世の遺構と判断される。

SK39（第47図、図版21）

【位置】I-3 グリッドに位置する。Pit14 が近接する。【形態・規模】平面は楕円形を呈する。規模は、長軸 1.52 m、短軸 1.33 m、深さ 0.22m、主軸方向は N -14° -E を測る。断面は鍋底状を呈し、底面はほぼ平坦である。近接する Pit14 は最大径 29cm・深さ 53cm を測る。【覆土】暗褐色土、にぶい黄褐色土の2層に分層され、ロームブロックを多く含んだ人為堆積である。近接する Pit14 の覆土はローム粒を含む暗褐色土の単層である。【遺物】弥生土器片1点出土しているが、細片で混入したものとみられる。【所見】覆土の状態から中・近世の遺構と判断される。

SK40（第47図、図版21）

【位置】I-2・3 グリッドに位置する。北東側の一部が搅乱により失われている。【形態・規模】平面は楕円形を呈する。規模は、長軸 1.30 m、短軸 1.25 m、深さ 0.42m、主軸方向は N -36° -E を測る。断面は鍋底状を呈し、底面はほぼ平坦である。【覆土】黒褐色土、暗褐色土、にぶい黄褐色土の3層に分層され、ロームブロックを多く含んだ人為堆積である。【遺物】出土していない。【所見】覆土の状態から中・近世の遺構と判断される。



SK35

1. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ローム微量含む。縫まり有、粘性弱。

2. 黄褐色土 10YR3/2 ローム粒・ロームブロックφ 2~5mm 少量含む。縫まり有、粘性弱。

3. 黄褐色土 10YR3/3 ローム粒少量、ロームブロックφ 2~10mm 中量含む。縫まり・粘性有。

SK36

1. 灰黄褐色土 10YR4/2 ローム粒・ロームブロックφ 2~5mm 少量含む。縫まり有、粘性弱。

2. 喀斯特土 10YR3/2 ローム粒・ロームブロックφ 10~30mm 少量含む。縫まり有、粘性弱。

3. 黄褐色土 10YR4/4 ロームブロック土体。縫まり・粘性有。

4. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ロームブロック土体。縫まり弱、粘性有。

SK37

1. 灰黄褐色土 10YR4/2 ローム粒・ロームブロックφ 5~40mm 多量(20%)含む。縫まり有、粘性弱。

2. 喀斯特土 10YR3/3 ローム粒・ロームブロックφ 5~40mm 中量含む。縫まり・粘性有。

3. 黄褐色土 10YR4/4 ローム粒・泥土。縫まり・粘性有。

4. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ロームブロックφ 10~30mm 密に含む。縫まり・粘性弱。

SK38

1. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ローム・ロームブロックφ 5~10mm 多量(20%)含む。縫まり有、粘性弱。

2. 喀斯特土 10YR3/3 ローム粒・ロームブロックφ 5~40mm 中量含む。縫まり・粘性有。

3. 黄褐色土 10YR4/4 ローム粒・泥土。縫まり・粘性有。

4. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ロームブロックφ 5~20mm 密に含む。縫まり・粘性有。

5. 黑褐色土 10YR3/2 ロームブロックφ 10~15mm 少量。灰黄褐色土(10YR4/2)斑状に含む。縫まり・粘性有。

第47図 SK34・35・36・37・38・39・40・41・42

SK41 (第 47 図、図版 21)

【位置】 J-4 グリッドに位置する。【規模と形状】 平面は長楕円形を呈する。規模は、長軸 1.57 m、短軸 1.13 m、深さ 0.20m、主軸方向は N -6° - W を測る。断面は浅い鍋底状を呈し、底面はほぼ平坦である。【覆土】 暗褐色土を主体とし、ロームブロック少量、焼土粒微量含む単層の人为堆積である。【遺物】 出土していない。【所見】 覆土の状態から中・近世の遺構と判断される。

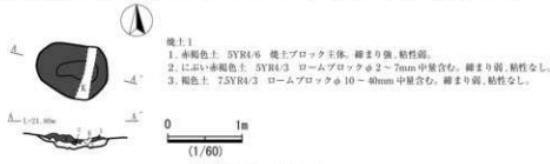
SK42 (第 47 図)

【位置】 I-2 グリッドに位置する。【規模と形状】 平面は楕円形を呈する。規模は、長軸 0.81 m、短軸 0.58 m、深さ 0.13m、主軸方向は N -10° - W を測る。断面皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。【覆土】 ロームブロックを少量含む暗褐色土の単層の人为堆積である。【遺物】 出土していない。【所見】 覆土の状態から中・近世の遺構と判断される。

(3) 焼土

焼土 1 (第 48 図、図版 21)

【位置】 D-5 グリッドに位置する。一部擾乱により失われている。【規模と形状】 平面は長楕円形で、断面は皿状を呈する。よく被熱している。規模は、長軸 0.97 m、短軸 0.69 m、深さ 0.15m、主軸方向は N -77° - W を測る。【覆土】 よく被熱した火床面と地山の硬化したローム土である。【遺物】 出土していない。【所見】 被熱面が表土直下であることから、中・近世の遺構と判断される。



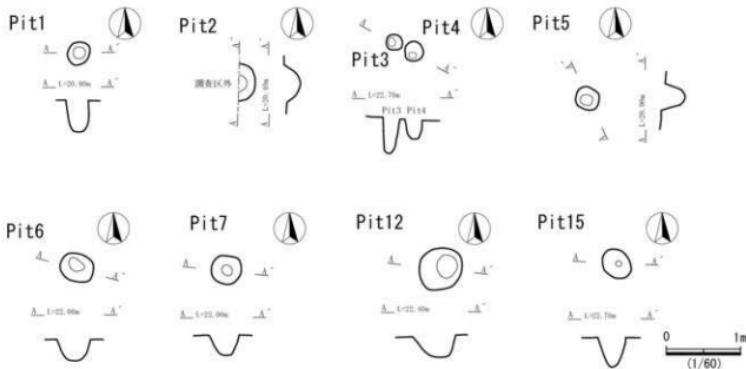
第 48 図 焼土 1

(4) ピット (第 49 図)

今回の調査では、ピット 15 基を検出している。Pit8-9-10-11-13 は SI7 の周囲にあり関連性が想定されることから、SI7 と合わせて報告した。なお、Pit14 は SK39 に近接しているため、SK39 と合わせて報告した。

Pit1 は C-2 グリッドに位置し、最大径 33cm・深さ 42cm、Pit2 は B-1 グリッドに位置し、西側が調査区外で最大径 50cm・深さ 21cm、Pit3 は K-1 グリッドに位置し、最大径 22cm・深さ 48cm、Pit4 は K-1 グリッドに位置し、最大径 26cm・深さ 27cm、Pit5 は B-3 グリッドに位置し、最大径 31cm・深さ 31cm、Pit6 は D-3 グリッドに位置し、最大径 46cm・深さ 28cm、Pit7 は D-3 グリッドに位置し、最大径 31cm・深さ 27cm、Pit12 は E-3 グリッドに位置し、最大径 64cm・深さ 28cm、Pit15 は J-2 グリッドに位置し、最大径 43cm・深さ 38cm を測る。

各ピットの配置に規則性は認められず、それぞれ単独で検出されている。覆土はいずれも暗褐色土を主体とし、ローム粒を含む単層で、縫まりが弱い。各ピットに伴う遺物は検出されていないが、覆土の状態から中・近世の遺構と判断される。



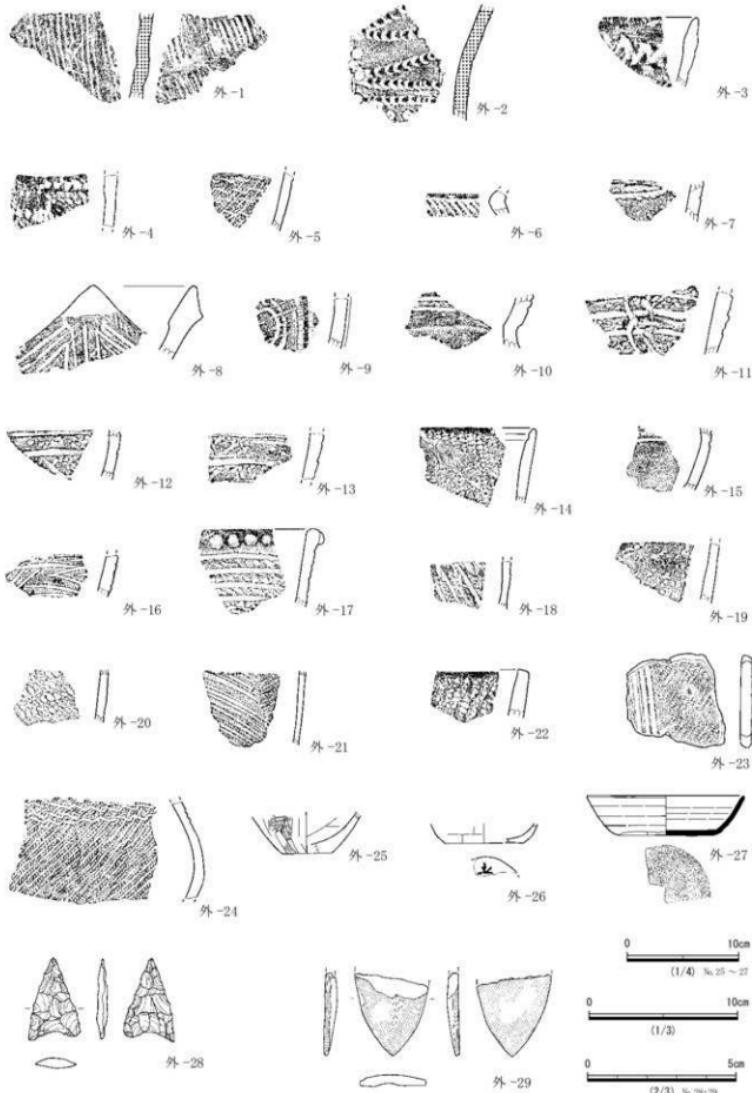
第49図 Pit1・2・3・4・5・6・7・12・15

第7節 各時期の遺構外出土遺物（第50図、第17表、図版26）

今回の調査において、表土掘削及び遺構検出中に出土した遺物、また遺構中より出土したがその遺構に伴わない遺物を遺構外出土遺物として取り扱っている。総点数は130点で、時期は縄文時代から中・近世まで認められる。表土中に含まれていた遺物は少なく、いずれも細片であり、摩耗して角をすり減らした状態のものが多い。検出された遺構の時期と同時期の遺物の他に、遺構が検出されていない時期の遺物も出土している。ここでは各時期から29点を図示し、まとめて報告する。

1～23は縄文時代の遺物である。1は早期後半条痕文系茅山下層式土器である。該期の遺構は未検出であり、遺物も少ないが調査区北側の包含層近辺に分布していることから関連性に注目する必要がある。2～5は前期の土器で黒浜式、浮島Ⅱ・Ⅲ式、栗島台式、次いで6～10は中期初頭の土器で五領ヶ台式～阿玉台Ia式が認められる。23の土器片錐は五領ヶ台Ⅱ式のものを加工したものである。11～21は後期の土器で、堀之内式、加曾利B式、曾谷式、安行式が見られ、Gグリッドライン以北で出土するが、該期と判断される遺構は確認されていない。24は弥生時代の遺物である。H-4グリッドより出土した甕で、SI6の5（第22図）とは胎土や形状が類似し、同一個体の可能性が高い。25は古墳時代前期の土器甕でI-2グリッドSD1より出土した。外面にハケ調整が施され、やや小型である。26・27は奈良・平安時代の遺物である。26は土器甕の底部片でG-5グリッドより出土し、底面に墨書が認められる。一部が欠損しているため判読は難しいが、現代の漢字で見る「ヲ（おいかんむり）」の部首に近いと思われる。27は須恵器甕でSI2周辺のB-3グリッドより出土した。形状と胎土が類似し、時期も同様と考えられるため、SI2（第33図）に関連する可能性が高い。

土器以外では、28の黒曜石製の石鎌が単独でH-4グリッドより出土しており、縄文時代のものと判断される。29は滑石製模造品でSD2より出土している。剣形の一部とみられ、古墳時代中期から後期の所産と考えられる。ただ、今回の調査では遺構が検出されていないため、周辺に該期の遺構が存在する可能性もある。



第50図 遺構外出土遺物

第17表 遺構外出土遺物観察表

遺構番号	図版番号	種類 器種	目録 登録高 度	部品・保存率・製作技法・その他の特徴	断土	色調 (外面/内面)	機能	備考
1	調査 測定	—	(5.6)	脚部片、外面部具被文。	雄雞、白色粒、石英	7. SYB6/4にぶい根 7. SYC5/1黒褐色	普通	C-3・S18出土。早期 後半茅山下層式。
2	調査 測定	—	(7.8)	脚部片、地文無文、円形竹管文と模状爪形文でモチーフを抽出す る。	雄雞、石英	7. SYB6/6根 10W7/4にぶい黄褐色	普通	B-4出土。前期須佐 式(新)。
3	調査 測定	—	(4.7)	口縁部片、地文無文、口唇部先端部、被具痕文。	石英、雪母、赤褐色粒	SYB5/4にぶい赤褐色 SYB5/5にぶい赤褐色	普通	G-3出土。前期浮島 式II。
4	調査 測定	—	(3.5)	脚部片、地文無文、三角形が横走する、表面摩耗顯著。	雪母、赤褐色粒	10W7/4にぶい黄褐色 10W6/2灰黃褐色	普通	B-5出土。前期浮島 式。
5	調査 測定	—	(4.0)	脚部片、地文無文、地文單脚S字開文、筋状文4条を施文。	石英、長石	7. SYB6/6根 SYB5/6灰褐色	普通	G-4出土。前期栗島 台式。
6	調査 測定	—	(1.7)	脚部片、斜行沈縫文を充填。	石英	SYB6/4にぶい根 SYB6/4にぶい黄褐色	普通	I-1区前庭、中隔 E隔々台式(古)。
7	調査 測定	—	(2.7)	脚部片、地文無文、連続刻痕列。	石英、長石	10W6/3にぶい黄褐色 SYD1/1黒褐色	普通	S03出土。中期玉 置式。
8	調査 測定	—	(5.0)	口縁部片、放矢口縫、地文無文、3本組の沈縫に上りモチーフを 抽出する。	石英、雪母、砂粒	SYB5/4にぶい赤褐色 7. SYB6/3にぶい根	普通	S19出土。中期玉 置式(新)。
9	調査 測定	—	(3.5)	脚部片、地文無文、X文を施文、半載竹管状工具による連続刻痕文 を抽出してセラ。あるいは12形のモチーフを抽出する。	石英、長石、雪母、砂 粒	SYB5/4にぶい赤褐色 SYB5/4にぶい赤褐色	普通	G-5出土。中期玉 置式(新)。
10	調査 測定	—	(3.6)	脚部片、地文無文、屈曲部直上に3本組の沈縫が横走する。	石英、雪母、砂粒	SYB4/4赤褐色 SYB5/4にぶい赤褐色	普通	G-4出土(新)～阿禾 台式。
11	調査 測定	—	(4.3)	脚部片、地文単脚開文、太いV溝によりモチーフが抽出され る。内部ヨコナガ。	白色粒、石英、赤褐色 粒	10W6/4にぶい黄褐色 SYB5/4灰褐色	普通	G-3出土。後期報之 内式。
12	調査 測定	—	(3.3)	脚部片、地文無文、粗繩文、粗繩文、粗製。	白色粒	SYB6/4にぶい根 7. SYB6/6根	良好	G-3出土。後期報之 内式。
13	調査 測定	—	(3.1)	脚部片、地文繩文、粗繩文、粗製。	白色粒、石英、赤褐色 粒	10W5/3にぶい黄褐色 7. SYB6/4にぶい根	普通	S03出土。後期報之 内式。
14	調査 測定	—	(5.6)	脚部片、单脚開文X。口唇部内面凹彎文。	石英、雪母	10W7/3にぶい黄褐色 10W7/4にぶい黄褐色	普通	S11出土。後期報之 内式。
15	調査 測定	—	(4.2)	脚部片、沈縫により区画された開文が割離される。	白色粒、石英、雪母	SYB6/4にぶい根 SYB5/4灰褐色	良好	S02出土。後期加曾 利式。
16	調査 測定	—	(2.8)	脚部片、地文無文、羽状沈縫文。	白色粒、石英、角閃 石、赤褐色粒	10W6/4にぶい黄褐色 10W6/4にぶい黄褐色	良好	S02出土。後期加曾 利式。
17	調査 測定	—	(5.2)	口縫部片、口縫直下に斜面押圧を加えた絆縫文、地文開文、丸棒 状工具による平行地文X、内部ヨコナガ。	石英、雪母、赤褐色 粒	SYB5/5灰褐色 SYB6/6根	普通	S11出土。後期加曾 利式。
18	調査 測定	—	(3.2)	脚部片、地文繩文、平行沈縫文、粗製。	石英、雪母、角閃石	7. SYB6/6根 7. SYB6/6根	普通	D-5出土。後期加曾 利式。
19	調査 測定	—	(4.1)	脚部片、地文開文、内面ナゲ、粗製。	石英、雪母	SYB6/4にぶい根 SYB6/6根	普通	G-5出土。後期加曾 利式。
20	調査 測定	—	(3.6)	脚部片、单脚開文X。内面ナゲ、粗製。	石英、長石、赤褐色 粒	7. SYB6/3にぶい根 7. SYB6/3根	普通	S02出土。後期加曾 利式。
21	調査 測定	—	(5.0)	脚部片、薄石、斜向の条繩文、粗製。	白色粒、石英、雪母	SYB4/4にぶい赤褐色 SYB4/4にぶい赤褐色	普通	G-5出土。後安行 式。
22	調査 測定	—	(3.2)	脚部片、口唇部角状彫、单脚開文X、内面ヨコナガ、粗製。	白色粒、雪母、赤褐色 粒	10W7/3にぶい黄褐色 10W7/4にぶい黄褐色	普通	S02出土。
23	土器品 土器片種	—	長さ:6.3cm、幅:6cm、厚さ:0.8cm、重さ:45.5g。 地文単脚開 文XII。2本の沈縫と斜突列が並走して垂下する。	石英、長石、赤褐色 粒	7. SYB6/6根 10W7/4にぶい黄褐色	普通	S01出土。中期玉 置式(新)。	
24	土器品 燒成	—	(6.5)	脚部片、地文に附加彫刻1種+2でS字状結構文が並走す る。内面凹彎面。	白色粒、石英、雪母、赤褐色 粒	7. SYB6/4にぶい根 SYB6/6根	普通	B-4出土。S16-5と同 個体。
25	土器品 燒成	—	(3.7)	脚～底部片、外面部斜向ハサ、内面ナゲ、内面凹彎面。	白色粒、石英、赤褐色 粒	SYB5/4にぶい赤褐色 2. SYB7/3にぶい根	普通	S01出土。
26	土器品 焼成	—	(1.8)	口縫部片、ロコモ形、体部下端を持ち上げタケヅリ、底面に壓 痕あり。判別不明。	石英、雪母、赤褐色粒	7. SYB6/6根 7. SYB7/4にぶい根	普通	G-5出土。葉森土器、 根。
27	土器品 外	—	(4.9)	口縫～底部25%弱、ロコモ形、底面静止点切り後回転へタケ ヅリ。内面凹彎面。	石英、長石、斜向物、 黑色突出物	SYB6/1灰 SYB6/1灰	覆元	B-3出土。
28	石器 石器	—	長さ:12.8cm、幅:1.7cm、厚さ:0.35cm、重さ:1.5g。石材:墨岩石。は江宗形。	—	—	—	—	—
29	石器品 焼成品	—	(8.4)	脚部、長さ: (2.90) cm、幅: (2.56) cm、厚さ: (0.49) cm、重さ: (3.6) g。石材:滑石。上部欠損50%存 在。内面ヨコナガ。	—	—	—	SB2出土。

第3章 自然科学分析

八千代市麦丸宮前上遺跡 e 地点出土土器付着炭化物の年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

千葉県八千代市麦丸に所在する麦丸宮前上遺跡 e 地点では、縄文時代から古代にかけての遺構・遺物が確認されている。本分析調査では、縄文時代の土坑から出土した土器に付着する炭化物を対象に、年代測定を行い、出土遺物及び遺構の年代観について資料を作成することを目的とする。

1. 試料

試料は、土器 No.1、No.2 の 2 点（いずれも SK19 出土遺物）である。試料を観察した結果、どちらも土器付着炭化物は煤状で少量であったが、No.2 の方がやや土器付着物が多かったため、No.2 の煤状炭化物を削り取り、分析に供した。

2. 分析方法

試料は、塩酸 (HCl) により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム (NaOH) により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid）。本来の濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に 1mol/L であるが、今回の試料は脆弱であるため、アルカリの濃度を薄くして試料の損傷を防ぐ(AaA と記載)。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）は Elementar 社の vario ISOTOPE cube と Ionplus 社の Age3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を NEC 社製のハンドプレス機を用いて内径 1mm の孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした ^{14}C -AMS 専用装置 (NEC 社製) を用いて、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定する。AMS 測定時に、米国国立標準局 (NIST) から提供される標準試料 (HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料 (IAEA-C6 等)、バックグラウンド試料 (IAEA-C1) の測定も行う。

$\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma 68%) に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う (Stuiver & Polach 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正用に用いるソフトウェアは、Oxcal4.3(Bronk 2009) を用いる。較正曲線は Intcal13 (Reimer et al. 2013) を用いる。

3. 結果

結果を第 19 表、第 51 図に示す。

同位体補正を行った測定値は、 $2,695 \pm 20\text{BP}$ である。暦年較正は、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減

期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、その後訂正された半減期(¹⁴Cの半減期5,730±40年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。2σの値は2,846~2,757calBPであり、縄文時代晩期に相当する値が得られている。土器の出土層位や供出する遺物の年代観などの発掘調査成果を含めて検討する必要がある。

第19表 放射性炭素年代測定結果

試料	種別/ 性状	方法	補正年代 (暦年較正用) BP	δ ¹⁴ C (‰)	暦年較正年代			Code No.
					年代値	標準偏差		
No. 2	土器付着 灰化物 (D.01M)	AA	2695±20 (2694±22)	-25.95 ±0.65	σ cal BC 892 ~ cal BC 879 2841 ~ 2828 cal BP 12.7 cal BC 846 ~ cal BC 811 2795 ~ 2760 cal BP 55.5 2σ cal BC 897 ~ cal BC 808 2846 ~ 2757 cal BP 95.4			YU- 7952 pal- 11277

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。

2) 暦年代値は、1950年を基点として算出前の値とする。

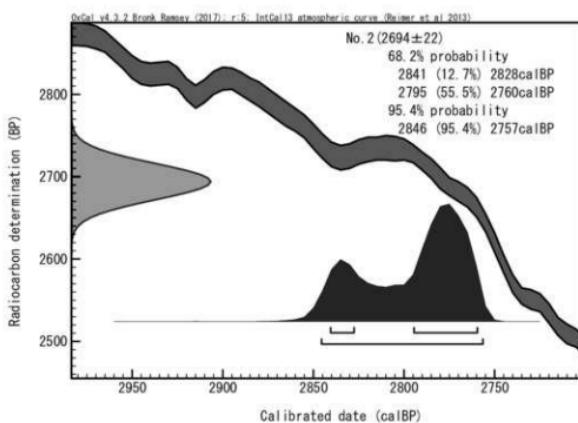
3) 表記した振差は、測定振差 σ (測定値の 68.2% が入る範囲) を年代値に換算した値。

4) AAは、酸・アルカリ・酸処理を示す。AA試料が脆弱なため、アルカリの濃度を薄くして処理したことを示す。

5) 暦年の計算には、補正年代(○)で暦年較正用年代として使用した。一括目を丸める前の値を使用している。

6) 表記を丸めるのが慣例だが、較正曲線や較正プログラムが改訂された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

8) 統計的に真の値が入る確率は、σ が 68.2%、2σ が 95.4% である。



第51図 暦年較正結果

引用文献

- Bronk RC., 2009. Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon 51, 337-360.
- Reimer PJ., Bard E., Bayliss A., Beck JW., Blackwell PG., Bronk RC., Buck CE., Cheng H., Edwards RL., Friedrich M., Grootes PM., Guilderson TP., Halfdansson H., Hajdas L., Hatté C., Heaton TJ., Hoffmann DL., Hogg AG., Hughen KA., Kaiser KF., Kromer B., Manning SW., Niu M., Reimer RW., Richards DA., Scott EM., Southon JR., Staff RA., Turney CSM., van der Plicht J., 2013. IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon, 55, 1869-1887.
- Stuiver M., & Polach AH., 1977. Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of ¹⁴C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.

第4章　まとめ

第1節　土地利用の変遷

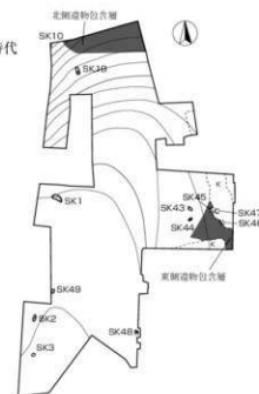
今回の発掘調査によって、縄文時代から中・近世までの遺構が検出され、各時期に多少の空白期は認められるものの、断続的な生活の痕跡を確認することができた。以下では麦丸宮前上遺跡e地点における、土地利用の変遷を時代ごとに概観したい。

縄文時代

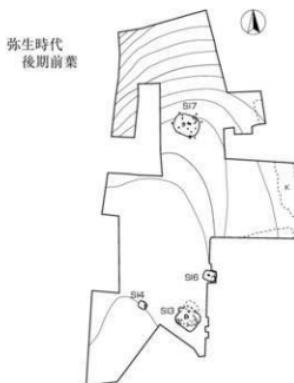
本地点で最初に人的な活動が開始されるのは縄文時代になってからである。遺構は土坑12基と遺物包含層2ヶ所を確認しており、そのうち調査区北端部では傾斜地に形成された堆積土中からは、SK19とB-2グリッド2区を中心とした遺物が集中している。土器は細片が多いものの、北側遺物包含層（以下北包）出土の1の無文で底面が隅丸方形状を呈する角底形土器（第11図）や、SK19の1の深鉢形に短い注口が作り付けられた注口付土器が出土している（第9図）。出土状態や土器の特徴等については後述するが、北包出土の無文土器は、その形態や石器に旧石器時代終末期から縄文時代草創期に特徴付けられる9の有舌尖頭器が共伴することも含めて考えると、縄文時代草創期の所産と判断され、縄文時代のかなり古い時期から生活が営まれていたと考えられる。その他の土坑11基は伴出遺物がなく時期は不明瞭ではあるが覆土の状態などから縄文時代の所産とみられる。また、遺構外から出土した土器には早期の茅山下層式、前期の黒浜式、浮島式、粟島台式、中期の五領ヶ台式、阿玉台式、後期の堀之内式、加曾利B式、安行式、曾谷式土器がそれぞれ出土し、出土量は少ないものの調査区北半で多く認められ、偏重傾向が窺われる。これにより本地点及びこの周辺において縄文時代には草創期から後期にかけて、連綿と活動した可能性が示唆される。

弥生時代

弥生時代の後半期になると、堅穴建物跡を構築した集落が展開する。遺構は堅穴建物跡4棟、ピット6基を検出しており、散在的な分布を見せてている。各堅穴建物の平面形状はSI7が小判形であるのに対し、SI3・4・6は隅丸長方形を呈するなど、一様ではない。またSI4は小型で掘り込みも深く、炉も検出されていないなど、他の堅穴建物と異なる様相から貯蔵施設などの用途も想定される。各堅穴建物



第52図 縄文時代遺構分布図



第53図 弥生時代遺構分布図

からの出土遺物はいずれも少なく細片が多い。これら多くは壺とも広口壺ともとれる縦長の器形で、複合口縁で縄文が施文され、口縁部下端に刺突などがみられるものがある。頭部には櫛描文により縦区画や横走文、小波状文、山形文などが施文され、胴部には附加条第1種縄文が施される。いわゆる「北関東系土器」と称される土器が主体を為しており、南関東系の久ヶ原式は出土していない。これらの出土した土器から弥生時代後期前葉を中心とする時期と判断される。SI6では臼井南式とみられる土器片が1点出土し、複合口縁で段差が低く下端処理がみられず、頭部無文のものも含まれることからこちらは新相を示す。

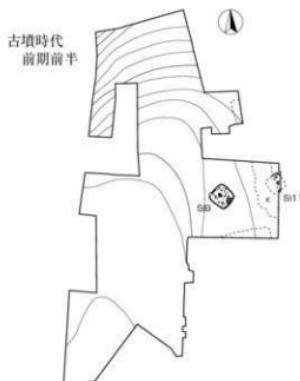
古墳時代

古墳時代の遺構は本地点では前期を中心に検出されており、竪穴建物跡2棟が、調査区中央の東側に偏在している。

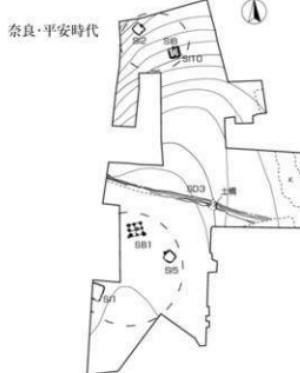
SI11は未調査部分も多く、出土遺物も極めて少なく、ナデ調整とみられる壺の口縁部片のみに留まったが、一方でSI9では遺存状態の良好な遺物が多く出土している。SI9の床面には焼土や炭化材も多く見られ、焼失した建物跡である可能性が高い。出土した遺物を見ていくと土師器壺は台付と平底、またハケ調整とナデ調整の両者が混在している。輪積装飾を残す古相を示す壺も認められるが、口唇部にキザミはみられない。高坏は無縫のもので占められ、脚部が直線的に開く器台も出土している。小型精製土器では小型丸底壺はみられないものの、祭祀的な用途の可能性をもつ在地系の小型の壺・壺・鉢類が良好な状態で出土し、模造品の可能性がある土製品も2点認められる。以上の出土遺物や遺構形態から、SI9は古墳時代前期前半の時期と判断され、関連してSI11も近い時期のものと判断される。遺構外としては弥生時代後期前葉の竪穴建物跡SI7に廃棄されたとみられる古墳時代前期後半の土師器の壺・壺・高坏が纏まって出土している。また、SD2からは僅かに1点だが混入した古墳時代中期から後期の劍形の石製模造品が出土するなど、検出されていない時期の遺構の遺物が認められることは、後続する時期の遺構が周辺に広がる可能性を示唆している。

奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構は竪穴建物跡5棟、掘立柱建物跡1棟、溝状遺構1条を検出した。北へ張り出す舌状台地を区画するかのように東西方向へSD3が伸び、南側の平坦地と北側の斜面地を区切っているようにも見える。そこには土橋が施設され、南北の往来を目的としたことも想像される。その北側の奥の傾斜地にSI2、SI8、SI10が位置しており、SI8とSI10は同位置で重複している。SI10を建替え・拡張したものがSI8となる。溝の南側にはSI1、SI5、SB1が散在する。遺構分布は希薄であり、主軸方向も統一性は認められないが、SD3を境界として北側と南側、それ



第54図 古墳時代遺構分布図



第55図 奈良・平安時代遺構分布図

それで集団化していた可能性も考えられる。各堅穴建物跡の規模はSIIを除き、小型で柱穴もみられない。SBIは二間×二間の総柱建物で比較的小規模な建物跡と判断される。各遺構から出土した遺物から時期を検討すると、SI10が8世紀後葉の時期に出現し、その後、建替えたSI8とともに8世紀末から9世紀初頭を中心に、他の建物群が構築されたとみられる。SIIでは須恵器蓋の転用硯、SI2では灯明に使用された可能性のあるタールの付着した非ロクロ成形の土師器壺、SI8からはやや小振りの鉄鉢形の須恵器など特徴ある遺物も出土し、それぞれの集団の性格を窺わせる資料として注目される。

中・近世

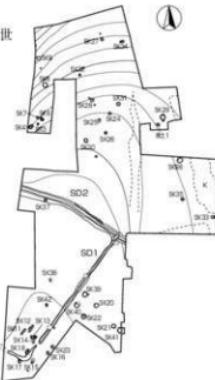
中・近世の遺構は溝状遺構2条、土坑37基、ピット9基、焼土1基を検出した。いずれの遺構も伴出遺物がみられず、混入した縄文土器片や土師器片で出土遺物は占められる。時期は覆土の状態などから、中・近世のものと判断した。該期の遺物とみられるものは、表土より出土した陶器片の僅かに5点に留まる。

SD2は奈良・平安時代のSD3同様に舌状台地を区画するようおよそ東西方向へ延びる。一方、SD1はSD2に比べて浅く細い溝で、K-1グリッドでL字状に曲がり、1ヵ所、通路としたためか途切れた部分がある。走行方向は北東方向へ直線的に延びSD2に合流する。SD1・2双方の溝は、規模に差はあるものの、直交して方形状に区画していることが捉えられ、何らかの目的のため設けられた一連の遺構とみられる。SD2はその規模から獸など外敵の侵入を防ぐための可能性も考えられる。

土坑は調査区の北側と南側にやや纏まって検出されている。その平面形状は円形、楕円形、隅丸長方形など多岐にわたりその性格は判然としない。北側の土坑群は散在的で規則性が認められず、不明瞭である。一方、南側の土坑はSD1周辺で掘り込まれているものが多く、溝の走行方向と土坑の長軸方向が、近似していることから関連性の高さが窺われる。そのうち、SK11・12は平面長方形で深く、農作物を害獣より守るために落とし穴の類や、いわゆる「いも穴」などの貯蔵施設なども想定される。SK33は階段状に東へと下っており、その東側は調査区外となるため全容は明らかではないがあるいは地下室のような性格も想定される。各遺構の性格は不明瞭だが耕作に関連した遺構の可能性が高く、本地点の中・近世は集落を離れ耕地として利用されていたであろう。

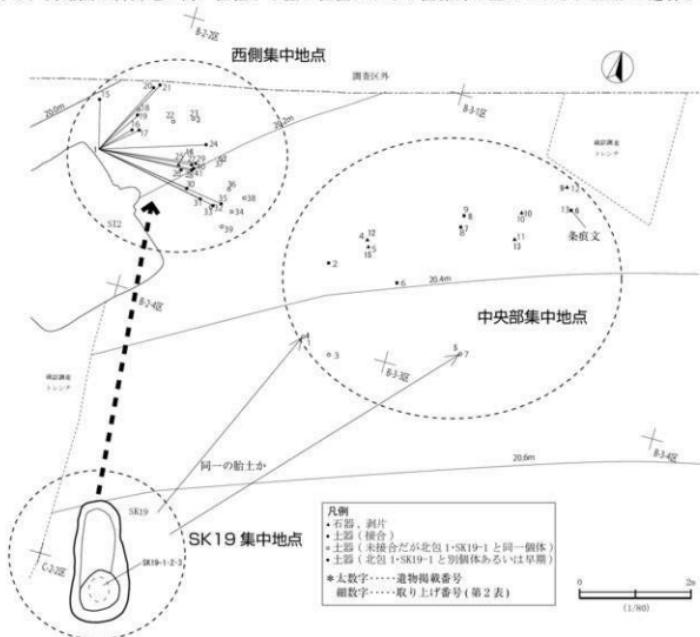
第2節 北側遺物包含層から出土した縄文土器について

本地点から検出された縄文時代の遺物包含層は北側と東側の2ヶ所であったが、北側の遺物包含層から有舌尖頭器とともに無文土器が出土した。この無文土器は出土した時点では細片であったが、16点が接合されたことで口縁部から底部にかけての器形を復元することができた。それにより、無文土器は底部が方形状を呈することがわかり、その器形と同遺物包含層中から有舌尖頭器が共伴したことから縄文時代草創期の遺物群であることが想定された。また、SK19とした遺物包含層範囲内の落ち込みからも方形状を呈する注口付土器が出土し、成形技法や胎土が類似していたためこちらも縄文時代草創期の可能性がでてきた。ここではこの2個体の土器に注目して検討してみたい。



第56図 中・近世遺構分布図

北側遺物包含層の堆積する地点は、今回行った調査区の北端に位置しており、また麦丸宮前上遺跡としての北端でもある。さらにその北側では新川から入り込んだ小支谷が深く回り込んでいるため、舌状を呈した地形が形成されている。遺物包含層は標高 20.8 m 付近から北側へ向かって調査区境界の標高 20.3 m 地点まで下る緩斜面地に堆積しており、下るほどに層厚を増している状態であった。さらに南西側の標高 20.6 ~ 20.7 m 地点には SK19 が確認され、覆土が遺物包含層と類似していることから、同時期かそれ以前に掘り込まれた土坑と判断された。この遺物包含層から出土した遺物は総点数で 41 点とあまり多くはない。そのうち土器は 34 点でいずれも無文土器の細片である。石器類は 7 点で、製品は有舌尖頭器（第 12 図の 9）の 1 点のみである。それ以外は全て黒曜石の剥片で、剥片としては比較的大きめのものが主体であるが、剥離痕は認められるものの製品とされるものはなかった。遺物の平面分布を見ると、概ね包含層西側の B2-2 グリッド周辺（西側集中地点）と中央部の B3-1 グリッド周辺（中央部集中地点）の 2ヶ所にまとまる傾向にある。そして西側部分は集中度が高いのに対し、中央部はまばらに点在した出土状態が捉えられた。垂直分布（第 10 図）では、平面分布で見る西側集中地点の遺物は包含層中下層からの出土が主体であるのに対し、中央部集中地点ではほとんどが上層から中層にかけての出土が把握された。一方、SK19 とした窪みの中からは同一個体の破片がまとまって出土した（SK19 集中地点）。ここで注目したいのは西側集中地点と SK19 集中地点の位置である。両地点は斜面地の高い位置から低い位置にかけて直線的に並んでおり、SK19 の遺物が西側



第 57 図 北側遺物包含層遺物分布図

集中地点まで土砂などにより流された可能性にも注意する必要があるだろう。

出土した遺物の内容を見ていくと、西側集中地点では底部が方形状で無文の深鉢型土器（第11図北包-1）の破片ではば占められているのに対し、中央部集中地点では西側集中地点の無文土器とは異なった胎土の早期と思われる無文土器（同図北包-7・8）やSK19出土の土器に類似した胎土の無文土器（同図北包-4・5）、纖維を含んだ土器などが混在している。石器や剝片もほとんどがこの地点からの出土になる。SK19集中地点の内訳は7片が接合した注口付土器1点（第10図SK19-1）、口縁部から胴部にかけての土器（13片接合のSK19-2）、底部片（SK19-3）、未掲載11点であった。

以上、遺物包含層及びSK19の状況を概観したが、これらを踏まえつつ、ここからは出土した底部方形の無文土器（以下北包-1）とSK19出土の注口付土器（以下SK19-1）について検討したい。

北包-1は、厚さが口縁部で3mm、胴部で6～7mmである。器体の成形は口縁部周辺が外面とともに横方向のナデ、胴部の外表面が縱方向のナデ・ケズリ、内面は不定方向のナデによって整形されている。口縁部は凹凸が認められることから指頭によるナデとみられ、胴部はヘラ状工具を用いたと考えられる。こちらもナデ・ケズリ痕がやや明瞭で、内面は全体に凹凸が顕著であることから器面がやや荒れた感じを受ける。胎土には白色粒が多めに含まれ、焼成は非常に良く堅牢である。器形は胴部下端から口縁部にかけてほぼ直立し、口縁部付近でわずかに内側へ向けながら口唇部はやや先細りの形状となっている。口径は概ね18.8cm、器高は14.5cmで口径が器高を上回っていた。胴部下端はわずかに突出するようであるあまり目立たない。底部は隅丸の方形形状を呈している。

SK19-1は、厚さが口縁部で4～5mm、胴部で7mmである。器体の成形は口縁部外面ともに横方向のナデ、胴部は外表面が縱・斜方向、内面は上半を横方向、下半を不定方向のナデで整形されている。口縁部内面にはわずかに凹凸が認められることから指頭による横方向のナデがめぐらされている。胴部の内面も下半はやや凹凸が目立ち、指頭による整形がおこなわれたとみられる。胎土には白色粒が多めに含まれ、焼成は良好で北包-1よりは器面が平滑で綺麗な感じを受ける。器形は胴部から口縁部にかけて直立し、口唇部は角頭状の面取りが主体のようではあるが一様ではない。口縁部内面直下が指頭により強く押圧されているためか内側へ傾く度合いが若干強いように見える。底部は残存しなかったが、口縁部の形状は隅丸方形を呈していたものと想定される。注口部は口縁部直下約10mmのところに内側から穿孔され、3mm程突出した孔径は推定で15mm程とみられる。注口付土器は上半のみの復元に留まるが、口径の規模や胴部の立ち上がる形状、出土位置の觀点から北包-1と同一個体である可能性も考えられる。草創期に比定される注口付土器は室谷洞窟出土例が知られているが、口縁部直下に取り付けられた注口部はSK19-1と形状が類似し、関連性が注目された。そこで、一部破片の器面に残存していた炭化物から14C年代測定法（AMS法）を実施したが、縄文時代晚期の数値が示された（第3章）。第2章第2節でも言及したが、この注口付土器の分析については、サンプルが注口付土器の本体からは採取できなかったため、一括で取り上げた中で成形や胎土から明らかに同一個体と判断した破片から採取している。こういった不確定要素はあるものの結果は予想に反するものとなっている。なお、北側遺物包含層中の出土遺物の中にも注口付土器の注口部と思われる破片が認められる（第11図・北包-1）。胎土は類似するものの、SK19-1の注口部とは接合せず、明らかに別個体の注口部と考えられ、注口付土器が2個体存在していた可能性も残されている。

縄文時代草創期の無文土器については東北を中心に出土例が多く、これについては細分化が試みられている（中野2008）。その分析と本地点の出土土器を比較してみたい。まず、無文土器には器厚が

3～7mm程度の「薄手無文土器」と7～9mmの「厚手無文土器」の二者があり、本地点の無文土器は「薄手無文土器」の範疇に該当する。また輪積みを薄くひきのばす成形や、口縁部周辺が指頭痕、胴部が縱方向のナデ・ケズリ調整、平底で胴部から口縁部が直立する器形は「薄手無文土器」の要件を満たしている。編年的には「薄手無文土器」が「厚手無文土器」より古いとされ、さらに「薄手無文土器」は器厚が薄く指頭痕が顕著で、底面の平面形が方形を呈し、口径が器高を上回る特徴の第1段階のものと、口縁部が外側に肥厚させ、口縁に沿って横方向にナデ・ケズリ調整を施す第2段階のものに細分されているが、これらを当てはめた場合、北包-1・SK19-1はともに「薄手無文土器」の中でも古相となる第1段階に位置づけられよう。

編年の位置づけに関しては、これまでの出土事例と層位・共伴関係の検討から「厚手無文土器」には早期撫糸文系土器に伴うことが理解されているが、「薄手無文土器」は草創期後半とする見解と草創期後半から早期初頭とする見解に二分され、さらに「厚手無文土器」と「薄手無文土器」が連續性を持つているかが問題視されている。

そこで改めて本地点の出土状態を振り返ってみると、平面分布では、北包-1・SK19-1は西側に集中しているが、それ以外は東側に多く、出土状態も散在的である。層位的には本地点の遺物包含層を細分することができなかったものの、この包含層を基準にして見た場合、北包-1・SK19-1の遺物は下層に、それ以外の遺物は上層に概ね分布していることが垂直分布より看取される。そして東側の遺物には早期条痕文系の遺物が出土しているものの、撫糸文系土器は認められず、調査区全体を見ても該期の遺物は認められない。これらの点を踏まえて本地点の無文土器の出土状態に限ってみれば、北包-1は東側の中央部集中地点の土器群より古い時期にあり、撫糸文系土器群など早期遺物との関連性が認められない、草創期の土器群であったと考えられる。

北側遺物包含層出土の草創期とした底部が方形の無文土器は、知る限りにおいて関東では類例に乏しい。その中で口縁部から底部まで復元できたことは大きな成果であった。しかし有舌尖頭器とともに遺物包含層にあるという出土状態にあって、土器の形状から共伴もしくは同一個体と考えられた注口付土器については、自然科学分析における年代測定で残念ながら齧齧が生じる結果となった。そうなると、底部方形の無文土器も果たして草創期の所産ではなく、晩期の遺物ではないのかという疑問を呈されるところではあるが、現段階では土器の形状や技法から見ても晩期の可能性は低いと考えられる。今回は年代測定に用いた資料が接合していないという点で決定的な確証は得られなかったが、これらを解明していくためにも、今後の周辺地域におけるデータの蓄積を待ちたい。

【参考・引用文献】

- 千葉県文化財センター／編 2004 「千葉県文化財センター調査報告 第464集 船橋印西編埋文化財調査報告書2－八千代市道跡－」
都市基盤整備公団 千葉県文化財センター
2004 「千葉県文化財センター調査報告 第473集 船橋印西編埋文化財調査報告書3－八千代市間穴道跡－」
都市基盤整備公団 千葉県文化財センター
2005 「千葉県文化財センター調査報告 第559集 船橋印西編埋文化財調査報告書4－八千代市間穴道跡(2)－」
独立行政法人都市再生機構 千葉県文化財センター
2006 「千葉県教育振興財團調査報告 第559集 船橋印西編埋文化財調査報告書5－八千代市鳥込内道跡(2)・
間穴道跡(3)・道地遺跡(2)－」独立行政法人都市再生機構 千葉県文化財センター
2008 「第Ⅱ部様式各節」『千葉県八千代市栗谷道路(仮)』八代カルチャータウン開発事業関連埋文化財調査報告書1
中野拓大
八千代市道跡調査会
2001～2003 「千葉県八千代市栗谷道路(仮)」八代カルチャータウン開発事業関連埋文化財調査報告書1
第1分冊、第2分冊、第1章本文部編／八千代市道跡調査会
2008 「千葉県八千代市川崎山道路－[地]点埋文化財調査報告書－」大成建設株式会社 八千代市道跡調査会
八千代市教育委員会
2007 「八千代市 梶原後遺跡－苦塙事業関連道跡発掘調査報告書(仮)」八千代市教育委員会
2010 「麦久宮前上遺跡-a地区」千葉県 八千代市 内道跡発掘調査報告書(平成21年度) 八千代市教育委員会
2011 「麦久宮前上遺跡-b-c地区」千葉県 八千代市 内道跡発掘調査報告書(平成22年度) 八千代市教育委員会
2016 「麦久宮前上遺跡-d地区」千葉県 八千代市 内道跡発掘調査報告書(平成27年度) 八千代市教育委員会
八千代市史編さん委員会
1991 「八千代市の歴史 資料編 原始・古代・中世」八千代市
2008 「八千代市の歴史 通史編 上」八千代市

写 真 図 版



調査前現況① 北から



調査前現況② 南から



I区南側全景 南から



I区北側全景 北から



I区全景（空撮）